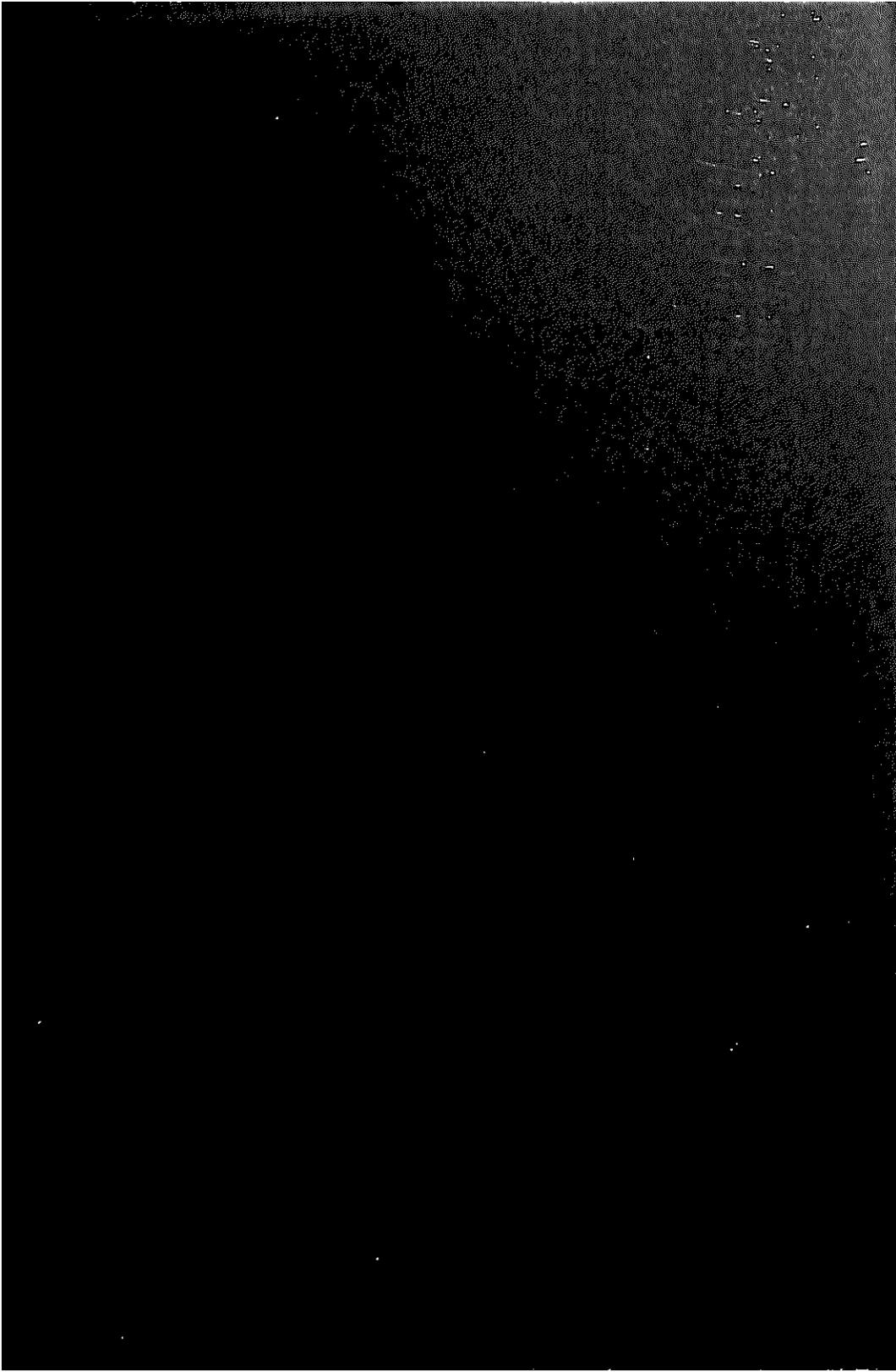


昭和44年度

都 倫 研 紀 要

——どう指導内容を精選するか——

第 8 集



# は し が き

会長 徳久鉄郎

高等学校教育は今日、ある曲り角にきているといわれる。大学紛争のあおりが、東京都の公私高校に移って、全国的に大きな関心の対象になってきたためである。本質的には、紛争の因子は従来から内在していたともいわれる。入試教育の偏向が高校教育に定着し始めた時、反撥として生じたのである。高校らしい自由なふんいきの喪失と締めつけへの反抗が、紛争の過程に見られるからであるなどという。

しかし、真相はちがうと現場からの言い分もきこえる。他からの誘導に乗せられた一部高校生の安定のない流行を追う傾向に起因すると見るのである。「倫理・社会」という科目に対する批判も、すくなく存在する。倫社の時間に、物を考えさせることが紛争への素地を培っているというのである。

いったい、われわれ現場の教師がこうした紛争や非難において果たしてきた役割は何であったか。いわれる如き、大きな役割を与えてきたであろうか。透徹した認識を与え、行動への起爆力を与えるほど有力であったろうか。むしろ数学や英語の緊張を緩和するためのいこの時間を設定したにすぎないのではなかったか。

7周年を迎えんとする倫社の将来は多難である。このような時期に都倫研では「倫社の指導内容の精選」という困難な問題と取組み、その研究と討議の精華を世に送ることになったことは誠に意義深いことであり、よろこびにたえない。関係者の労を謝すとともに、覚悟をあらたにする次第である。

昭 45. 2. 14

# 目 次

は し が き	会 長	徳久 鉄郎	1
I	本年度の研究主題と研究組織	研究責任者 井原茂幸・高野啓一郎	4
II	本年度の研究経過の概要	同	7
III	研 究 報 告		
1.	第一分科会・現代社会と人間についての精選		
(1)	第一分科会の研究経過報告	世話人 小川輝之・高瀬康好	9
(2)	「現代社会と人間についての精選」の考え方	同 上	11
(3)	青年期の課題	高瀬 康好	16
(4)	大衆社会と人間疎外	木村 正雄	20
(5)	大衆社会と人間存在	香川 弘	24
(6)	ヒューマニズムの探求	潮 安	28
(7)	人格の発達	塚田 哲男	33
2.	第二分科会・思想内容による人物中心の精選		
(1)	第二分科会の研究経過報告	世話人 佐藤哲男・渡辺 浩	37
(2)	「思想内容による人物中心の精選」の考え方	同 上	39
(3)	ギリシャの思想—ソクラテス	海野 省治	43
(4)	キリスト教思想—イエス・パウロを中心として	御厨 良一	47
(5)	デカルト	村松悌二郎	51
(6)	啓蒙思想—ルソー	小平 克	55
(7)	イギリス功利主義—ベンサム	杉原 安	59
(8)	社会主義思想—マルクスを中心として	菊地 堯	63
(9)	実存主義—キルケゴールを中心に	佐藤 哲男	67
(10)	仏教の思想—ジャカ	金井 肇	71
(11)	親鸞・日蓮・道元	石森 勇	75

(12) 国学一本居宣長	川瀬 吉郎	79
(13) 日本の近代思想	渡辺 浩	83
3. 第三分科会・主題・類型別観点からの指導内容の精選		
(1) 第三分科会の研究経過報告 世話人 沼田俊一・寺島甲祐		87
(2) 「主題・類型別観点からの指導内容の精選」の考え方	同上	88
(3) 人間の行動	永上 肆朗	91
(4) 人間と道徳	井原 茂幸	95
(5) 文化と人間	小川 一郎	99
(6) 家庭生活と人間	中村 佑二	103
(7) 国家と人間	佐々木誠明	107
(8) 世界観、人世観の序章—ガエタノ・コンプリ・鮎沢 真澄・沼田 俊一		111
(9) 宇宙における人間の地位(存在の問題)	同	112
(10) 世界、この妙なる存在(世界観の展望)	同	114
(11) 人間・この未知なるもの(人間観の展望)	同	121
(12) 宗教と人間	同	124
(13) 弁証法的唯物論	寺島 甲祐	131
(14) 観念論	寺島 甲祐	135
(15) 創造論(ユダヤ教、キリスト教、イスラム教)	高野啓一郎	139
(16) インドの世界観(仏陀と原始仏教)	細谷 齊	143
4. 特別分科会		
研究主題・研究経過の報告 世話人 中村新吉・金井 肇		147
○ 事務局より・会則・事務局組織内規		151

# I 本年度の研究主題と研究組織

研究部長 井原 茂 幸

副部長 高野 啓一郎

## 【本年度の研究主題】

「倫理社会の指導内容の精選について」

## 【研究主題のねらい】

倫社の指導内容については都倫研発足以来問題とされてきたことではあるが、これを研究主題として取上げる機会にめぐまれなかった。学習指導要領に示された指導内容をどのように深化し、それをどのように生徒に理解させるかの研究と工夫に過去5年間に費やされてきたといってもよい。高校の教育課程の再検討期を迎え、倫社も漸く反省期を迎えようとしている。「倫社の指導内容の精選」の問題は過去の倫社の授業の実践と反省の中から自然に提起されてきた問題でもある。限られた2単位時間の中で、何をどのようにねらいの下で取扱うかの問題をめぐって幾多の論議がある。しかし我々は会員の先生方の熱心な協力と研究の下にこの困難な問題と取組みたい。そして倫社を、ひいては高校教育を70年代の将来に向かって推進する大きな力としてたいと念願するものである。

精選の考え方はさまざまであるが、大別して(a)人物中心の精選の考え方、(b)類型別精選の考え方、(c)主題別精選の考え方、(d)思想内容の精選の考え方に分けることができる。これらの考え方を一つに集約することは至って困難なことであり、またその必要もあるまい。ただ我々はこうした考え方を研究討議によって深め、いくつかの精選の考え方に基づいて具体的に指導内容をまとめてみたいと思う。

既に文部省においても高等学校の教育課程や学習指導要領が再検討され、その結論がまとまろうとしている。教育の現場において授業の実際に取り組み、日夜苦心を払っておられる先生方のこのような地道な研究結果が、上述の改

訂の中に反映され生かされることを期待したい。

現在都内の高校では、高校教育の在り方をめぐって授業の内容やねらい、評価、授業計画などが論議を呼んでいる。その中において倫社の授業や先生の果たす役割は誠に大きいものがある。またそうした要望に応えるべく人間の育成に献身しておられる姿は貴いと思う。私達のこの研究が教育の現場でよりよい授業の創造のために腐心しておられる先生方の参考になれば幸いである。

### 【研究組織】

上述の主題の研究を推進するため、①現代社会と人間に関する精選分科会  
②思想内容による人物精選分科会、③主題、類型別精選分科会の三分科会を設置し、それぞれの方向から精選の考え方を掘り下げ、その考え方に立って指導内容を精選することにした。なお指導要領の改訂に関する問題点を研究する部会として④特別分科会を設ける。それぞれの分科会は会員の自主的な希望に従って構成し、それぞれの分科会の研究計画や運営は互選によって選ばれた2名の世話人があたることになる。なお都倫研全体の年間研究例会は4回とし、それぞれの分科会の研究成果を中心に研究を進めていく予定である。本年度の各分科会の世話人および参加者は次の通り。(○印世話人)

#### ① 現代社会と人間についての精選分科会

- |                  |                |
|------------------|----------------|
| ○高瀬 康好 (都立忍岡高)   | ○小川 輝之 (都立向島工) |
| 伊藤 政貞 (都立北高)     | 伊藤駿二郎 (都立忍岡高)  |
| 香川 弘 (安田学園高)     | 川崎 啓介 (都立葛飾商)  |
| 木村 正雄 (都立絨前工(定)) | 塚田 哲男 (都立一橋高)  |
| 潮 安 (東京女学館)      | 山口 俊治 (都立練馬高)  |
| 綿貫 博 (都立小金井工)    |                |

#### ② 思想内容による人物精選分科会

- |               |                 |
|---------------|-----------------|
| ○渡辺 浩 (都立忍岡高) | ○佐藤 哲男 (都立江戸川高) |
| 秋山 明 (都立葛飾野高) | 石森 勇 (都立竹早高)    |

海野 省治 (都立江戸川高)	尾崎 充昭 (都立南高)
小笠原悦郎 (日大二高)	勝田 泰治 (都立本所高)
金井 肇 (都立豊多摩高)	川瀬 吉郎 (都立玉川高)
菊地 堯 (都立三田高(定))	小平 茂 (都立両国高)
佐野 光代 (都立小平高)	鷺見 美雄 (都立駒場高(定))
高橋 定夫 (都立板橋高)	田中 正彦 (都立深川高)
竹内 まさ (都立向丘高(定))	中村 新吉 (都立大山高)
船本 治義 (都立大崎高)	村松悌二郎 (都立東村山高)
吉沢 正晶 (都立羽田工)	吉原 広明 (都立羽田高(定))
米田 成夫 (都立日比谷高(定))	

③ 主題・類型別による精選分科会

○沼田 俊一 (都立府中高)	○寺島 甲祐 (都立町田高)
鮎沢 真澄 (都立駒場高)	井原 茂幸 (都立小平高)
小川 一郎 (都立荻窪高)	Compri Gaetano (育英工専)
斉藤 弘 (教育大附属高)	坂本 清治 (都立白鷺高)
佐々木誠明 (都立鷺宮高)	高野啓一郎 (洗足学園一高)
永上 肆朗 (都立四商)	中村 佑二 (都立井草高)
細谷 斉 (都立墨田川高)	増田 信 (都立井草高)
御厨 良一 (都立赤城台高)	渡辺 武 (都立戸山高)

④ 特別分科会

○金井 肇 (都立多摩高)	○中村 新吉 (都立大山高)
綿貫 博 (都立小金井高)	山口 俊治 (都立練馬高)
木村 正雄 (都立蔵前高)	香川 弘 (安田学園高)
伊藤 政貞 (都立北高)	伊藤駿二郎 (都立忍岡高)
鷺見 美雄 (都立駒場高)	渡辺 浩 (都立忍岡高)
小平 克 (都立両国高)	佐藤 哲男 (都立江戸川高)
船本 治義 (都立大崎高)	竹内 まさ (都立向丘高(定))

秋山 明 (都立葛飾野高)	村松悌二郎 (都立東村山高)
石森 勇 (都立竹早高)	小笠原悦郎 (日大二高)
川瀬 吉郎 (都立玉川高)	佐々木誠明 (都立鷺宮高)
坂本 清治 (都立白鷗高)	小川 一郎 (都立狹窪高)
沼田 俊一 (都立府中高)	鮎沢 真澄 (都立駒場高)
寺島 甲祐 (都立町田高)	細谷 齊 (都立墨田川高)
井原 茂幸 (都立小平高)	高野啓一郎 (洗足学園一高)
御厨 良一 (都立赤城台高)	渡辺 武 (都立戸山高)
永上 肆朗 (都立四谷高)	増田 信 (都立井草高)
中村 佑二 (都立井草高)	斎藤 弘 (都立大附属高)

## II 本年度の研究経過の概要

### 【第1回】 6月20日(金) 都倫研総会 都教育会館

1. 総会(研究主題の決定・今年度の研究計画・予算・決算の承認等)
2. 研究発表

「昭和43年度の研究の総括報告」 都立鷺宮高 佐々木誠明氏

「日本社会の家族的構成について」 都立忍岡高 伊藤駿二郎氏

3. 講演「ベブライズムと現代」 東京教育大教授 関根 正雄氏

### 【第2回】 7月1日(火) 都倫研例会 都立小平高校

1. 研究授業「ヘレニズム時代の考え方」都立小平高 井原 茂幸氏
2. 研究討議(研究授業に対する質疑討論)
3. 分科会組織の結成、世話人の選出、分科会年間研究計画の決定等
4. 講演「禅における体験の教育」 大森曹玄老師

### 【第3回】 10月24日(金) 都倫研例会 都立蔵前工業高校

1. 研究発表「現代社会と人間についての精選」の考え方 塚田哲男氏
2. 講演「現代の新しい学生像」 和光大助教授 生越 忠氏
3. 研究授業「職域社会における人間関係」都立蔵前工(定)木村正雄氏

【第4回】 11月18日(火) 全倫研関東甲信越大会と共催 日大二高

1. 研究授業「功利主義の思想」 日大二高 小笠原悦郎氏
2. 研究討議(研究授業に対する質疑討論)
3. 講演「西洋近世思想の特質」 京都大学教授 野田 又夫氏
4. 座談会「倫社の5年間をかえりみる」

【第5回】 1月27日(火) 都倫研究例会 私立育英工専

1. 研究授業「アリストテレスの形而上学」育英工専 カエタノ・コンプリ氏
2. 研究討議(研究授業に対する質疑討論)
3. 講演「キリスト教における創造の概念」上智大教授 メネシエギ氏
4. 都倫研幹事会

以上都倫研例会を中心に研究活動の概要を記したが、各分科会における研究経過の詳細は以下の分科会研究経過報告にゆずることとする。今年は高校紛争などのあおりで研究会を持つことさえ困難な状況が多かったにもかかわらず、世話人の方々のご努力と会員の先生方のご熱意で各分科会とも4回程度の研究会を持つことができたことはよるとびにたえない。

もともと精選の問題は大変困難な問題であり、この1年間の研究成果によって完結するものではないが、日頃研究され工夫されてきた指導内容をどのような観点から、どのような内容を取り上げ、これをどのように配列するかについて熱心に討論をくり返し、ここまでまとめ上げることができたことはお互によい研修であった。勿論これらの中には独創的で個性的な考え方や内容の配列が多くみられる。こうした研究の成果を土台にしてより充実した授業への飛躍をはかりたい。最後に各分科会の研究の推進役としてご苦勞下さった世話人の方々に対し深く感謝の意を表わすものである。

(研究部長 井原茂幸記)

### Ⅲ 研 究 報 告

#### 1. 第 1 分科会 現代社会と人間についての精選

##### (1) 第一分科会研究経過報告

世話人 都立向島工業高等学校 小川 輝之

世話人 都立忍岡高校 高瀬 康好

〔第1回〕 昭和44年9月5日(金) 於 忍岡高校

##### 〈研究内容〉

「現代社会と人間」という単元設定において、その教材内容の精選と配列の問題を検討するには、まずその基本的方向づけについての討議が必要であるとの結論に達し、どのような姿勢で精選にのぞむべきかの討論を展開する。

〔第2回〕 昭和44年9月22日(月) 於 忍岡高校

##### 〈研究内容〉

社会科「倫理・社会」の学習において「人生観・世界観」の単元とどのような関連のもとに「現代社会と人間」の単元内容の学習を展開してゆくか、その際の問題点など、いろいろ興味ある話題に触れた討論がなされる。

〔第3回〕 昭和44年10月7日(火) 於 一橋高校

##### 〈研究内容〉

ひとつの試案が提出され、これを軸に研究協議をすすめる。"精選とは何か?"その意義をつかむため、さかのぼって「倫理・社会学習の目標」を検討するとともに、小学校・中学校における道徳教育が高校倫社の授業の中でどのように生きているか? また、どのようなつながりをもっているか? などについて討議がなされる。

〔4回〕 昭和44年10月13(月) 於 向島工業高校

〈研究内容〉

従来の単元構成における第Ⅰ単元「人間性の理解」と、第Ⅲ単元「現代社会と人間関係」とが、第Ⅱ単元「人生観・世界観」すなわち思想の分野に対して、どのような意義をもっているのか? 「人生観・世界観」を学習するための導入部分か、それとも教材内容として対等か、その位置づけ、ならびに価値評価の問題に論議が集中し、第Ⅰ・Ⅲ単元と第Ⅱ単元とがどのようなかかわりあいをもつか? 両者の教材内容をどう有機的に関連させるべきか? 両者間の「かけ橋」の必要性が検討され、「人間性の理解」や「現代社会と人間関係」の方からのみ、一方的に関連させるのではなく、「人生観・世界観」と対等の立場において、相互につながりをつけることが不可欠であるとの結論に達した。

付 言

以上のごとき第1分科会の討議は、かならずしも充分ではない。たゞ問題点がいくつか発掘されたにとどまっております。なお今後、昭和44年10月中旬以降、11月下旬にかけて充分な研究討議を継続する予定であったところ分科会所属メンバーのうちで忍岡高校はじめ、敎校において紛争がおこり、そのために研究会がもてず、やむなく爾後は各個人においてそれぞれ研究をすすめてゆくことにし、討議を深める機会をもち得ぬまま年末に至ったことをご諒承いただきたい。

## (2) 「現代社会と人間についての精選」 の考え方

世話人 都立向島工業高等学校 小川 輝之

世話人 都立忍岡高等学校 高瀬 康好

教材内容の精選とはなにか？ この問題を考えるには、まず、どのような姿勢でそれにのぞむかが検討されねばならない。精選の意義は「倫理・社会の学習目標」との関連において考えられねばならぬところであり、第1分科会においてはこの教科目の学習目標の明確化からはじめてゆかなければ精選の意義もつかめないとの見解に立った。もちろん「倫理・社会の学習目標」はそう簡単に論述し得るようなものではないが、すくなくとも次のようには言えるであろう。まず第一に、人間性や社会について科学的、合理的理解に立って生徒に思案させることにあるが、それらを通じて単に、道徳性の育成をはかることだけではなく、第二に、人間としての自己への認識を深め、自分の人格形成において、現実の社会のさまざまな問題を建設的に解決し、主体的な生き方ができるような人生観・世界観を養うことであり、第三に、個人の成長のためばかりでなく、社会の秩序ある進展のために寄与しうる自信と責任感を育てることである。これらを換言すれば、人生や社会の諸問題について深い関心を持ち、人間とはなにか？いかに生きるべきか？ などの問いかけをもって、ときには悩み、また自由に考えることによって人間としての自分の責任において行動しうる人間、すなわち、自主的な人格をもった人間として成長するとともに、社会的存在として日常の生活態度を通じて、他人のために奉仕する人格、社会の秩序ある発展を支えうる人格を形成することである。

さて、このように学習目標を明確にしたところで、つぎに精選にのぞむ姿勢が問題になるが、その基本的方向づけとして、

- (1) 「現代社会と人間」は人生観・世界観の分野と対等に扱うか。
- (2) 「現代社会と人間」は人生観・世界観の分野のための導入か。
- (3) 「現代社会と人間」は人生観・世界観の分野のまとめか。
- (4) 「現代社会と人間」は人生観・世界観の分野の中に適宜入れるか。

この四つの方向が考えられるが、多くの場合学習展開においては(2)の方向かとられて来ているのが現状であり、人生観・世界観を学習するさいの導入という形では軽く扱われすぎないか。まして(4)の立場を志向するのは、いかに教材内容の精選とは言えども、あまりにも教材としての内容を過小評価しすぎる憾があるのではないだろうかとの批判がなされた。さきの要望書の趣旨を充分ふまえたりえて、いろいろ検討を加え論議した結果、結論的には、教材内容としてもっと第Ⅰ・Ⅲ分野の価値を卒直に認めてよいのではないか。そのうえて判断すれば、教材内容としての価値は思想の分野と等価値であり主体性のある立場から検討をくわえる必要があるはしないかとの見解を得た。すなわち、「現代社会と人間」において、教材内容の精選にあたる基本的姿勢の方向づけとしては、(1)・(3)が共に必要であり、のぞましいあり方だということであり、具体的に表現すれば、思想の分野を学習してみても、本当のところ従来においても、まとめているのは「人間性の理解」と、「現代社会」の分野がまとめているのではないか。実際問題として、「人生観・世界観」のところでもまとめようとしても困難なことである。したがって「現代社会と人間」の分野が、思想の分野に対して導入—思想—まとめという位置づけがなされることが価値評価としても妥当なみかたであり、単なる導入ではありえないと言えよう。このように考えてみれば、「現代社会と人間」の分野は思想の分野を学習するにあたって不可欠なものであり、人生観・世界観の学習の下にあえておくとする必要はないのではないか。人生観・世界観だけに重点をおいて授業を展開するとすると、まったく思想史の羅列におわり、現代社会に生活しているわれわれとして、思想をどのように現実生活のなかにとり入れていかし、具体的に学習してゆくか全くできなくなる。生徒

の興味は従来でも「人間性の理解」と「現代社会」の分野にかなり強く示されている。ここをうまく展開すれば思想の分野の学習がうまくゆく。この観点に立って「人間性の理解」と「現代社会」のところを先に学習し、(この意味においては思想への導入にちがいないが・・・)人間への深い洞察と現代社会の意義をつかむよう充分に興味をもたせたいうえで思想を勉強するのでなければ意味はない。現代社会を知って、その中でどう生きてゆくのかを考えてみるべきであり、そのためには現代社会の現状分析が先であろう。その場合に、「人間性の理解」のところは、「人間形成の諸問題」と「青年期の問題」が当然重点において学習されるべきであり、「青年期における人格形成の問題」を中心にとりあげ、Personality の形成および心理学的に自己認識を深めることにポイントをおき、「現代社会」の部分は、現代社会を理解するうえで客観的な、正しい認識を身につけさせるに必要な最少限の項目にしぼるべく、この点に精選のねらいをおくべきとの見解に達した。そして「倫理・社会」の学習の展開は「青年期の問題」から出発して、思想の学習をおわったところで、「青年期の問題」に再び回帰せねばならない。あるいはつぎのように考えることも可能ではないだろうか。個人の成長発達段階において、Personality の形成は、ひととおり人類、世界における思想の展開を学習したあとで、個人の問題に回帰する意味においても、まとめとしてあとからやってもよいというみかたもなりたつのではないか。

つぎに大切な問題として、従来の第Ⅰ・Ⅲ単元が人生観・世界観とうまくつながらない、どのように有機的関連をもってつなげるか? この点に触れてみよう。「人間性の理解」のところで心理学的な視点に立って人間を考察し、急に思想の分野で価値観の問題として展開することがどうしてもうまく有機的につながらないこの問題をどうするか? これは「倫理・社会」の学習指導をする場合、共通したひとつのなやみであるが、「人間性の理解」のところでは、人間の心理的メカニズムと青年期の問題を中心にとりあげ、人

間としての自己への認識をやしなう（内面化して自己を把握する）とともに人間一般への洞察を深めてゆき、さらに人生観・世界観形成への関心を持つことを助長することに重点をおくよう学習が展開されるべきである。このさい注意すべきは、青年期の心理的特質を理解することも大切だが、それだけに終始せず、ひろく人間としての共感性を養うためには、人間の心理や行動についての一般的な理解のうえに立って、青年期の問題を考えさせるように留意すべきであり、この場合、とくに青年期の心理的問題のみを取り上げるのではなく、（心理学的な観点からの内容は精選にあたって思い切ってカットしたいとの意見もあった）社会的諸問題をも取り扱い、個人的存在であると同時に社会的存在としての人間存在の二面性を考察させることによって思想の分野学習へのみちがひらかれてゆくのではなからうか。また、「現代社会と人間」について学習したあとで、「……ソクラテスの思想は……」となると、これもうまくかみあわない。やはり、現代社会の学習から実存主義、マルキシズムあたりにかかわりあいが強くと、このあたりから思想の学習に入ってゆくのも検討してみるべきひとつの方法ではないかとの意見もあり、今後の興味ある研究課題であろうと思われる。

最後に第1分科会から人生観・世界観の領域への要望を記しておきたい。思想の分野のウエイトをさげることになるかもしれないが、第II単元をもう少しわかりやすくできないものか？ 第1分科会として思想の分野に対してこの思想家たちはやってほしいといったようなところの指摘と要望、逆に、思想の分野からは、「現代社会と人間」に対して、是非抜ってほしい項目を挙げてもらえば、相互につながりがつくのではないかとの意見もあった。

1. 人間形成 と 青年期

(1) 人間形成の要因

(2) 人間をとりまく環境

家族・地域・学校・職場・国家・国際社会

文化・階級 など

2. 青年期の課題

(1) 自我の発達

(2) 社会的諸問題への関心

(3) 価値への関心

(4) 思想への関心

3. 現代社会と人間存在

(1) 科学技術の発達

a 組織の巨大化とその問題

b マスコミの発達とその問題

c 中間層とその意識

d 情報化の進行とその問題

(2) 大衆社会と人間存在

a 人間疎外の状況

b 価値の問題

c 思想の状況

d 人間性の回復

### (3) 青年期の課題

都立忍岡高等学校 高瀬 康好

#### 〈精選の視点〉

第1分科会における精選の考え方にそって、ここでとりあげる教材内容はごく基本的なものにとどめ、人生観・世界観学習への有機的関連という点を配慮して社会的諸問題その他にも充分視点をおいた構成につとめてみた。

少年期からわかれ、新しい人間性の理想めざして生徒各自が真摯な態度でとりくむなかから、人生の意義や新しい人生への出発を明確に自覚させたい。

#### 〈指導のねらい〉

- (1) 人生における青年期の課題とその意義について、知識を教えこむという態度ではなく、生徒各自の体験を通して、内面的に省察を深めつつ人間への洞察に達し、更に、自分自身に対する認識を高めて、個人としての成長を実現するとともに社会に対しても寄与しうる責任感をも培ってゆくよう配慮してゆきたい。
- (2) 下記にかかげる伝記や文学作品を通して青年期における諸問題を具体的に自分の場合にもすびつけて考えさせ、自己への内省を深める一助としてみたい。

#### 〈指導内容〉

##### (1) 自我の発達

人間はその成長を内面的にみれば幼年期から少年期にかけて徐々に自我が形成され、やがて青年期に達すると思考・意志・感情など精神活動が旺盛になると共に、友人や集団活動を通じて、他人との接触範囲も拡大し、いろいろな経験をすることによって新しい自我がめざめる。こうした青年期の強い自我意識の芽生えともなっておくるさまざまな問題を次項(2)で学習する社会的諸問題と関連させてとりあげる。

## a 心理的発達の側面

- イ 過渡期 自我の発見によって特徴づけられる青年期は少年期から壮年期への過渡期として不安定な時期であり、内面的に自己の精神構造を確立する大切な課題に直面していることを深く認識させたい。
- ロ 自我意識 新しい自我のはたらきにより青年の内部分化が生じ自分と他人を意識して優越感にひたったり、劣等感に悩んだり、あるいは、自我意識と社会意識、理想と現実などの区別や相違に気づいて常に不安や焦燥を感ずると共に、周囲を批判し、権威や伝統に反抗的になるが、内的な分裂を経験しつつも、この一致を求めて青年期の矛盾を克服する努力が大切であることに注目させたい。
- ハ 感情の動揺 疾風怒濤ということばで表現される感情の起伏の激しさや、異性への関心の高まりによる内的緊張、いろいろな高校生時代の悩みなどもここでは重要な主題となるが、同時に情緒的緊張や不安定の原因を内省するだけの力を養うことも必要であり、情操をゆたかにする努力も青年期における大切なテーマとして考えさせたい。
- ニ 孤独と友情 自我の意識は青年をして自己の内面の世界にめざませめさせ、自分の内に深く沈潜させることにより孤独感を味あわせる。この体験とそれに対する精神的共感や、人格的愛着によってやがて友情がめばえてくるのであるが、人間相互の連帯性や人間の尊厳性を体得するうえで、さらに自己の人間性を確立するうえで最も貴重な体験であり、人間形成に大きな影響を与えるものとして深く考えさせたい。

## (2) 社会的諸問題

社会的存在としての人間という観点から考察することも必要な課題であり、現実社会は換言すれば人間社会にほかならない、個人が日常生活において自分以外の人といかなる人間的にかかわりあいをもつか、その接しかた人間関係のあり方はその人自身の人間観によって左右される。前項(1)での学習に併せて、思想の分野への有機的関連を配慮した学習が必要な部分で

ある。

a 青年期における可能性

青年期は人生のうちで未来における豊かな可能性をやどした時期であり、その可能性を実現するための基礎的努力の段階とも言える。ここにおいて青年が課せられた課題は人生の土台を築くために、自分自身の能力を開発し、個性をのばすあらゆる試練と闘うことをおいてほかにない。その試練にうち勝つ支えとなるものこそ、その人自身の人生観にほかならないといえよう。

b 青年と社会

個人の人間形成は現実の社会生活を通してなされるのであり、自己をいかに社会に適応させるか、社会人としての成長は重要な課題のひとつである。ここでは自分をつねに他人との関係において把握するという点にポイントをおいて、集団活動への参加、社会に対する正しい客観的な理解と認識、自分の将来の職業生活、そのための進学や就職の問題など不可欠なテーマになってくるであろう。青年期はまた自分の人生の大切な岐路に直面していることを指摘したい。

c 世代間の相互理解

人間社会において、親と子のように異なった世代の間には、考え方や生き方において相違や対立が生ずる。今日では断絶さえ口にされている。この矛盾・対立は性急な態度や過激な方法によって解決されるものではなく、深い人間の社会的地盤と人間性の尊厳の体験をうしなわないためには、両世代間の相互理解をふかめる努力が何より大切なものであろう。

(3) 価値への関心

a 自己形成と新しい価値感

青年期にめざめた新しい自我は、人生への意欲をもって自己および他人、さらに社会や文化に対して、さまざまな関心や価値感を生ぜしめる。このことは青年期における自己形成にとって重要な意味をもっている。

## b 価値の世界

こうして青年がすぐれた自己形成をめざして生きようとするとき、芸術・学問・宗教・道徳・その他かスポーツなど自分がうちこむに値する価値の世界に開眼する。どのような価値の世界に自己の可能性を見出すか、すぐれた文化遺産をどのように自分のものにするか、青年の日々の生活を生きがいのあるものにする大切な問題と語りべきであろう。

## (4) 思想への関心

### a 青年期と人生観

価値の世界に開眼し、真実を追求しながら人生の諸問題にいかに対処すべきかについて、自分の将来を考えて、みずからの内的世界をみつめるとき、そこに人生観・世界観が探求されるようになる。自分自身の生きがいや死などの問題は青年をして人生のあり方を真剣に考えさせずにはおかないほどの重大な意味をもつてのしかかってくるにちがいない。

### b 人生の意味の探求

ここにおいて、「人生とはなにか」「人間はなんのために生きるのか」まさに人間にとって自分の生涯かけて追求すべき問題に直面する。この解答は決して安易に得られるものではなく、自分だけの考えではどうにもならない。古来、先哲、思想家、宗教家と云われる人たちの教えにそのたすけをかりつつ、自分の生涯の課題として生きてゆくべき道なのである。

### <参考文献>

- ① シュヴァイツァー選集2「わが生活と思想より」竹山道雄訳 白水社
- ② 大トルストイ全集1「少年時代」「青年時代」原久一郎訳 中央公論
- ③ 現代日本文学館14「友情」 武者小路実篤著 文芸春秋

## (4) 大衆社会と人間疎外

都立蔵前工業高等学校 木村正雄

### 〈精選の視点〉

倫理思想は、その時代や社会の背景なくしては正しくは理解できない。別のことばでいえば、その時代や社会がその思想を生み出したもので、両者は密接な関係の上になりたっているものである。そこで、現代社会は大衆社会であるといわれる。即ち、歴史的には近代社会から現代社会への移行過程で、その社会形態の一樣相としてあらわれた大衆化の現象を特徴としており、経済的には独占資本主義段階での社会の変質した現状をさしている。そこでまず大衆社会の成立と特徴を理解させ、さらにその中から必然的に生じてくる人間疎外の問題を中心にとりあげねばならない。

疎外の問題は、まずヘーゲルの精神の疎外からはじまり、さらにマルクスは労働からの疎外をとき、現実的な社会の生活条件の中にそれを求めている。ハイデッガーは転落的な世界内存在は誘惑的＝慰めめであるとしている。また、ヒューマニズムの立場から務台理作が、組織の面からホワイトが人間の主体性喪失の危機をのべている。したがってマルクスの疎外感を中心として現在の社会学者がのべているあらゆるものからの疎外についてつけ加えていくべきだと思う。

最後に、現代社会における人間性回復の問題をとりあげ、これをどのようにうけとめ、どのような方法で考えていったらよいか、人生いかに生きべきかという価値の根源にふれていくべきだと考える。結局、現代社会の大衆化現象を理解させ、人間疎外から人生の価値について深く考えさせ、現実の思想の状況にふれ、人間性回復の方途について考えさせることである。

### 〈指導のねらい〉

以上のような視点から大衆社会と人間疎外について理解させ、その現象面

をとらえ、その原因と解決方法を追求していくが思想的観点からも価値の問題としてもねらいの中に含めていく。そして各自の生徒が主体的にその方途をさぐる手助けとしたい。(1) 現代社会をどうとらえるか。(2) 人間疎外をどう受けとめるか。(3) 現在の思想がどう意味をもっているか。(4) 人間性回復のため身近な問題としてどんなものがあるか。(5) 大衆社会において価値の問題をどのように追求すべきか。以上の観点から身近な問題としてHR、生徒会、クラブ活動の不活発さ、高校生の無気力さ、教師と生徒、親と子の断絶が現在の大衆社会が生みの親であることに気づかせそのような無味乾燥な社会から脱却し本当に有意義な精神的に豊かな人生を送るにはどうしたらよいかを自覚させ、真に人間らしい高い価値観をもって主体的に生きていくためにはどう考え実践すべきかを考えさせることをねらいとしたい。

#### <指導内容>

- (1) 大衆社会・大衆社会とは(定義)近代社会から現代社会への移行過程でその社会形態の様相としてあらわれた大衆化の現象に特徴づけられる場合で、資本の独占的構成および大衆国家といわれる一般的な危機状況にある資本主義社会を分析するための基本的な操作概念の一つである。そして(成立)19世紀から20世紀にかけて成立し、資本制内部における生産の社会化を起動力として、
- a. 労働者階級を中核とする人口量のプロレタリア化。
  - b. テクノロジーの社会化にともなう大量生産、大量伝達の飛躍的な発達。
  - c. 伝統的社会層別の標準化による政治的平等化が行なわれ、次のような(特徴)の社会を生みだした。
- a. 資本主義の高度化とともに主体性を失った多数の労働者や農民がその中に組みこまれ歴史の表面にでてきた。
  - b. 高度の合理化により官僚機構の細分と統制に力点がおかれ、ホワイトカラーが巨大な組織の中に埋没し非人格化と自己喪失感をもつにいたった。
  - c. 大衆民主主義が発達し、大衆は良心と理性を失い政党は独占資本と結び、法案は官僚によって独占され大衆は孤立化される。そして大衆を強制的に体制内に編入する。
  - d. あくなき利潤への

追求により大量生産、大量消費され生活様式が画一化される。 e. . これらの前提となる交通機関の発達と都市化の進展により人間は官僚組織の中で非人格的となり受動的な存在となった。このような社会での（大衆文化）は、文化の大衆化平均化をもたらす。これは資本主義的大量生産方式から生みだされ営利主義がつかぬかれ、世界観の対立に抵触しない中立性をもって平均化を招き、さらにセンセーショナルな事件がとりあつかわれる。これは人間の感覚化を助長し、感覚化は文化の個性を奪い平均化し大衆化し娯楽化する。そこに廉価本や低俗な週刊誌がよく売れる現象を生みだしている。マンハイムやフロムは大衆化が生みだしていく絶えざる危機とアノミーの克服を盲目的熱狂や逃匿に求める社会心理に特性を、リースマンやミルズは大量生産、消費の結果、つまり権力や生産手段、コミュニケーション機関の極端な独占が生みだした不感症的なアパシーに社会心理の特徴化をみえだそうとし、ヤングは合理性、役割の専門化、接触の非永続性などの強調は親和性や連帯感情の欠如を示し、個人の孤独、不安感、親密感の欠如などによって特徴づけられている。その結果、ミルズはマスメディアの受身の対象となり、メディアの流す暗示と操作を無気力に口をあけて待ちうけている個人の集合にすぎなくなってしまうと、ノイマンはさらに、ある方向にむかっての大衆化の過程は現代の独裁制の始源をなすものであると危機を説明する。

- (2) 人間疎外・人間の疎外とは「自己にとってよそよそしい」「別なものになる」「自己の譲渡」などといわれ、簡単にいえば人間が非人間化することである。その疎外現象が社会構造とのかかわりあいの中でとらえられるもので、特に近代における疎外は個人が他の人間や自分の周囲の世界に対してもっぱら利害打算の立場から接し、それらとの間によそよそしい関係しかもち得なくなって各個人は深い孤独感の中に生き、人々は自分自身とは別の人間になってしまい自己喪失の状態である。人間疎外はヘーゲルによれば、精神の疎外であり、疎外を絶対的精神の内部のできごととし精

神の作った対象が逆に精神を否定しようとする精神の発展史の立場にすぎない。フョイエルバッハは、自己の他者が自己を支配するとし、人間の意識の中に疎外の根源が存在するとしている。マルクスは、これをさらに一歩進めて人間疎外の根源を現実的な社会の生活条件の中に求め、労働の商品化を通じて搾取が行われている資本主義社会の生活条件の中にあることを発見した。この社会の階級的人間関係が必然的に人間の疎外が生みだされる。即ち、生産物から疎外され、労働そのものからも疎外されることにより人間は人間自体からも疎外され人間性を失うと。したがって、疎外の克服は労働者階級の解放であり、その中に普遍人間的解放がふくまれていると。さらに、務台理作は、人類ヒューマニズムの立場から疎外の根源を追求し、独占資本主義体制の否定によって人間疎外の克服がなされるとする。佐藤智雄は、大衆は常に積極的にさまざまな活動に参加することによって疎外の克服ができると。パッペンハイムは、人間疎外の根源を近代の資本主義社会の構造にもとめ、アンニースの疎外の社会的条件を明かにした貢献をたたえ、社会全体を歴史的にとらえることを主張している。一方、ハイデッカーは、転落的な世界内存在は誘惑的=慰めめであると同時に自己疎外的である。これは、それ特有のゆれ動きを示してついに、現存在が自分自身の中に囚われるにいたると実存主義の立場からのべる。結局、疎外の問題は、マルクス主義の立場と実存主義の立場から、さらに文化とかからわせ人間論の立場からとりあげるべきである。

#### ＜参考文献＞

現代のヒューズニズム」	務台理作	岩波新書	¥ 1 5 0
現代における人間疎外」	樺 俊雄	未来社	¥ 5 8 0

## (5) 大衆社会と人間存在

安田学園高等学校 香川 弘

### 〈精選の視点〉

「人間は社会的動物である」の言葉を待つまでもないが、人間はその生活のすべてにおいて一人では存在しない。文化も文明も、時代とともに、社会の中で展開し、発達して来た。近世における一連の市民革命により、19世紀は、いわゆる教養と財産のある市民階級による民衆政治の展開された世紀であったのに対して、20世紀は大衆社会へと変化した世紀と言えよう。

産業革命は資本主義発展の原動力となって、さらに機械と技術のとまることのない発達と改善をもたらした。それは各種生産機械の進歩のみならず、交通・通信などの機械にいたるまで発明改良が相ついだ。特に最近のオートメーションにより、その結果、製品の品質が均一化し、かつ大量に安価に生産されるようになった。生産面の発達は当然、消費生活に大きな変化を与えた。則ち、大量画一生産は生産コストや製品価格を低下させた結果、一般大衆の大量消費を可能にした。更にマスコミの発達、人口の都市集中化などの結果、社会の各層の生活様式が次第に均一化してきた。その結果、大衆社会と呼ばれる現象が生じた。

今日、社会を構成する人々の生活様式の一般化から、政治・経済・社会などの諸問題に対する意識も、次第に類似点をもつようになった。かくして生じた大衆社会は人間の生活・考え方などのような影響を与えているか。現代に生きる我々はそれから生じた諸問題に直面すべき時期にきている。

### 〈指導のねらい〉

次の内容から現代社会に生きる人間のあり方を考えさせたい。

- (1) 大衆社会とは何か。如何にして成立したか。
- (2) 人間疎外。
- (3) 価値観の動揺
- (4) 人間性の回復。

以上について説明を加えると、大衆社会は20世紀に生じたものであるからそれにいたる資本主義社会のもとの体制がどのような影響を与えたか。また大衆社会の特徴とも言うべき、人間疎外が生じ、更に価値観が動揺するが、更にそこからどうすれば人間性を回復することができるかを考えさせたい。

### 〈指導内容〉

#### 大衆社会とその成立

今日、大衆社会の機能と影響は甚だ大きい。それは、それが20世紀の産物であり、マンモス的であり、現代において無視できないからである。大衆社会を出現させた3つの原因からそれらを考えたい。即ち、a. 経済的条件の変化。b. 政治的状况の過程。c. 文化的発展の諸相があげられる。

a については、19世紀末、欧米における第2次産業革命による技術の進歩は独占資本主義そして企業規模の巨大化が生じた。その結果労働人口の増加を必要とし、都市人口が急増した。生産のにない手である労働者階級は組合運動と労働政策によって賃金が上昇し、教育の普及と相まって知的・経済的能力が向上した。それが今日の労働者であり、自家営業・サラリーマンを中心とした新中間層との間に生活面での差がなくなり、両者が大衆化した。

b について考えてみよう。20世紀は大衆民主主義の時代である。階級に關係なく、すべての人が選挙することで政治に参加できる。この事は大衆が有権者として同一性と等質性を持っている事であるが、かえって政治的無関心の傾向が現代社会に見られる。

c はマス＝コミとマス＝カルチュアから生じたものである。前世紀の社会の封鎖性は今日ではマス＝コミによって打破された。併し、この機能は娯乐的・消費的供給伝達機関としての働きに重心がかけられている。即ち、大衆の趣向を考えに入れた商業主義に徹する傾向が強い。また、マス＝メディアは一方においては大衆文化の異常な発展に拍車をかけており、我々はこの画一的な恩恵を多分に受ける立場におかれている。

以上から現代の人間は生活の全般において画一化・均一化され、人格的接続は次第に薄くなっている。そして次第に心理的に孤立した集合体、すなわち大衆社会の一員となっている。

### 人間の疎外

人間の疎外とは何か。ヘーゲルによると精神が自分でつくり出す対象物に規定されることが「自己疎外」であった。マルクスのいう疎外は他人への隷属を意味した。今日、この用語はどのような場合をさすか。次の二通りに分けられると思う。

a. 「人間どうしがよそよそしくなることである」これについて、一例を都会生活にあてはめると、そこでは自分の住んでいる地域においてすら、隣人と呼べる実質的の交わりなしに、疎遠な生活が行われている。

b. 「疎外されるとはある体制からはみ出ることである」つまり、これは仲間はずれにされることである。そのような人間は孤独感と同時にアウトサイダーの意識をもつ、彼らは余計者であるから、無気力・無責任・偏見・放浪性などの社会心理学上問題になる病的徴候をもつようになる。

しかし、一方既存の社会秩序の中で、一応順応していると思われる多くの人達も、気づかないままに自己を疎外している。換言すれば自分自身の主体性を失っているのではないだろうか。そこにも問題点がある。

以上の意味での疎外の場として、次があげられよう。

- イ. 巨大な組織の中での個人。職場などの第二次集団では、その社会の方針に従うため、自己主張が困難である。
- ロ. 機械文明(テクノロジー)の発達により、人間のもつ精神的・主体的価値が失われている場合が多い。
- ハ. マスコミによる大衆の画一化、そこにはコマーシャルリズムにより人々の理性的判断をにぶらせようとする。
- ニ. 現代の大衆民主政治における期待外れ、圧力などからくる人間性の疎外がある。

## 価値観の動揺

大衆社会の成立によって、今日では勤勉・質素・儉約・忍耐・奉仕・正直・義務などの美德が軽視される傾向にあるようだ。集団の一員として何事も、ほどほどに要領よくやるという考え方が滲透している。職場の機械化によって独創性が発揮できないことも一因であろう。余暇の過ごし方として気晴しが求められる。人々を驚かせ、興奮させ、気持ちをまぎらわせる娯楽設備がはらんしている。勤勉と節約に代わる快適の原理が大衆の余暇利用そして消費目的と一致している。

## 人間性の回復

我々が真の幸福を得るためには、内面的なもの、精神的な志向を高め安定させるために努力することが大切である。現代社会の便利さ、快適さを発展させることは結構だが、それらが人間の活力、すなわちレクリエーション的余暇の利用に向けてほしい。享楽主義のそれではなく、人間性を擁護する高い働きをもった過ごし方である。そのような時間をグループあるいはサークル活動としてもつならば人間関係改良に役立つ。新しい社会情勢に対応しながら住みよい社会をつくるために、ふざわしい社会規範をつくる努力をしよう。それによって、人間は生きる喜びを味わいたいものである。

## <参考文献>

- 「社会心理学入門」 南 博 岩波新書 ￥150  
「近代人の疎外」 F・バッペンハイム 岩波新書 ￥150  
「現代のエスビリ・人間の疎外」 松浪信三郎他 至文堂 ￥380  
「講座・社会学・大衆社会」 福武 直他 東京大学出版会 ￥380

## (6) ヒューマニズムの探求

東京女学館 潮 安

### 〈精選の視点〉

「人間は理性的動物である」が、これを探りあげる場合、理性という点を強調しがちであるが、人間は動物でもある。チンパンジーや犬猫とも同類の動物であるということもまた強調すべきである。そこで人間を人間たらしめる人間性をいう場合にも、この動物一般に共通する動物的人間性を頭におく必要がある。それだからこそ人間性には善い面だけでなく、悪い面も出てくるのである。人間性を伸せという場合には、人間性を人倫的に伸せということで、これがヒューマニズムである。善い悪いという倫理的価値判断をする場合には、人間性の大部分が動物的人間性と関係をしているということをおくべきである。これはつまり、この動物的人間性を、教育の場においていかにして倫理的に伸すかということで、これがヒューマニズムの教育における課題である。そして高校の倫・社は、これを自覚して力をいれるべきであるとおもう。そこで、わたしは、「現代の日本の高校生」のヒューマニズムをどのように育てて行くべきかということが、倫・社の課題であると言いきってよいようにおもう。「現代の日本の社会」に生きている青年中期の若く生々しい人間性を、特に動物的人間性を、倫理的に、ということは社会的に伸すということを課題とすべきだとおもっている。この意味において、倫・社、第3節の「現代社会と人間関係」に、もっとも力を入れるべきだとおもう。

この節の採りあげたのは、政・経とも関係するが、それが採りあげるような科学的である底に、思想的、思案的であることが必要であるようにおもう。第2次産業革命を迎えつつある技術刷新に支えられた経済社会の爆発的發展を見つつ日本社会に躍り出る青年達に、現実の底にもう一層深い生活意識を

考えさせ捕えさせることが必要であり、これがこの節の課題であるとおもう。そしてこの課題を解決するためには、市民社会が極度に発達した西欧、アメリカ流の自由主義、ドイツ、フランス流の実存主義、マルクス、レーニン、毛沢東と流れて来た中ソの共産主義理念、或は、明治初年以來、日本の先覚者たちが、封建思想を、百年かかってなしくずして来た過去の努力、これらのものを十分検討吟味すべきであるとおもう。

わたしが、数年、倫・社の教科書と取り組んで、どうもじっくりしない点をあげてみよう。まず「人間性の理解」においては、あまりに心理学、生理学、人間学という学問的立場をきこちなく重視しているようにおもう。つぎに「人生観・世界観」においては、過去の偉人、哲人の人生観・社会観を、現代の社会と関係づけることなく、哲学的に、きのままで取りあげ、現代の青年へアプローチするという配慮がたいへん少いようにおもう。たとえば、現代青年につながるべき、明治以後の日本の先覚者達の考えかたが甚だ僅かしか採りあげられてはいないけど、生きている信仰としての現代のキリスト教や仏教諸派の考えかたが、何一つ述べられていない。マホメット教など、すがたもあらわしていない。現代世界の一大勢力を知らないでよいのかとおもう。

#### <指導内容>

「人間性の理解」についていえば、どの教科書もずいぶん気を配ってはいるが、青年期の動物の人間性が、どのようなもので、どのように発達して行くかということを、生理学的に、心理学的に、人間学的に、今少しく具体的に取り組み、生徒自らの心の動き、心身の発達というものを反省させ、自覚させることが必要であり、そのためには質問を十分にし、ディスカッションも時々いれて授業をすすめるよう気を配っている。これは今後は更に徹底すべきだと自認する。

「人生観・世界観」についていえば、どの教科書も、ここがいちばんできが悪いように思う。わたしは、次のような表をつくって、年間を通じて、すべての生徒に必ず一回各自の所見を述べさせている。

区分	研究題目	研究内容の手びき	研究資料
A 中国の考え方	孔子	孔子は戦乱の時代に生れ、民衆の苦しみを救うために平和な社会建設や道義を高揚した	岩波新書 437 諸子百家 角川文庫(白6)現代訳 論語 岩波文庫(青129) 論語
B 仏陀の教え	仏陀	仏陀の人間像のなかの欲望を克服し、自我を確立する人生観 「諸行無常、一切皆苦、諸法無我、涅槃寂靜」に表現される人生観	角川新書 仏陀(増谷) 中公新書(32) 仏教入門 岩波新書(258) 仏教(渡辺) 角川文庫(白7) 般若心経講義
C ギリシア人の考え方	ソクラテス プラトン	ギリシア民族の情熱、ポリス社会の建設、民主主義的人間像	岩波文庫、ソクラテスの思い出 岩波新書 ソクラテス(田中) ソクラテスの弁明、プラトン哲学(ペーネット)
D キリスト教の考え方	イエス・キリスト	ユダヤ民族の苦悩の歴史旧約の正義、新約聖書の愛の精神	岩波文庫 創世紀 福音書、岩波新書(小塩) 聖書入門
E ルネサンス	人間性の復興	中世的束縛からの自然的人間性の解放	岩波新書 498 (野田) ルネサンスの思想家たち 東大出版会 近代社会思想史
F 宗教革命	ルター	中世的 세계観や束縛から信仰の自我の解放	岩波文庫(青15) キリスト者の自由 清水書院(岩田)(シリーズ) ルター

G 近代市民社会	ホルブス	ポップス、ロックの社会契約説、ルソールの自然法の考えかた	東大出版会 近代社会思想史 岩波文庫 社会契約論 岩波新書(桑原) ルソー
H 近代市民の自我の確立	デカルト	デカルトによる人間理性解放カントによる実践理性の絶対命令	角川文庫 方法序説 岩波文庫 道徳形而上学原論
I 19世紀の市民倫理	ベンスアム ミルの功利主義	道徳・政治上の功利主義思想 最大多数の最大幸福説	清水書院 {山田} ベンサム 岩波文庫 {菊川} 共産党宣言
J 19世紀の市民社会	マルクス	社会主義思想の科学的基礎づけ	清水書院(小牧)(シリーズ) マルクス J・S・ミル 岩波文庫 ミル自伝

「人生観・世界観」については、わたしは、「西洋の考えかた」を不必要に、学問的、科学的、哲学的に取りあげるべきではないとしている。

わたしは古代人は、彼等の環境のなかで、どのような考えかたをせざるを得なかったか、それが現代社会にいかに関連するか、古代人は、その社会生活を営むにどのような人間性を重視したかをとりあげている。そこで日本人のものの考えかたにいちばん密接な関係にある、中国古代人の人間観からはじめる。殷墟をもつ古代中国社会をのぞき見して、孔子、孟子、老子、莊子などを、その後の歴史に関連づけて、生徒と共に考える。次は仏陀へ進む、それから、古代ギリシア人の考えかたに移り、イエスの信仰へと進む。わたしは、ギリシアでは、あまりに学問的に深入りすることはさせている。むしろ、ギリシアのポリスが奴隷をかかえた全体主義的国家で、これを絶対化することにギリシア文化が生れていることに、現代との差異を強調しつつ、彼等の民主主義を取りあげている。キリスト教は、生の信仰として現代に生きている。そこで、ここでは生徒の深い信仰的発表があったのしい。

ヨーロッパの中世思想、ルネサンス、宗教改革は、その背景の時代を裏書きするという意味をもつものとして簡単に取り扱う。

さて近代市民社会の発達、そこでは市民としての個人と、これを包む社会とが問題となる。如何なる人間性とその役割りを果たすか、ここにイギリス流の経験主義が生れ、大陸型の理性論が生れる。ベーコンの経験主義、デカルトの理性主義、いずれも人間が一本立ちしなければならぬとき自覚すべきものと考え、ここから出て一方に、ホッブス、ロック、ルソーらによる社会契約説、他方にカントの実践、理性の尊厳さを理解させる。そしてここにすでに現代人の倫理観が基礎を置いたことを考える。産業革命を経験した複雑な社会にあって、これら2つの流れは発展せざるを得ないこと、経験主義はベンサム、ミルの功利主義、アダム・スミスの経済的社会観へと、カントは国家理念をとくヘーゲルへと発展し、フォイエルバッハ、マルクス、レーニン、毛沢東へと共産主義思想として発展すること、ここで〈精選の視点〉で強調した、最も重要な現代人の考えかたを、十分掘り下げたいとおもっている。

## (7) 人格の発達

都立一橋高等学校 塚田哲男

### 〈精選の視点〉

倫社の精選についてみると、過大な指導内容、高度な指導内容を、いかにして少なくするか、わかりやすくするかだけに焦点があてられているように思われる。これが真の精選であるかどうか、疑問である。教材の精選は、教科目の構造化論に立脚して、おこなわれるべきものである。そのためには、倫社をその目標にそって立体的に組立てる思考が第一に必要となる。倫社の基本的な指導内容はこうしてあらいだされてくる、すなわち精選されてくる。これをふまえて、個々の指導内容の構造を分析し、本質知識を抜き出す。本質知識の把握のうえにたつて、倫社の全体をふりかえり、倫社の構造化に無駄がないかを検討したいものである。

倫社は、人生いかにあるべきか、人間いかに生きるべきか、を目標にする科目である。しかし、人間は生まれたときから、人生いかにあるべきかとか、人間いかに生きるべきかを考えられるものではない。こうしたことに興味と関心をもって、自己の人格をみがきあげようとするのは、青年期になってからである。それ以前は、遺伝と環境の影響をつよくうけながら、人格は発達する。しかし、人間形成のうえで、青年期以前の人格の発達を軽視するわけにはいかない。そこで、人間を考えるため、また倫社の導入として、人格の発達をとりあげた。

### 〈指導のねらい〉

人間形成は、人格の発達を軸とする。人格の発達は、個人の誕生のときからはじまり、青年期においては精神を誕生させる。青年期を一大転換期として、個人は自己の人格の完成に意識的にとりくむ。人格の完成への努力は、典型的な求道者の思索からもわかるように、若い年代からはじまり、一生の

課題となる。そして、年老いてから自己の幼少時をふりかえって、今の人生を諦観する。そこで「人格の発達」は、(1)前期中等教育における人間教育と連繋すること。(2)倫社の導入であり、しめくりであること。(3)青年期以前の人格の発達は、生物学的要因、社会的要因、行動場面的要因によることにねらいをおいて指導する。そして、次のテーマ「青年期の特徴」への橋わたしとしたい。そうすることによって、倫社を小中高校の人間教育のなかに位置づけられるとともに、生徒に青年期にある人間という認識をもたせてものを考えさせることが可能となろう。

### ＜指導内容＞

#### 人格の発達

一人の人間がなにかに成功したり、失敗したりすると、世間いっばんは、血統がよいからとかわるいからという。また人びとは、あの家の環境が好ましいからとかよくないからともいう。このことは、生物学的要因と文化的集団的要因との影響で人格を発達させていることをしめしている。しかし、これまで、生物学的要因か、社会的要因かといわれ、そのどちらが人格の発達に関係するかといわれてきた。人格の発達にかかわりある要因は「遺伝か、それとも環境か」といった二者択一的なかたちでとらえられるものではない。人格の発達は、いくつかの要因、因子が複雑にからみあうなかですすめられるのであり、一つの因子たとえば環境が作用するときには、別の因子たとえば遺伝も人格の発達に影響をおよぼしている。この好例をJ・Sミルの人格の発達にみることができる。J・S・ミルは、わが子を励ます学者の父と、子どもにふかい慈愛をよせる教養ある母に育てられた。ミルはすばらしい文化的環境の刺激で育まれた。しかしミルの人格は環境だけで発達したのではない。環境の刺激によって、ミルは自分のなかに眠っていた天才という遺伝を発揮したのである。ミルは、環境だけで、あるいは遺伝だけで人格を発達させたのではない。両者が補足しあって、彼の人格を形成したのである。このことは、人格の発達上、一つの要因がたまるときには、それ以外の要

因も作用することを意味している。人格の発達を考察するには、影響をおよぼすそれぞれの要因の重要性を認識することが肝要である。

### (1) 生物学的要因の影響

人格の発達に影響をおよぼす生物学的要因の主なものとして、①遺伝的要因 ②身体の外観 ③成熟の速度をあげられる。①遺伝からみていこう。アメリカの心理学者は、犬など動物には、攻撃的だとか、臆病だとか、神経質だとか、人なつっこいだとかいう発生的な遺伝が成長してもあらわれろというが、人間にはこうした特性があらわれても、どれほど遺伝の影響によるかは断定しがたいという。人格の特徴は、遺伝された可能性と環境の力との複雑な交互作用の長い連絡の産物なのであり、個人の社会的学習に大いに関係する。②顔だち・身長・体重・身体のつりあいといった身体の外観は発生的にきまってくる。顔だちがよく、身体全体が均衡している人には自信がみられ、積極的で社交的であるが、見栄をはったりする。外観がよくないと、仲間から歓迎されず、攻撃的になったりするが、また仲間よりも努力して学業により成果をあげたりする。③同一年令の者でも、成熟の遅速により、心理的社会的にかなりちがった人格の特徴をもつ。いっばんには、成熟の速い者は情緒的社会的に安定し、仲間から認められるが、遅い者はこれと逆の現象をおこすことが多い。前者は社会に適応しやすく、自信や独立心もつよいが、後者は不適応性をしめすことがよくある。生物学的要因が人格におよぼす影響をごく簡単にみてきたが、それは間接的である。

### (2) 社会的要因の影響

人間は社会的動物といわれ、人間どうし交互作用のなかに存在する。人格はそういうなかで重大な影響をうけて発達する。どんな文化的集団に個人が所属するかは、その個人の人格の発達につよく影響する。どんな集団にも社会規範があり、集団として何を教え学ばせるかを社会統制している。また文化は個性的な特性・価値・考え方などをもっている。アメリカ文化

は、子どもに依頼感情をもつことを排し、自主独立を奨励する。早くから競争の態度が求められる。中国文化は、依頼感情をあまり排除せず、独立も高い評価ではない。人格の発達には社会階級にも大いに影響をうける。さまざまな社会階級は特有の文化・人生哲学・価値規準・行動様式をもっている。中流階級では言語刺激がさかんなため知能の発達がよくみられ、褒美と結びついて学業に熱心であるが、下層階級の子どもは刺激と経験の機会が少ないため知能の発達は低く、学業を拒否する者もある。中流階級では攻撃性や性的表現は抑制されるが、下層階級にはそうした癖が弱いため、これをつよく表出する子供がある。人格の発達の上で家族の影響は顕著である。子供の対人関係の発生の場であり、社会的学習の基礎的場であるためである。子供は両親から刺激をうけて社会的態度を形成しながら、社会的学習をする。親のあり方で、攻撃的か穏和か、競争的か協力的か、肉食か菜食か、知的なものに関心をしめすか無関心か、性的に放縱か厳格か、独立か依頼か、正直か不正直かなどの人格特性を子どもは身につける。そこで親は、子供を異った型の家庭的雰囲気にとりよるよう配慮すべきである。

### (3) 行動場面的要因

人間はふだんは穏和でも、欲求不満がおこると、一時的に攻撃性をおびたり、退行したりする。その特性のあらわれは個人特有のものである。

#### 〈参考文献〉

- |         |          |      |      |
|---------|----------|------|------|
| 児童心理学   | P・H・マッセン | 岩波書店 | 400円 |
| 青年期     | 勝田・佐山・松田 | 岩波書店 | 380円 |
| 教育心理学入門 | 依田 新     | 有斐閣  | 430円 |

## 2 第2分科会 思想内容による人物中心の精選

### (1) 第二分科会の研究経過報告

世話人 佐藤 哲 男  
渡 辺 浩

〈発足〉 都倫研第1回例会の後、約20名の方がメンバー登録された。さらに結果的には流動的になったが、東洋思想、西洋思想の部と2手に分かれて所属してもらい、作業を進めようということになった。

〈その課題〉 今年の第2分科会の課題は「思想内容による人物中心の精選」ということで、それはある視点から、現在に生きる思想を拾い上げ、それにつながる人物を挙げる。さらにその人物を通して何を生徒に与えるかということになる。そこで問題点は、①精選の視点、その基準について ②拾い上げられた思想からどの人物を精選するか、③精選された人物についての指導内容の精選、という3点にしばられ、従って三段階の作業となった。

#### 【第1回例会】 9月12日 (忍岡高校)

紛争前で出席良好、盛会であった。小笠原、菊地氏(東洋思想)、金井、中村氏(西洋思想)よりそれぞれ精選の試案が示され、それを土台として討議して行ったが論議の焦点が、精選の本質論へと移って活発に意見が交わされた。結論として、兎に角、具体的にある思想を採り上げ、それによって人物を選び出し、かつ精選の視点のサンプルをいくつかまとめて見ようということになった。

#### 【第2回例会】 10月16日 (本所高校)

前会の線に沿って、両国高校の小平氏より「近代科学精神」という思想のパターンにより人物として、デカルトとベーコンがとり上げられた。そこでは偏見の除去と科学的思考が強調され、かつ具体的に生徒への指導内容が綿密に立てられていた。さらに話題は精選の視点へ移り、

④ 「世界」の中における自己のあり方を問う。SeinよりSollen(金井氏)

⑤ 人間としての生き方について (小平氏)

⑥ 自然、社会、自我、絶対者の場への関心のあり方を (菊地氏)

と、以上3つの提案が出された。

【第3回例会】 11月14日 (深川高校)

前回に続いて、3つの精選の視点を掘り下げたところ、前項の④、⑤、⑥案のうち、⑤、⑥案は具体的展開において結局、④案に吸収されるだろうということで大方の見解の一致を見、これを分科会の精選の視点ということに落着いた。ただしこの④案におけるSeinからSollenへといういき方に強硬な異議も出され、そういう考えの方はそれなりに具体的に執筆してもらい、決して強引に規制するものではないと附加された。

【第4回例会】 12月11日 (忍岡高校)

具体的に執筆へと、押しつまったあわただしい雰囲気のうちで2つの作業が行われた。東洋思想の内容を7項目に、西洋思想を10項目にしぼること。及びそれにつながる人物を1人乃至2人選ぶことであった、これは可成り大ナタをふるって進められ、「この思想は入れるべきだろう」「いやそれでは精選にならない」、などやり取りがあり、忍耐と妥協で一応の線に落着いたといえる。

今年の課題から見て、個人の研究と共に分科会の討議、活動が例年以上に重要視されるべきものであった。人物、内容の精選、何れも深く掘り下げなければならぬものであった。ところが秋ごろより深まった学校紛争のため例会の活動にブレーキがかかり、尻すぼみの状態になったのは残念であり、われわれ世話人も紛争のためとはいえ十分その責を果せなかったことを、お詫びしておきたい。

(佐藤記)

## (2) 「思想内容による人物中心の精選」 の 考 え 方

世話人 都立江戸川高校 佐藤 哲 男  
都立忍岡高校 渡 辺 浩

本年度の第2分科会の研究テーマは、上記のように「思想内容による人物中心の精選」についてである。すでに研究経過報告にのべたように、第2分科会においては、精選の考え方として、3つの提案がなされた。

① 「世界」の中における自己のあり方を問う—SeinよりSoIleoへ  
(豊多摩高、金井先生)

② 人間の生き方を問う(両国高、小平先生)

③ 自我、絶対者、自然、社会の場への関心のあり方を問う

(三田高、菊地先生)

これらの3つの視点について、分科会で討議した結果、②案と③案とは、ともに①案の具体的な展開の中でほぼ吸収されることが明らかとなり、分科会としては、①案を中心として、精選の考え方をまとめることとなった。

これらの案の他に、いろいろの機会に、分科会の会員によって発表された精選の考え方として、

④ 人生観・世界観形成への原理的思索を通して、自己と先哲との交わり  
を考える(大山高、中村先生)

⑤ 思想の流れの中心を核としてとらえ、思想の特色を深きほりにする。  
したがって一つの思想の流れを代表する思想家に限定する。

(日大二高、小笠原先生)

⑥ 思想史の上に立って、たえず源流思想を志向する

(東村山高、村松先生)

これらの試案がそれぞれ具体的な「倫・社の内容構成案」を伴って発表

されたのであるが、一見して分るように、①～④案は原理的・基礎的な、  
"倫・社の指導のねらい"と結びついた精選案であり、⑤⑥案は人物(先哲)  
をえらぶ場合の、直接的なよりどころを与える精選案といえよう。

そこで①案(金井案)を中心とし、他の諸提案を比較検討して、共通の観  
点を組み入れた結果として、つぎのような分科会試案を得た。

### 1. 精選の原理的な視点

生徒が"自己の生き方を確立してゆく手がかりを与える"ことが倫社指  
導のねらいである。それは生徒自身のうちにある"よい人生をめざす願  
いにふれてゆく"ものでなくてはならない(小平案と共通)。しかも生徒自  
ら見いだしてゆくものでなくてはならない。

それは、自己とは何か、自己のおかれている世界とは何かを問いかけて  
ゆくことによってできると思う。したがって指導のねらいを、自己と世界  
の存在についての認識を深め、その上に立って普遍的価値を求める。そ  
こから自己の生き方を導かせるということにおきたい。

つまり、自己のおかれている世界をひととおり見わたすことによって、  
自己の世界への位置づけができ、その上に立って自己の生き方を確立して  
ゆくことをねらう。指導の立場を Sein から Sollen へというねらいで通  
すということである。

先哲の思想にふれてゆく視点は、以上の基礎的な観点から導かれるもの  
と思う。先哲がなぜ自己の問題をとりあげなければならなかったかを、可  
能なかぎりその先哲の中に入ってみることによって、可能なかぎりその先  
哲に近い立場に立って、なるべく同じ角度から真理を追求してゆく。その  
先哲とともに考えることによって、生徒自身の問題にすることができると  
思う。同じ先哲の思想内容でも、視点をはっきりさせて取り扱うことによ  
って、知識量をへらし、考えさせる学習として取り扱うことができるとい  
えよう。

## 2. 人物（先哲）精選の具体的な視点

上に述べたような原理的・基礎的な観点から見れば、人生観・世界観についての指導内容は、思想史体系を教えるのではなく、指導のねらいの達成に必要なものを精選しなければならないということになる。

したがって、人物（先哲）精選の具体的な手続きとして、思想史上の代表的な思想の系列や分野を重点的に取りあげ、さらにそれらを代表する思想家一、二を選ぶことが必要となってくる。

その選ばれた先哲の思想（生き方・考え方）を深くほりさげ、その指導内容を精選して展開することによって、たんに内容を量的にへらすことができるのみでなく、指導のねらいにそった、指導内容の構造化ができると考えられる。このようにして、

- a. 思想史の上に立って、代表的な思想の系列・分野を精選する。
- b. それらを代表する思想家をえらぶ。

この2つの段階を通して、先哲精選の手順が得られることとなる。

## 3. 精選内容の分科会試案

上記の視点をふまえ、「思想内容による人物中心の精選」について、分科会で具体的に討議した結果、つぎのような分科会試案を得た。そこで、この精選された人物について、それぞれ分担をきめ、個々に指導内容の精選を研究することとなった。それらについては、それぞれの分担項目にゆずることとする。もちろん、この精選の問題については、実に各人各様の見方があり、画一的にまとめることは、とつてい困難な状況である。したがって、一部にかなりの異論をかかえながら、最大公約数としてのまとめに過ぎないことを了承してほしい。

（渡辺記）



### (3) ギリシアの思想 — ソクラテス —

都立江戸川高等学校 海野省治

#### 〈精選の視点〉

現行の倫理・社会の思想の分野においては、各社の教科書のいずれをみても、中心人物に限ってみても、30名程の思想家について述べられている。年間の授業時数が有限であり、又思想家の思想内容はとても30～1時間で終えることのできないことを考えるとき、我々は精選ということを考えざるを得なくなる。私自身44年度は思想分野を9つのテーマにしぼった。この際の基本的視点は第2分科会においてまとまった視点とほぼ一致する。一言つけ加えておくと、学ぶ者と思想家のふれあいを考慮したということであり、身近な問題を引き出し得る思想内容を、という点に重きを置いた。こうした点を考慮しないなら、倫社の授業内容は只単に「誰れそれがこういうことを言った」だけの次元にとどまってしまい、学んだことが自己の一部となり、一つのよりどころとなり得なくなってしまうであろう。

以上のような点を考慮してまず選んだものはギリシア思想の中のソクラテスであった。思想というものには流れのあることを生徒につかませねばならず、その意味でも西洋思想の源流であるギリシアのソクラテスにはふれねばならない。ソクラテスを私は以下のようにも見る。すなわち、ソクラテスの思想の中に人間があらわになっており、すでにそこにおいて人間の基本的な生き方が成立しているを見る。ソクラテスにおいて問題とされた「ただ生きるのではなく、いかにしたら善く生きられるか」という点は最も基本的な課題であったし、又あるのである。そしてこの課題を追求していく際の他者とのかかわりあい、すなわち人間関係も問題とされている。いかに生きべきかということの追求が同時に他者とのかかわりあいをどうするかも追求することにより、これらの点を人間の本性透明らかにしつつ追求したのがソクラテ

スであろう。

### ＜指導のねらい＞

自分自身について問うことから、社会の中における人間のあるべき姿へと眼をむけていく方向で整理してみると以下のようなだろう。(1)いわゆる「無知の知」とはどういうことか、(2)「無知の知」に至る方法としての産婆術とはいかなるものであったか、(3)「無知の知」は出発点であって、目的とするところは、「善く生きる」ことであるが、これはどのような生き方か、(4)社会の中の個人の生き方、ソクラテスにおいて法と正義というものをどのように考え、又ソクラテス自身が生きたか。

いずれの項目についても、具体的な例を示しつつ、明らかにしていくことで決して高速なものではないことを生徒に理解する。

### ＜指導内容＞

- (1) 時代背景について。思想家の思想を語る際に忘れてはならぬことは時代背景である。論者は世界史や日本史などと並行してなされるときに最良の効果を発揮するのである。しかし現行のカリキュラムでは思うようには行かないので、必要最低限の歴史の流れをふまえる必要がある。ソクラテスに関しては当時のアテナイの社会かペリクレス時代以後であり、しかも彼の死の5年前、すなわちB・C・404年にはペロポネソス戦争においてアテネが負け、その結果として、アテナイは混乱期であったことをふまえてねばならない。
- (2) 「無知の知」について。後述する対話法（産婆術）により、相手の無知を自覚させることである。この無知の知ということは、時間を全く超越して現代の我々にもすぐに理解のできることである。我々が知っていると思いついでいることが実際には正確に何一つ理解していないことを悟ることをいうのであるが、これは実は簡単なことのように非常にむずかしいことなのである。我々は日常生活の中において、又思想活動において、常に何をどの程度迄正確に理解しているかということを目問自答せねばならぬこ

とを「無知の知」ということは教えている。しかしながらソクラテスは「無知の知」という点に目標を置いたのではなく、そこから出発して有知に至ることを説いているのである。そして又この知は徳でもあったのだ（知徳合一）。これについては後述することにしよう。

(3) 産婆術又は対話法について。先にも述べたように無知の知に至る方法が産婆術であった。これは自分が知っていると思いなしていることの不完全さを思い知らされ、自らの思考力によって確実なる正しい知識を獲得するに至る方法をいうのである。これなどは具体例により示すのがよからう。尙この項目に関してつけ加えておく点としては、ソクラテス自身も「弁明」の中で、明らかにしている如く、自己の無知を知らされた人間は、非が自己の方にあるとは思いつつ、尙その点を明らかにした相手（ソクラテス）をにくむようになったということである。この点などは、人間とはいかなる性情のものであるかという点の追求につながることであり、ソクラテスの基本的生き方の探究ともなる。

(4) 善く生きるということ。ソクラテスの場合に、善く生きるという善はすなわち徳ということである。そしてこの徳は(2)のところでも少しふれたように、知につながるものであった。そして知が正しく身についたときにそこから正しい行為が生れる。すなわち知行合一ということが言えるのである。この点は一一般的に言う理論と実践の一致ということである。これは又アリストテレスの究極目標であった「観想的生活」と比較するとよからう。「正しいこと、その他すべて徳にもとずいて行為されるところのものは、いずれも善美なるものである」（メモラピリヤ）とある如く、善く生きるとは徳すなわち正しい智にもとずいた生き方であったのである。

(5) 法と正義。ソクラテスにおいては最終的にはやはりポリスの人間としての生き方をアテナイ人に説くことが目標であったのだ。それ故彼にあっては、人の正しい生き方というもの、すなわちポリテースの正義とは、ポリスの法に則っていることであった。クリトンの中では法を擬人化してソ

クラテスとの対話をなすところがあるが、そこではまず第一に、法というものがあつたなればこそ、人は生存することができ、又教育が施こされるのだと説き、それ故に、ポリスが何をなそうとそれに対して反した行為をなすことが正しいと思ひかゝつてソクラテスに問いかけている。しかしながら同時に、法を選択する余地を残し、又法が善くないものであるならばそのことを説くことも可能となつていたのだ。このように法というものには柔軟性があることを十分にふまへつつ、ソクラテスがアテナイに留まつたということは、ソクラテス自身がアテナイの法に十分満足していたことを証明することになる。だからこそ裁判において彼に死が宣告されたとき、従容としてそれに従つたのである。ソクラテスの死は法そのものに問題があつたのではなく、法を十分に理解し、生かせなかつた裁判官に問題があつたと言わねばならない。この点などは「弁明」に明らかである。だから、「悪法も法なり」という彼の死に関する解釈はあてはまらぬといわねばならない。彼が裁判官批判をしているところは又、人間の弱さ、無知の知ということを明らかにしているところでもある。五百名もの裁判官がいても正しさということは単に数によって決めることはできぬということをソクラテスの死が明らかにしている。正しさが多数と一致するとは必ずしもいへぬということ、それを一致させるについては、各人がものごとについて正確に把握していなければならぬことを物語っている。この点などは高校の日常のホームルーム活動の中などでも十分に考慮せねばならぬ点であると思ふ。

＜参考文献＞

- |                  |       |         |
|------------------|-------|---------|
| 「ソクラテスの弁明、クリトン」  | 岩波文庫他 | ¥ 1 0 0 |
| 「メモラガイリヤ」 クセノフォン | 岩波文庫  | ¥ 1 5 0 |
| 「ソクラテス」 田中美知太郎   | 岩波新書  | ¥ 1 5 0 |

## (4) キリスト教思想

— イエス・パウロを中心として —

都立赤城台高校 御 厨 良 一

### 〈精選の視点〉

- (1) ギリシア思想は合理的な思考を通して、人間のあり方、生き方を探究していこうとするものであった。これに対し、キリスト教の人生への姿勢は人間の理性の限界をはっきり自覚し、自己の内面に巣づくっている罪の意識におののいた人間が、自己の無力の対極に絶対的存在、全智全能の神を認め、その導きによって人生を生きていくというものである。
- (2) 人間がとる人生への姿勢は千差万別であり、これを類型化することは危険なことであろう。しかし、あくまでも自分の力を信じ、合理的に人生をわりきっていかうとする生き方と、自分自身への厳しい反省のうえにたつて、ある絶対的な存在を志向し、祈念しながら生きていく宗教的人生観との、きわだった対照のあることは否定できない。
- (3) 日本人は一般的に言って決して宗教的民族ではなく、また、反対に宗教を全く否定する民族でもなからう。いわば無宗教的である。いいかえれば絶対的な存在を真険に問い、その存否の自覚にもとづいた人生観ではないといえよう。この傾向は生徒にもみられ、宗教を迷信と断定し、あるいは何となく魅力ある雰囲気魅せられて、これを盲信する者が、それぞれ少数。そして、他の大半の者は無関心、ないしは「必要でもあるし、必要でもない」という曖昧な態度をとる者が多い。
- (4) 絶対者にむかって自己を捨てることが、必ずしも努力の放棄につながることはないこと、むしろ自己を捨てることが、逆に偉大な実践力と強靱な自信をもつものであること — いいかえれば、宗教的人生観のもつこのパラドックスを理解させたいと思ふ。

### <指導のねらい>

- (1) イエスの生涯、歴史上にあらわれたイエス、バイブルに描かれているイエスの生涯を通して、イエス像を明確にする。
- (2) イエスの描いた神「おそれの神」「裁く神」ではなく、「愛の神」であることを、ユダヤ教の神との比較において理解させる。
- (3) イエスを信ずる者の生き方＝隣人愛の実践、キリスト教徒が求められる人生への態度を明らかにする。
- (4) パウロのはなしを2つの役割、1つは世界伝道を通してキリスト教を世界の宗教たらしめた実践。第二はキリスト教神学の形成。

### <指導内容>

- (1) イエスの生涯。信仰が神と人との出会いであり、その応答からなっている以上、ひとによってイエス像はかなりちがったニュアンスをもっている。ガラリアのナザレの大工ヨセフの子として生まれ、生涯を貧しい者、悩める者の救済に捧げ、ついに十字架上に死んだという歴史上の人物イエスよりも、信仰によってとらえられたイエス像こそ大切であろう。このことを充分ふまえたいうえで、キリスト教の立場からおとせないこと、それは神と人間との媒介としてのイエスということであろう。キリスト教のとくアガペの愛は、親鸞のとく悪人正義の思想と内容的には同じものであるといつてよからう。しかし、キリスト教ではイエス・キリストを信ずることによって得られる愛であり、親鸞のいう阿弥陀仏の慈悲は、人間と仏との直接の交渉であることを充分ふまえる必要がある。
- (2) イエスの描いた神。キリスト教の神は、旧約聖書では「エホバ」と表現され、新約聖書では「父」という名でよばれている。両者は同じ神であるが前者がモーセに啓示された神であり、後者はイエスに啓示された神である。イエスによって新しい神の性格が明示されたといえよう。

エホバの神は次のような性格をもつ。a. 神は万物の存在の基底をなす実在であって、神によって万物は生成された。b. 神は人間を含めて万物

の創造者である。神と万物はこの点で本質的な相違点をもつ。c. 唯一、最高の神で、エホバに並ぶ神は存在しない。d. エホバは絶対的実在であり、従って永遠的な実在であるが、それと同時に歴史を通じて生きてはたらく摂理の神である。e. エホバはそれ故に、時間と空間に制約される物質的な存在でなく、従って、感覚的にとらえられない霊的な神である。

f. エホバは民族と個人とを愛し、導き、審き、また赦すところの人格神である。

このような旧約の神に対し、イエスによってさらに啓示され明らかにされた神は、第一に、神は愛する神であること。第二に、神は、「父」として、人間に対し個人的な親しみをもつ信頼関係にある神であって、民族・人種の枠をのりこえ、すべての人間の神とされたこと。第三に、霊である神を拝するには、霊と真実をもってすべきであって、礼拝の場所や制度などの制限は無意味であるということの三点である。(矢内原氏の説による)

(3) 隣人愛。イエスの描いた神の愛は、太陽が万物をあまねく照らすようにすべての者を平等に惜しみなく愛する神である。迷わない99匹の羊より迷う一匹の羊に心をいためる神であり、健康な者よりも病に苦しむ者にこそ、心をいためる神であった。このような神の愛を、自分の愛としてすべての者を隣人として愛することが、隣人愛である。それは、「汝の敵を愛し、汝らを責める者のために祈れ」という崇高な絶対的な愛の実践を求めた。そして、このような隣人愛に生きることこそ、神によって義とせらるる唯一の道であることを説いた。

(4) パウロの果たした二つの役割。パウロはイエスやその直弟子たちと著しい相違点をもつ。一つは出生において彼はローマ市民権をもち、ギリシア語を自由に話し、ストア哲学の素養豊かな文化人であったこと。第二に、まづキリスト教徒の迫害者としてあらわれ、イエスのよびかけによって、熱心なキリスト教に生まれかわったこと。第三に、他の直弟子たちにくらべ、激しい気性をもっていること。第四に、その活動拠点がエルサレムでなく、

シリアのアンチオキアを中心にしていたこと — の4点である。このようなパウロであったがゆえに、他のイエスの直弟子たちがユダヤ教徒を対象とし、その律法を守ることを原則としたいわゆる「ユダヤ人キリスト教」の中に生きていたのに対し、彼は広くヘレニズム世界の異邦人に語りかけ、律法をこえた福音による救済を約束する福音主義のキリスト教をとくことができた。その布教は「もはや自分が生きているのではない。キリストが自分のうちにおいて生きているのである」というイエスに対する無条件の信仰と愛、そして、それに由来する喜びと自信にうらづけられていた。自己を捨てることは自信の喪失ではなく、むしろより強い自信の発生であることをここで理解させたい。

キリスト教が世界宗教にまで進展したのは、パウロの実践のみでなく、その背後にあったキリスト教神学、つまり、パウロがヘレニズムの言葉と思考形式によって、イエスのといた信仰を解釈し表現したともいえる神学の果たした役割を忘れてはならない。その神学は、律法を守ることによって罪の人間は救われることはできないのであって、イエスの贖罪による救い、すなわち、十字架の恩寵によって与えられた信仰によって神の国に入ることができると説く。ここに律法をもつユダヤ人も、もたない異邦人も神の前においては平等であることになった。また、現在はこの神の子イエスの降臨によってもたされた神の国の始まりであり、やがてすべてが完成するまで、信徒はイエスの苦難にあずかりつつ、そこに救いの喜びを見、希望をもって倫理的にも正しい信仰生活を送るべきであることをすすめる。

#### ＜参考文献＞

ルナン著「イエス伝」(岩波文庫 200円) 矢内原忠雄著「イエス伝」(角川書店 560円) 矢内原忠雄著「キリスト教入門」(角川書店 350円) 桑田秀延著「キリスト教の人生論」(講談社現代新書 220円)

## (5) デカルト

都立東村山高等学校 村松 悌二郎

### 〈精選の視点〉

さきの全倫研の「学習指導要領改定への要望書」でも明かであるが、指導内容が多岐にわたっている点からすれば、その精選は当然であり、教育内容の構造化が強くと要請されよう。構造化とは、少なく教え、多く役だてるものでなくてはなるまい。また梅棹忠夫氏の「知的生産の技術」によれば、「今日学校においては、先生が教えるすぎるのである。親切に、なんでもかでも、おしえてしまうのである。そこで学生はおしえてもらうことになれて、みずから学ぶことを知らない」ことになる以上、教室で学習法を習得させることが大切であるとともに、教師にとって指導方法が一方の要になるといふことである。学習の構造化は、指導方法の改善と相関させなければならない。

精選とは、指導内容を深化し、その内奥に迫る意味においてとらわれる指導対象の限定、縮小をさす。したがって、そこに明瞭な視点が存在しなければなるまい。また、こうした視点は、教壇に立つものの責務として、各自が発見しなければならぬ哲学でなければならない。私は昭和42年夏の全倫研大会での発表以来一貫した視点、学習内容の有機的統一と源流思想とその展開の形式での倫社の構成を考えつづけ、実践してきた。この後者の考え方は、K・ヤスパースに負うところが多いが、デカルトも源流思想の展開の西洋の部に入る。第2分科会は、分科会という制約の中で西洋と東洋をそれぞれ、4つと3つに分類したが、こうした大まかな分類を自分なりに、どのように再構成するか、都倫研の先生方の個性的考えがこの紀要にはできるだろう、事務局をあずかる者として、つい論文の中にも、こんなことがでてしまうのは、習性化した悲しいさかなのか。

## <指導のねらい>

野田又夫氏はその著「デカルト」の中で、デカルトの思想に2つの点、1つは、世界を全体として科学的にみたことと、他は、世界を客観的にみるわれ ego というものをつかみ、このわれがいかにか生きるかを徹底した人だといっています。私は生徒には、なぜデカルトは西洋の、そして近世（近代）の思想家といえるのかを明瞭にしなければいけないと思います。西洋といえは、これほど東洋の精神から遠い思想家がほかにいるだろうか。徹底的な合理主義、普遍的な理性の存在を主張した人であるわけですし、近代といえは、そこにスコラ哲学に別離し、ルネサンス的狂乱をへて、分析的な自我、理性的自我を徹底して把握しようとした人でもあったわけです。

## <指導内容>

### (1) 方法序説について

方法序説が出版されたのは、1637年、デカルト41才のときです。彼は1649年、53才でオランダを去り、翌年、「人の思想も水と同じく凍ってしまい」スウェーデンで客死するわけですので、晩年を除いて、この本ほどデカルトの伝記、歴史的立場づけ、ないしは体系をとらえやすいものもないわけです。しかも、内容を6部に分け読者に読みやすくしている点、また彼の学問方法論を知る点でも、これほどよい本は他にないといえます。

### (2) デカルトの歴史的立場

デカルトは17世紀の人です。したがって、ルネサンス期の思想家に入れないのが通常です。序説第1部は、デカルトの歴史的立場を理解するのに極めて大切な部分です。神学についていえば、中世スコラ哲学の長い歴史があったわけですが、デカルトは2つの理由からそれをさげようとします。すなわち信仰とは知識によって左右されるわけではなく、どんな無知の人にも門はひらかれているし、信仰は理性をこえたもので、啓示宗教は哲学では手におえぬからです。そうみると、神学についてのデカルトの立場は「哲学は神学の侍女である」とするいわゆるスコラ哲学をはなれています。信仰と理

性は別であるというオッカム流スコラ哲学の流れをくみ、自由意志を重んずる立場となります。その点でルネサンス的ですが、ルネサンスとはカトリック教内部の自己批判であって、宗教の立場にたつ再生であるとしたならデカルトは自然神学に近く、その意味でルネサンスをこえた時代の人といえます。

序説6部の最初に、彼は序説完成の3年前、1633年ガリレイが宗教裁判にかけられたことをのべ、本の出版をとりやめようとしようとしたと書いています。「世界論」は出版をとりやめ、序説の出版も気がかりになるわけです。この方法序説も実は、屈折光学、気象学、幾何学という三試論の序文であったからです。こうしてみると、デカルトの生きた時代はまことに科学者にとって受難の時代であったといえましょう。ちなみに、デカルトはコペルニクス、ガリレイとニュートンの中間にあって、力学的宇宙論をとらえた最初の人であったからです。その片鱗は序説第5部にもうかがい知ることができます。

### (3) 方法の規則

なぜデカルトは合理主義思想の代表者なのでしょう。序説第1部の巻頭に良識すなわち、理性は最も公平に人びとに配分されていて、よく判断し、真偽を分かち能力であるといっています。そしてこの理性にたずさわる仕事以外自分の仕事はない、子供の頃からの考えや、教育、読書で得たものは、すべてを疑ってゆこうと決意するのです。そのために、彼は4つの規則を考えます。a. 明晰でかつ判明なもの以外は自分の判断に入れぬ。b. 研究対象は多くとも、解きうるために必要な部分に分ける。分析とでもいうものでしょうか。c. 順序をたてて研究する。単純から複雑へという手順です。d. 全体を完全に見通すこと。以上、極めて計画的で、分析的、科学的に理性にもとづいて問題解決をしようとするのがデカルトの研究方針でした。そうした徹底した合理精神を彼はもっていたわけです。

#### (4) 道徳観

序説第3部のはじめに、彼は家の改築のとき、住む場所がないと改築期間に困ってしまう。ちょうどそのように道徳法則ができ上がるまで行動しないですむわけではないことから、自分に対する暫定的道徳を考えました。

a. 保守主義的道徳で、法律、習慣、宗教を守り穏見な意見をもつこと。

彼は制度など公のものと、自己の学問方法論を峻別しました。

b. したがって行動においてはきっぱりした態度をとるべきこと。c. ストア主義的な克己、禁欲が必要となるといっています。つまり思想だけがわれわれにとって完全に支配できるものだということです。彼はソクラテスの倫理観に於て次のようにいいます。「よく行なうためには、よく判断すれば足りる。徳を獲得するためには、できる限りよく判断するだけで足りる」と。

#### (5) 自我と神

さきにみたように、デカルトの方法の規則を考えてみると、徹底的な合理主義がありました。したがって、少しでも疑わしいものはすべて疑う必要があります。しかし疑っても疑えない存在があるということです。それは疑っている自己だということから、*Cogito ergo sum* という哲学の原理に達しました。このさい、われ思うとは疑う、考えると同義で、デカルトは考えることに理解するという面と意志的な面とを同時に認めただけであります。

さて、疑うというのは認識しているということに比らべ不完全であります。したがって疑っている私も不完全ですから、完全なものを考えるのには、私よりも完全なもの、完全さを自分の中に有している存在としての神を考えたければならないという点から、神の存在を証明しました。こうしてデカルト哲学は合理主義にもとづく生得観念へと進み観念論を形成するわけです。

#### 〈参考文献〉

「デカルト」世界の名著 野田又夫 中央公論社 480円

「デカルト」野田又夫 岩波新書 150円

## (6) 啓蒙思想 —ルソー—

都立両国高等学校 小平 克

### 〈精選の視点〉

先哲の思想の学習には、2つの異った学習態度が必要だと思う。1つは多様な先哲の思想をできるかぎり客観的に考察することによって、より普遍的なものの見方を確立することである。これを自己の視野を広げるという意味で遊心的学習ということができるなら、他は求心的学習といえるもので、先哲の思想を自己のおかれた具体的状況の中でとらえ直し、自己省察を通して自己のものの見方を確立することである。倫理・社会の学習の特色は、この2つの学習を両立させ、対極的に深めながら統一させていくことにあり、そのどちらに偏っても正しい倫理・社会の学習とはいえないのではなからうか。

このような見地に立って、先哲の精選の視点を考えると、既成の思想史の解釈に安易によりかかり、そこでまとめられる思想類型の代表者を選び出すより、現代に生きる高校生にとってどのようなものの見方、考え方が必要なのかを確かめ、そうした重要な思考形式を明らかにした先哲を、思想の流れに位置づけていく方が、生徒の思考を先哲の思想に結びつけやすいのではないかと思う。生徒の思想に対する関心をよびおこし、生氣のかよった授業をするためには、先哲のパースペクティブと生徒の関心とが重なり合う部分を確かめ、そうした問題の解明に先哲の思考形式がどのように役立つのかを具体的に示しながら、その先哲の思想、更には思想類型の特色を説明していく方が効果的だと思うからである。

### 〈指導のねらい〉

ルソーが啓蒙思想を代表する思想家としてとりあげられたのは、民主主義の原理を明確にした人とルソーであることを考えれば至当であろう。

民主主義という言葉が多義的に使われて混乱し、虚しきものであるかのよ

りに考えられている今日、彼の主著「社会契約論」にかえて、その真の意味を問い直すことは、きわめて重要なことだといえる。しかもルソーが提起した問題は今日においても結着のつかないままになっているものが多く、それだけに色々な論議を生んでいる。そうした意味でルソーは今日の問題を考えるためにも、多様なものの見方を理解し多面的にものを考える能力を養うためにも適切な教材だといえる。

以上の問題意識をもって、私はルソーの授業を、啓蒙思想とは何かを学ばせるより、民主主義とは何かを考えさせることに主眼を置いて組立ててみた。

### 〈指導内容〉

#### ○ 代表議会制民主主義の検討

ルソーが代表議会制民主主義は議会主権的院内主義を生み出す傾向があることを指摘した点を取り上げ、人民主権の概念はルソーが確立したのでありこの立場からすれば議会なし行政府はどうあるべきなのかを考えさせ、そのような見方が日本国憲法にどのように定着したのかについて触れる。

#### ○ 多数決原理の検討

民主主義的意思決定とは多数決にあるといわれるが、どうして多数決が正しいといえるかを検討する。ここでロックが「市民政府論」でどのように家長制限理を批判し、多数決原理を正当づけているかを説明し、ロックの思想の重要性を強調する。更に多数決原理が個人尊重の原理と背反するのかという問題を考えさせながら多数決原理の正当性を理解させ、ルソーもこの原理そのものを否定しているのではないことを指摘し、どのような運用の仕方が民主主義の形骸化を生むのかを考えさせる。

#### ○ 一般意志の検討

ルソーが特殊意志、全体意志、一般意志を区別し、意思決定の正当性は一般意志形成にあることを明らかにした点を取り上げ、一般意志は成員各自が自己の立場を主張しながら、自己を超えた全体の立場に立たねば成り立たぬことを理解させる。そして、クラス、クラス、生徒会などの討論と意思決定

が一般意志を生み出す方向でなされているかを考えさせる。

#### ○ 国家における一般意志成立条件の検討

一般意志の成立条件として、社会集団の同質性、部分的団体の排除、成員各自の自律性、情報の公開などが挙げられるが、国家のように階級という異質的集団を内包する組織では一般意志は成り立ち得るのかどうかを考えさせる。そして、法の体系をトラスマコス「正義は強者の利益である」という論理だけで説明しきれるのか、カリクレス流「正義は弱者の利益」であるという見方があてはまる面もあるのではないかとこのことを考えさせながら現代国家においても理念的には一般意志は成り立っているとみるべきであって、政治はこの一般意志に準拠して行なわれなければならないとするのが本来の法治主義の意味であることを理解させる。更に一般意志を成り立たせる実体として民族の問題が最近注目され、その民族と階級を国家論の中にどう位置づけるかをめぐって意見の対立があることも簡単に触れておく。

#### ○ ルソーの直接民主主義についての検討

ルソーの「社会契約論」の論述は、一方に人民主権の立場を主張しながら、他方国家を一般意志の具現体とみることによって、国家主権の絶対性を強調するという二律背反的構造をもっているが、この対立する二つの権力を結びつける制度として定期集会を重視している。市民の政治への直接参加を保障するこのような制度を現代の巨大化した国家組織の中に持ち込むことができるかということは、現実的な立場から考えてみなくてはならぬ問題である。このことは、ルソー自身、彼の構想を実現する国家は大国であってはならないと断っていること、実際にはスイスの地方カントン、アメリカの地域共同体にしか成立していないことなども考えてみて、非現実性を意味するのか、しないのか、直接民主主義的の制度として定期集会以外にどのようなものがあるのか、そうした制度が日本国憲法にどのように取り入れられているのか、などを考えながら、ルソーの直接民主主義の現代政治における意味を検討させる。更に、真の民主主義を形成するために、代表議会制民主主義と直接民

民主主義とをどのように結びつけたらよいかという問題について色々な論議が成り立っているが、結局は後者を前者の補完物とみるロック的立場と、前者を後者の補完物とみるルソンの立場に分けられることもつけ加える。

○民主主義を支える個人の問題の検討

民主主義社会をいかにして形成するかという問題をつきつめていくと、代表議会制民主主義の場合はもとより、直接民主主義をとり入れようとする場合であっても、個人尊重の原理と自律の原理に帰着するということを理解させる。例えば直接民主主義的制度として注目されるフランスの国民投票レフェレンダムの場合でも、権力者が大衆心理を逆用し、立憲的制限を破壊した人民投票プレシットの使用の可能性のあることを思えば、民主主義とは制度の問題であるだけでなくモラルの問題であることがわかる。このことから何故にカントの思想がルソンの思想の発展として成立し自律の原理を明らかにしたのかを説明し、次時のカントの人格主義の授業との関連づけをしておく。

<ま と め>

この授業は民主主義とは何かをできるだけ生徒に考えさせるということに主眼をおき、教師の説明は考える資料を提供するにとどめるよう配慮したつもりである。これは授業法もルソンの思想をもって組み立てようとしたためで、生徒にもこうした授業の仕方が「エミール」で述べてひるルソンの教育的立場なのだということを説明し、「エミール」の紹介をしたらよいと思う。

<参考文献>

「ルソン研究」桑言武夫編 岩波書店 ￥1000

「現代デモクラシーの思想と行動」宮田光雄著 展望10月号 '69

「代表民主主義の難問」市井三郎著 朝日ジャーナル 8.24号 '69

## (7) イギリス功利主義 —ベンサム—

都立東高等学校 杉原 安

### 〈精選の視点〉

今年の元旦の新聞は、それぞれに思い思いの趣向をこらしていたが共通に特徴的だったことは、物質文明と精神文明のバランスを人間の幸福に視点をおいて論じていたことだ。それは1970年代の幕明けという意味もあったのだろうが、とにかく科学技術の発達が高成長を促し、物質的な豊かさを提供してきたことにもある。しかしその反面、新たに生じたヒズミの為に人間の幸福がそなわれていることも事実である。先日発表された「新経済社会発展計画」の原案によると、今後70年代の青写真を「国際化への対応」と「国民生活の充実」においている。したがって福祉国家の基盤づくり高福祉の問題は重要な課題である。そこで従来のGNP（国民総生産）の量的拡大が、個々人の幸福に直ちにつながるという素朴な信仰から、質的な拡大、精神的な豊かさの面が人々の生きがいとして大きく浮かび上がるであろう。戦後20余年、今日民主主義的な意識は形式的には定着したといえる。即ち自由とか平等とかいうことは観念としては頭に入っている。しかし人間の主体的な生き方の問題としては、まだまだ不十分である。街の書店に山積している人生観・世界観の書物が象徴しているように、人間いかに生きるべきかの価値観が共存し、対立し、多極化し、分散化しているといえる。このことは、今後わが国の経済がますます発展し、高度化し、脱工業化社会、情報化社会へ入っていくにつれて大きくなると思われる。つまり確実な価値観が存在しないときに、感覚的な欲望の充足にその拠り所を求めている現代の動向は当然である。

私がここにイギリスの功利主義およびベンサムをとり上げたのは、上記の現代との関り合いからである。彼の産業革命という背景の中で展開された思

想、イギリス経験論の流れをくむ自然主義的な人間観、快楽計算にみられる感情の指標化の問題、および<sup>11</sup>「最大多数の最大幸福」に示される個と全体との調和等々は、当今の問題を追求する倫理学として疑問はあるが、今日の国家が福祉国家を理念としている限りわれわれに示唆する所が多いと思う。

### 〈指導のねらい〉

ベンサムを通して功利主義の思想を次のような視点から取り上げ、生徒の人生観の確立の資としたい。(1) 功利主義は何を狙いとして発生したか。(2) 功利主義の功利ということの意味。(3) 人間の本性をいかに考えたか。(4) 快楽(幸福)の指標化の問題。(5) 個人と社会との調和の問題。(6) 価値判断における動機と結果の問題。

なお、生徒の現実との結びつきについて若干補足すると、全倫研の<sup>12</sup>「生徒の意識調査」(紀要第2集)によれば、大多数の生徒は「一生自分自身を見つめ、よいものを取り入れ、自分を豊かにしていきたい、と妥当な人生観、世界観を示しているが、他方<sup>13</sup>「今のような社会では自分の生き方を真剣に考えてみてもはじまらない。要は要領よく生きることだ」(都会地の男子で10%強)との所謂ドライな、あるいは功利的な考え方を示している。このことは生徒の日常の言動、行動などからみてもかなりの風潮ともいえる。そこでベンサムを通して真に功利主義ということを理解させ、よりよく生きる手懸かりとさせたい。

### 〈指導内容〉

#### イギリス功利主義の社会的背景

まず産業革命(1760~70年代)後の資本主義確立期のイギリスの代表的な社会思想である功利主義成立の背景をみてみたい。第一にニュートン力学を中心とする自然科学のめざましい発達により、経験的事実に出発する物体に関する学問の方法を、精神に関する学問に適用し、個人の知覚、印象、観念などの経験的な事実から出発させなければならないとした。つまり、道徳哲学(Moral philosophy)を精密科学(exact science)

たらしめ、人間行為に客観的な価値判断の基準を提供したいとの願いがこめられていた。第二にアダム・スミスがその著「国富論」の中で、各人の利益の追求は社会全体に利益と幸福をもたらすと言っていたように、18世紀においては個人の幸福の追求と社会の福祉の増大とは一致していたが、産業革命の結果、生産力が飛躍的に発展し少数の豊かな資本家階級と無数の貧しい労働者が発生し、両者の不一致が現実化してきた。このような状勢の中でラッダイト運動(Ludite Movement)社会主義の思想が生ずるが、功利主義の思想は個と全体との一致を人為的に調和させることを意図していた。人為的利害一致説(the theory of artificial identity of interests)といえる。アダム・スミスの場合は同感により自然に利害が一致するとしていた。

功利主義ということ。

功利という言葉についての感想を生徒に聞いてみたら<sup>11</sup>「高利」だという者がいた。確かにシェークスピアの喜劇<sup>12</sup>「ヴェニス人の商人」の中のユダヤ人シャイロックを思いうかべる。しかし、これはその訳が適切を得ていなかったのであって、功利(utility)は効用、実用、実益などである行為に役立つことを意味する。功利主義は広義においては、感覚的快楽に最高の価値をおくヘドニズム(Hedonism)を含むが、今ここでは狭義の意味で、ベンサムによる個人の快楽、幸福を最高の価値とすると同時に、社会の成員の快楽、幸福の最大を追求する考え方である。そしてこれは今日のイギリスでも強い。

ベンサムの道徳思想について

彼の道徳思想はその主著「道徳及び立法の原理序論」の冒頭に述べられているように誰でも経験できる快楽、苦痛という単純な事実から出発して、推論によって結論を得るが、人間が快苦で動かされている限りその法則(結論)は普遍妥当性をもつとしている。即ち<sup>13</sup>「自然は人類を苦痛と快楽という2人の主権者の支配下においてきた。我々が何をしなければならぬのかという

事を指示し、また我々が何をしようかという事を決定するのは、ただ苦痛と快楽だけである<sup>11</sup>と述べている。そこでは、人間行動を規律する原理としての快苦、そして快を増す手段が善、正であり、逆に苦を増す手段が悪、邪である。されば快を増し苦を少なくするように行動せよという功利の原則が成立する。カントは当為(sollen)と存在(sein)とを別の世界とし、道徳方則、自然法則の支配下にあるとするが、ベンサムは快苦という同じ原理の支配下においている。道徳的価値判断を快苦の事実判断に還元し得るかとの批判が当然生じてくる。更にこの事実判断の為に快楽測定<sup>12</sup>の7つの基準を提示している。全ての快楽がこの基準で量の大小に還元し得るか、また個人が自分の快楽の最上の判定者であるという面から一定の限界はあるが、<sup>13</sup>「不快指数」などにみられるような今日の感情の指標化の傾向に興味ある材料であろう。ベンサムにとって社会はアトム的な個人の集りであり、社会的善は個人的善である。従って個人は最大多数の最大幸福をもたらすことが、同時に自分の幸福を最大ならしめる性質になればよい。この両者の一致を図るのが広義の教育であり、またその中の1つが立法である。この意味からも多くの社会改革にのりだしている。最後に動機と結果の問題であるが、経験主義的には人間の動機は問題にならなくなるが、しかし慈愛の動機に発する行為など、善から発する行為はより多くの快楽をもたらしやすい。故に功利の原則は、もっとも啓蒙された慈愛の命令にほかならないと言えるのではないか。

#### ＜参考文献＞

「道徳および立法の諸原理序説」 J.ベンサム 中央公論社 ￥480

「ベンサム功利説の研究」 山田孝雄 大明堂 ￥580

「イギリス政治思想Ⅲ」 W.L.デイヴィッドソン 岩波書店 ￥300

## (8) 社会主義思想

— マルクスを中心として —

都立三田高等学校 菊地 堯

### <精選の視点>

- (1) 西洋の「近代」をリードした人たちによれば、個人の独立・自由・平等の実現は、バラ色の理想世界を約束するものであった。しかしフランス大革命やイギリス産業革命に代表される「近代化」がもたらした現実、一面では新しい傷口を見せ始め、世界はその痛みの深まりに苦しんだ。
- (2) この痛みの実感からさまざまな方向から「近代」の再検討が始まり、ここに「現代思想」の原点が示される。現代思想へのとりくみは、この原点の追体験とそこからスタートする「近代」の原理批判、さらには新しい人間の生き方への模索・選択へと向うことになる。
- (3) マルクスをふくめた社会主義思想は、個人の尊重の原理が経済生活の実態の中で私有の絶対化として実現し、結局は貧富分裂の絶対化の形で抽象的个人尊重を空洞化することに批判の鋒先をむけるものであった。
- (4) 社会主義思想を倫社で取扱い視点は、政治経済・歴史と深いかわりに立ちつつも、現実生きる「人間」そのものへの切りこみであり、具体的には近代の人間観との対比に向けられるべきである。
- (5) この点、マルクスのうち出した、生産・労働の主体としての、またそれを媒介として社会的連帯に立つ人間は近代の理性的・個人的人間の原理に対立するものとして、諸社会主義の中で最も強烈な特色を示す。そこで、諸社会主義の中でマルクスを中心にとりあげ、特にその人間把握に焦点をしぼって取扱いたい。この軸に弁証法、唯物論、人間疎外論、唯物史観、階級闘争論、共産主義、社会革命論等を必要な限り関連づけるが、その細目にとらわれずマルクスの原点を問うことから、現代に生きる人間の探究に向いたい。

### 〈指導のねらい〉

- (1) マルクスの人間観の特色。 a .生産・労働が人間の本質活動である。  
b .生産活動において人間がかかわる二つの面とその関連。 c .そこから導き出される歴史観・社会観。 d .ここに貫く弁証法と唯物論
- (2) その時代の現実へのマルクスのとりくみ a .人間疎外の問題。 b .そこから導き出される資本主義批判。 c .階級闘争と革命による人間回復の主張
- (3) マルクス以前・以後の社会主義 (4) 現代と社会主義

以上の項目を立てたが、(1)は人間存在の原理、(2)ではその現実への適用、(3)と(4)で歴史的展開と、現代に生きる人間の姿勢を問うことをめざしている。この学習においては特に人間の直観—思考—行為への階梯をしっかり自覚させ、一知半解の近道反応を戒め、着実な総合把握の態度を養わせたい。

### 〈指導内容〉

- (1) マルクスの人間観の特色 a .生産・労働が人間の本質的活動である。  
マルクス以前の人間観は、人間の思考と行動を抽象化して、その対立や一致を説いた。ことに近代は理性が支配した時代で、人格・自由・平等・愛など理性がひとり歩きして求めた理想が人間を支配すべきものとされ、いわゆる空想社会主義者もその範囲から出なかった。これに対してマルクスは人間を、物質的自然に働きかけてこれを有用物に変化させて生きる存在として把握した。人間の思考もこの働きかけの中で成立発展する反作用として位置づけられる。 b .さて、この生活活動において人間は二つの面にかかわりを持つ。第一は上述の自然への働きかけの面であり、その自然対人間の相互作用の様相が、生産力とよばれ、この発展が人間生活の発展の土台をなす。次に、生産活動において人間は単独で自然とあい対するのではなく、一定の人間同志のかかわりあいをもってあい対する。この生産における人間相互のかかわり方を生産関係とよぶ。かくして生産力・生産関係の二面が同時に一つの生産活動に存在するが、生産力が最も基礎的であ

り、それにふさわしい生産関係を成立させる。c. しかしながら生産力の発展が即生産関係に直線的に波及発展をもたらすのではなく、古い生産関係は発展する生産力の桎梏となり、この矛盾の究極までの拡大によって始めてうち破られる。このような人間生活の把握が唯物史観の原理であり、d. ここには人間活動を自然への働きかけと見る唯物論と、矛盾を発展の原動力と見る弁証法とが貫いている。フオイエルバッハの受動的感覚的唯物論・ヘーゲルの観念的調和的弁証法との異同に注目しておこう。

(2) その時代へのマルクスのとりくみ。a. 人間疎外の問題が若きマルクスの最初の現実へのアプローチとして注目される。さきに見たように、ここでいう人間は抽象的理性的個人ではなく生産活動の現場に直接とりくむ人間＝労働者であった。この典型的人間が蒙っている疎外をかれは働けば働くほどすなわち人間の本質的活動を進めれば進めるほど自己の生産物からも、喜びからも、主体性からも、要するに人間性から遠ざけられて行く姿としてとらえた。b. このように人間が自己の本質を失う状況を人間の自己疎外というが、マルクスにあってはこれは観念上の遊戯ではなく、全く物質的社会的な起源による帰結であり、かくてかれはその根本原因を生産関係の中に求め、また生産力と生産関係との矛盾に求めて行く。すなわち労働と資本との分離、対立という生産関係の矛盾へ、また産業革命による生産力の発展が生産活動に与えた社会的性格（分業協業の進展による）と生産物の私的所有との矛盾へと追求を進めて行く。そして私有制の完成、社会的生産の拡大を資本主義の特色としてとらえ、その解決を現実の生産活動の主体たる労働者の自己の本質回復への行動に求める。c. 階級闘争と革命による人間回復の主張がこうして導き出される。原始状態を除く一切の歴史を所有と生産（労働）との対立としてとらえ、資本主義をその最終形態として位置づけることによって、現実の労働者の革命運動を所有と労働との矛盾の、すなわち階級対立の根本的廃棄への過程とする共産主義革命の主張がこうして現われる。共産主義の実現によって始めて人間は、

その本質的活動としての生産労働において、自己自身の主人公たる地位を回復する。生産は一企業の利潤を直接の目的とすることなく、直接に社会的消費（生産的消費を含め）を目的とし、また労働も資本の共同者としての労働者（無産者でなくなった）の主体的活動として人類共通の相互奉仕の喜びを回復する。また労働が本来の喜びを回復することにより怠惰は一掃され、積極的人間が成長する。これがマルクスとかれの協力者エンゲルスの抱いた信念であり、その必然的実現の証明のために資本主義の運動法則を研究して資本主義の原理であり根本矛盾である剰余価値の所有を指摘したのが「資本論」であった。

(3)・(4) 諸社会主義と現代の問題 いわゆる空想社会主義の理想社会への主張はマルクス主義形成に重要な示唆を与えたから先覚者として十分の尊敬が払われているが、その方法論への批判から人間観の批判に進んでマルクスの立場が分れて行った。マルクス以後の修正マルクス主義・レーニン主義・さらには現在の混迷したマルクス主義の路線対立の問題があるが深入りはむしろ木を見て森を見失い結果に陥るおそれが大きい。社会主義の初心を中心に人間観の視点を失わないことに留意したい。社会革命と人間革命の問題は古くて新しい問題であり、特に実存主義の発想とあわせて深めたい焦点である。個人の主体としての確立、社会的連帯性いづれも軽々しく捨て得ないだけに、真の統一を求める広くて深い人生探求への誘いがそこにある。

#### ＜参考文献＞

- |                                      |                  |
|--------------------------------------|------------------|
| 「空想より科学へ」エンゲルス 岩波文庫 ¥100             | } 生徒用            |
| 「共産党宣言」マルクス 同上 ¥50                   |                  |
| 「経済学哲学草稿」マルクス（人間の自己疎外）同上 ¥150        | } 教師による<br>} 抜萃用 |
| 「経済学批判」マルクス（唯物史観の公式）青木文庫 ¥200        |                  |
| 「共産主義の原理」エンゲルス（私有廃止の結果）青木文庫 ¥200     |                  |
| 「マルクス」小牧 治 清水書院人と思想(20) ¥250 人物理解に適當 |                  |

## (9) 実存主義

—キルケゴールを中心として—

都立江戸川高等学校 佐藤哲男

### 〈精選の視点〉

時期が来て大根の種子を大地にまく、やがて芽が出て農家の人はその間引きをする、それは1本1本の大根が十分に成長するためである。かつてプラトンは「哲学とは魂の羽ばたきである」といった。羽ばたきするため、上昇するため、魂の成長のためには余分なものを間引いて軽くしなければならない。「倫社」学習においても負担過重の羅列的知識は可成り思い切りよく切捨て、内容の深化へと進まなければならないと思う。

さて、そのナタをふるう精選の視点、基準について私は第2分科会の線に協調して。人間如何に生きるべきか、真実な人間の生き方を主体的に問ひかける姿勢、ともすれば見失いそうになる真の自己を回復しつつ自覚的に生きて行く点をあげたい。すなわちそれは自己がより所となるべき思想、信念をもつことにつながる。そこで現在、大衆社会的状況、人間疎外の現象の進行、日常世間的なものへの自己埋没という点において、人間の主体性の回復を強調する現代思想の一つの大きい流れ、実存主義に目を向け、その源流の思想家としてキルケゴールを取り上げた。脱皮出来ない蛇は死ぬというが、人間もその本体を覆いかくす外皮をめくり、真の自己の存在の根源に至る作業、自己変革が必要であろう。

キルケゴールの広範な著作、思想内容もしぼり、(1)主体的真理 (2)人生行路の三段階、(3)死に至る病の3点をあげたが、「現代の批判」も関連させたい。

### 〈指導のねらい〉

キルケゴールを通して、何を学び何を生徒に与えるか。

- (1) 彼が真剣に取り組んだ実存的人生の課題と、その誠実な求道者的思索する人生態度、かといってキルケゴールはいわゆる聖人君子ではなく、レギー

ネとの恋愛問題に見られるように人一倍人間の苦悩を苦しんだ、その処し方を考える。(2) 現実のわれわれの人生は一回限り、他人と代替出来ないもの、さらに個々の既成の人間の足もとには、不安、罪、絶望と無の深淵が横たわる、人間は主体的に自己の決断によってあるべき真の自己としての未来を選択する。実存的自由をもつ存在であることを主体的に学びとらせる。(3) 第3分野と関連して、現代社会の病理、人間疎外の問題、日常世間性への没入を反省しつつ教材を構造化する。コンサル事件はマスコミの暴力に対する一つの例となろう。

#### 〈指導内容〉

(1) 主体的真理の探究。「たとえ全世界を征服し獲得したとしても、自分自身を見失ったら何の益があるか」ということがキルケゴールの信念であった。この全世界の征服とは、ヘーゲル流の世界の理論的体系づけをさす。さらに彼の22歳の時の日記に、「私に欠けているのは何をなすべきかということについて、私自身決心がつかないでいること。…私にとって真理であるような真理を発見し、私がそれのために生きそして死ぬことを願うようなイデーを発見することが必要なのだ。いわゆる客観的真理など探し出して見た所でそれが私に何の役に立つか。…堂々たる国家理論を展開し、あらゆる所から抜き取って来たきれぎれの知識をつなぎ合わせて一つの体系にまとめあげ一つの世界を構成し得た所で、私がその世界に生きるわけではなく」。と述べ、ここに主体性が真理であり普遍的理念よりも単独の実存に価値をおく実存的思想が示される。さらにヘーゲル流の思弁的哲学体系の理論の空虚さへの批判がこめられている。

自己がそれによって生きようとする主体的真理は、自己が主体的に情熱をもって選びとり自己の内面に確保されるものであり、普遍的理論や体系によって説明することの出来ないものである。そこから主体性が真理であるという実存的真理観が展開される。実存的に真理を問うものは、「真理とは何であるか」と客観的に観照、テオリアするのでなく、「自己にとって真理は如何

にあるか」と主体的に問うことで、それはキルケゴールにとって究極においては、キリスト教的真理であった。彼がそれのために生き、死ぬことを願うようなイデーとはそれであり、「自己が真の自己と成る」とは真のキリスト者となることであった。さて実存 (Existence) とは、彼が『哲学的断片への後書』において重要な意味をもたせた哲学用語であるが、文字通り「現実存在する」というところで、本質 (Essen) のように普遍的に妥当性をもって通用するものではなく「今、ここに、こうある」特定の実存在である。普遍化出来ない、他人と代替出来ない具体的、<sup>ま</sup>生の人間存在である。さらに今、ここにある人間存在は絶えず未来へと進んで行くから、実存とは自覚的に自己が自らを主体的に未来へ決定する、生成としての存在であり、「あれか、これか」の選択を迫られるところの孤独な単独者として存在する。

## (2) 人生行路の三段階

キルケゴールの実験的思索の成果によって示された実存の人生論である。彼は審美的実存、倫理の実存、宗教的実存の人生行路をあげ、人間の魂が信仰へと目覚めて行く過程を示した。先ず最初の審美的人生は感性的享樂を意味し、そこには放蕩時代のキルケゴールの青春体験が昇華された形で展開される。それは現実を美化し享樂するドン・ファンのような生き方であるが、その生き方はその中に溺れて肝心の自己自身を見失うもので、「欲樂極まり哀情多し」といった空虚をもたらすものである。そこで審美的生活の空しさを捨て、結婚して健全な家庭生活を営み職業をもつという倫理的生活がすめられる。…皮相な享樂の傾向の強い生徒に良い参考となれば；そしてこの審美的と倫理の人生の生き方は「あれか、これか」という形で、決断を迫られる。この倫理的生き方は、現実の審美的自己を乗り越えて、ゾルレンとしての自己を実現して行くものである。しかしその際、前者を否定する……ところの普遍としての自己は温存される。だから本当の自己否定にはならない。どう慢さえ伴って限界に来て挫折する。そこで彼は旧約よりアブラハムの物語を引用する。神はアブラハムの信仰をためすため、ひとり

子のイサクを犠牲とすることを要求し、アブラハムはイサクを殺そうとする。ここに、宗教的に祝福されることと倫理的悪が背理する、これを彼は「宗教的信仰による倫理的なものの目的論的停止」という。この宗教的実存の段階に至って知性はつまずき、信仰が始まる、真の実存は神の前に立つ単独者であり、人間と質的に異なる。永遠が時間の内に現れるという背理的な神に自らを委ねる決断によって、真理へと飛躍する。すなわち理性から信仰への飛躍であり、これを質的弁証法とよぶ。

### (3) 「死に至る病」

ここで彼は「死に至る病とは絶望のことである」と規定する、肉体の死よりもっと恐ろしいのが人格の死（自己喪失）を招く「絶望」である。「精神である人間」がその生きる根底を失って死を選ぶことは身近かによく見られることである。そして絶望とは「正しい自己関係の喰い違い」で、自己が自己を指定した力（存在の根源）を見失って有限な自我の殻（日常的な生）にしがみついておこるものであり、それは若い娘の心にも全ての人の心に巣くう。だから「世間では自己自身を失うという危険がいとも平静に行なわれ」「そういう人間は自己自身を失ったからこそ商取引をうまくやっただけ」のである。さらに魂の医者たる彼は、この絶望の心理的分析としてその諸形態をあげ、絶望を来り越えるには、日常的な生を絶望と自覚し、信仰の決断によって自己を指定した神と共にある。新しい生活（宗教的な実存）へ向うことであるとする。

#### <参考文献>

- |                             |      |
|-----------------------------|------|
| 「キルケゴール」 世界の名著 梶田啓三郎他 中央公論社 | 480円 |
| 「キルケゴール」 清水書院「人と思想」 工藤綏夫著   | 200円 |

## (10) 仏教の思想 — シャカ —

都立豊多摩高等学校 金井 肇

### <精選の視点>

指導内容構成のための精選は、学問的研究にうらずけられなければならないことはもちろんであるが、学問的精査に終るものではない。科目としての立場から、生徒の生き方に結びつくようにという視点から、精選し構造化されなければならないと思う。

人間は、とくに青年期は、さまざまな強い欲求をもつ。そのために世界とのかかわりを見落して、欲求の満たされないことにもだえ苦しむことが多い。自己の生き方を求めさせるには、自己と世界の関係にまで立ちもどらなければならないと思う。道徳説を結論的に教えるだけでなく、その結論の必然的な要請をもつものであることを含めて理解させなければ身についたものにならないであろう。その意味で、自己および世界の在る姿をまず見つめ、その上に立って人間のあるべき姿、自己のありかたを求めさせなくてはならないと思う。このような視点から仏教の指導内容を精選してめたい。

焦点をしぼって指導内容を構造化すれば、周辺的な事項についての知識は割愛してもよくなり、指導のねらいははっきりさせうる。

### <指導のねらい>

「仏教についての知識」に終わらないように、シャカの見た世界を追体験する形で見つめさせ、その上に立って自己の生き方を確立していく一助とする。指導の観点は四諦の説法にそって次のようにする。(1) なぜシャカは人生と世界を見つめなければならなかったか(自己の問題として位置づける)。(2) 自己および世界の在る姿をどう見出したか。(3) 人間(自己)はそれにどう対応して生きなければならないか。何に価値を求めるべきか。

## ＜指導内容＞

### (1) シャカ出家 — 生徒の自己の再発見へ結ぶ

シャカは29才のとき、王子としての幸福な日々にしひこんできた空しさを自覚する。やがて老いと死が到来する。死を超える価値を見出せない人間にとって、死は恐しい。生死を超える価値を求めて、かれは出家した。生徒にとってもこのことは、まだ痛切な問題でなかったとしても、いやおうなく自分の問題として受けとめないわけにはいかない。

### (2) 四諦（諦＝真理であるが、dharmaでなくsatyaの訳、眞実、真相）

(a) 苦諦：人生をありのままに見れば、苦悩に満ちている。苦が人生の真相である。老、病、死のほか、怨憎会苦、愛別離苦、求不得苦など苦の諸相はひとりひとりの問題として捉えさせることができる。

(b) 集諦：苦諦が人生の現実についての認識であるならば、集諦はその原因の探求である。人間の存在が苦であるならば、苦の原因はなにか。それをはげしい欲望であると見出す。感覚的欲望（欲愛）、生存への欲望（有愛）、生存の断絶への欲望（無有愛）があげられる。無有愛は、古来インドにあった。輪廻からの解脱の願い、永遠のねむりへのあこがれであった。輪廻があってもなくても、輪廻の思いが人間を苦しめるかぎり、解脱への願いもはげしい焦燥感となって人を苦しめたであろう。

欲望が苦の原因であり、欲望を原因として人間存在が生じた、というだけでは、生徒をなっとくさせるような説明はむずかしい。仏教は論理的な思想であるから、論理的な補強がたいせつだと思う。欲望が苦の原因であるということ、論理的な側面を見おとして、時間的継起的な因果関係として理解させるだけに終ると浅いものになるし、そのまま滅諦につなぐと厭世感につながりかねない。苦は、主観が対象（外的事物であれ自己の願望であれ）とのかかわり合いの中で感ずるものであるから、対象となるもの、欲望を生むもの、すなわち世界の在る姿に眼を向けなくてはならない。そこで、縁起説、無我、無常感をとりあげる。自己と世界とのかかわり合いに眼を向ける。

㊦) 縁起説：縁起説は、人間の苦の根本原因を無知（無明）にあると見出し、無知をなくすることによって苦も消滅すると説く。縁起説もまた、時間系列としてのみ捉えるべきでなく、論理構造としても捉えられなければならない。「これあるに縁りてこれあり、これ生ずるに縁りてこれ生ず、これなきに縁りてこれをし、これ滅するに縁りてこれ滅す」（相応部經典）。これが縁起観の最も古いものだと言われる。時間的因果系列とともに、構造としての存在の理法を語っている。時間系列で捉えれば、すべての存在が無限にさかのぼる何かの原因によって生じていることになる。構造原理で捉えれば、アソ東のたとえ（雑阿含經）にみるごとく、存在の「相依性」「相関性」を示している。したがって、時間系列でみても相依、相関的であるのが存在の理法となる。独立、恒常のものはないもなく、すべて存在するものは他の条件とのかわり合いにおいてのみ存在しうる。このことを別の面からいえば、「無我」となる。

㊧) 無我：人間も、人間のおかれている世界もすべて五蘊（色、受、想、行、識＝世界の構成要素）の結合と離散によって成りたつ。五蘊はいずれもみなātman（我）ではない。その意味で無我である。五蘊がいずれもātman（不変の実体）でないなら、人間も世界も変化しつつある五蘊の縁りかかり合いによって存在しているものである。五蘊の集合体としての自己のほかに我は存在しない。このことは『ミリンダ王の問い』にもみごとな論理をもって語られている。（無我の価値的側面はここでは省く）

五蘊が常に変化しつつあるものなら、その集合であるこの世界も人間もともに無常である。すべては変化の流れの中にある。

㊨) 無常：人間は主観をも客観をも固定的なものと考えがちである。しかし、なにひとつ固定的なものはなく、たえず変化している。この変化する世界にあって変化しないことを願う心から苦悩が生ずる。変化する世界の真相をありのままに認識することによって、苦の原因となる煩惱の無意味なことを知り得て、苦から脱出する手かかりとなる。（以上 Sein の認識）

(c) 滅諦：欲望は、変化するものに対し、変化しないで自己のもとにとどま  
ることを求める。これが苦惱の原因であるなら、欲望を減すれば苦がなくな  
ることは理の当然である。世界の真相を認識し、欲望を減し、宇宙の真理に  
帰一して永遠の平安に至った境地が涅槃であり、涅槃に到達した人が仏陀である。

(d) 道諦：理論上は上のとおりであっても、実践的に自身が体得するのは容  
易なことではない。その実践の方法について示したのが八正道であった。

そこでは己れを空しくして真理に帰一することが求められる。

### 慈 悲

諸行無常という真理にさからう欲望が苦のもとであるなら、真理に帰一す  
る生き方は私欲の否定にある。私欲を否定し己れを空しくしたとき見えてく  
るものはなにか。人びとの真理を知らない（無明）が故に苦しんでいる姿で  
あろう。人は自己のありかたを深く問い、自己の深いところに沈潜したとき  
はじめて、真に他の人間の上に関心を持ちうるという。そこに同苦同悲の感  
情が生まれる。利他の行をなしうるのである。生きとし生けるものすべてに  
対する無限に広い慈悲の心がわき出てくるのである。（以上Sollenとし  
て）

以上は指導時間3時間の予定で構成したものである。3時間の場合、この  
ほかのことがらは制愛せざるを得ない。仏教の教えの基本は四諦の説法につ  
くされているといわれるように、根本的なものは得られると思う。

### ＜参考文献＞

「仏教」 渡辺照宏 岩波新書 ￥150

「知恵と愛のことは」 増谷文雄 “現代人の仏教1” 筑摩書房 ￥650

「インド集」 辻直四郎ほか 世界文学大系4 筑摩書房 ￥650

「インド哲学史」 金倉円照 平楽寺書店 ￥900

# (1) 日本の仏教思想

— 親鸞、日蓮、道元 —

都立竹早高等学校 石 森 勇

## <精選の視点>

仏教思想は、日本文化の基盤となり、日本人の芸術観・人生観形成に決定的エネルギーをあたえた一つである。したがって、外来宗教・思想である仏教が、日本人の宗教・思想として摂取・発展していった過程を概観することはきわめて当然であろう。

理想をいえば、①聖徳太子・奈良平安仏教（貴族社会・律令体制）— 2時間 ②鎌倉仏教（武家社会・封建制）— 3時間 ③ 室町江戸仏教— 1時間を授業時間に割りあてたい。しかし、精選の立場から授業時間・指導内容を考えるなら、次の3点に視点をあわせて授業を展開したい。

- ① 貴族社会・律令体制を反映した奈良平安仏教の特色 30分
- ② 貴族社会の解体過程から武家社会の形成を反映した鎌倉仏教の特色
- ③ 末法思想に対決する2つの立場—親鸞・日蓮タイプと道元タイプ

前者は他力への道、後者は自力への道 2時間30分

政治・経済・社会体制の変化、それともなり思想との対決という2つのポイントから、先哲の生き方、考え方を学ぶことにより、生徒の人生観・世界観形成の糧になれば授業が成功したということになる。

## <指導のねらい>

次の2つのことを生徒に理解させる。

- ① 奈良平安仏教は、律令国家体制の安全保障、貴族の現実的欲望の満足、といったことを祈った。仏教体系の解説・成仏の問題は論外であった。
- ② 旧体制から新体制に変化する社会的危機感、末法思想に対する個人の「生き方」として、他力、自力の2タイプがある。

## 〈指導内容〉

ここでは、鎌倉仏教の指導展開のポイントだけを書くことによる。

平安時代までの仏教は、客観的にて、どんな教え、どんな経典が最もすぐれているか、を問題にした。そして、自分に最もあった教えは何か、は問題にされなかった。ところが、平安-鎌倉の政治・経済・社会体系の大変革にもとなり末法思想の影響で、人々のあいだには、現実生活に対する絶望感が深くなっていった。その結果、人々は「自己の生き方」を問題とし、自己の生き方に最もあった教え、経典を追求するようになった。

さて、親鸞と日蓮は、ともに末法思想をそっ直にみとめ、そこから出発している。親鸞は、自己反省から出発し、自己を煩惱具足の凡夫と自覚し、念仏の道を選び、絶対他力信仰に到達した。彼の特色は、あくまで個人の救いを問題とした点にある。ところが、日蓮の場合は、個人の救いよりも、国家の危機救済に主関心が向けられている。

一方、道元は、末法思想に対し、まっこうから反対している。そして、人はみな仏性をもっているとして自力信仰の道を歩んだ。

鎌倉仏教における親鸞・日蓮・道元の思想は、上のような立場からとらえてみた。授業は、3人の主著の抜すいを利用して展開する。

親鸞の教え 『歎異抄』から要点を抜すいし、プリントにする。生徒に読ませ、口語訳をさせ、思想内容を考えさせる。

①弥陀の本願 第1条「すべてのものをすくわればやまないと誓われた弥陀の本願の不思議なおはからいに助けられて、極楽へ往生できることであると信じて、念仏をとなえようという心のきざした時、その時はもはや、弥陀のすくい光の中にとりこんでけしておすてにならないというありがたいためぐみにあずかっているのである。(以下本論では中略しておくが、生徒用のプリントではあげる・以下中略とはこの意味である)またわが身をふりかえてみて、これではすくわれないのではないかと不安を感じておそれるにもおよばない。弥陀の本願ですくわれないほどの悪はないからである。」

この文章から、絶対他力信仰の根本にあるものが、弥陀の本願による扱ひの絶対性であることを理解させる。

② 絶対他力の信心 第2条「おのおの人が十余か国を通過して、いのちがけで勉強してきたのね、往生極楽の道をつねようとしてである。—中略—要するに、おろかな自分の信仰心においてはこのようになる。したがって念仏をしようが、念仏をしまいが、それはどうでもよいのです。」

第3条「私親鸞にとっては、ただ念仏をと覚えて弥陀のたすけにあずかれという師法然聖人の仰せを聞いて、それをまにうけて信じているだけである。

—中略—

どんな修行もできない身であるから、どうしたって地獄は私にとって最後はそこにおちつかむばならないついの住み家である。」

親鸞にとって極楽往生さえも問題でなくなり、念仏さえ仏からたまわるものである。弥陀の本願に対する絶対的な信仰が語られている。

③ 悪人正機 第3条「善人でさえも浄土へ往生させていただける。まして悪人においてはおさら往生させていただける。—中略—それであるから、善人さえ往生する。まして悪人が往生するのはいうまでもないことであると、聖人は仰せられた。」

悪人こそ弥陀の正しい救済の対象であること、悪人とは善悪のはっきりした判断力のある人＝人を殺す武士、狩猟をする獵師や漁師、つまり、自分に絶望している人をいう。

日蓮の教え

① 法華経 「妙法尼御前御返事」 「仏陀がその生涯に述べられた教えはどれもおろそかにはできないものである。それらは、われわれの父であり、偉大な教えを示された仏陀の不滅のことであり、すべて真実であり、皆真実を語ったことばである。—中略—そして、それらの中で法華経こそは完全な意味での真実のことばであり、最高の真実を述べたことばである。」

日蓮は法華経こそ最もすぐれたお経だといっている。そして自分を法華経

の行者と自覚した。

② 日本国の柱 「日蓮は日本国の棟であり梁であって、日本国を支える重要な人物である。—中略— 日蓮の教えだけを信ずるようになれば、日本国は亡びてしまうであろう。」

はげしく他宗を攻撃し、民衆と国家をすくおうとする気迫をのべている。

道元の教え 『正法眼蔵随聞記』

① 末法思想批判 末4「世の中の人の多くが、仏道を学ぼうとする志はあるが、世は末世であり、人はいやしく劣っていて、—中略— 仏道を学ぼうという人はただ明日を期待することがあってはならないのであり、今日今時のみを仏法の教えるところにしたがって修行するようになくなくてはならない。」

道元は、末法思想を一時の方便として否定した。人間はだれでも悟りを開く能力があるし、自力で修行して仏道を学ぶよう志しをたてよととく。

② 身心脱落 『正法眼蔵』現成公案「仏道を修行するということは—中略— 自己の身心および他人の身心にそなわる我執から解脱して、悟りの境地に生きることである。」

③ 只管打生 第5「仏道を学ぶことの最大重要なことは坐禅であり、これが第1になすべきことである。—中略— 他のことにしたがってはならない」  
仏道修行には焼香も、礼拝も、説経もいらない。坐禅だけでよい。坐禅こそ悟りそのものであり、これによって、すべての雑念をはなれた精神の自由がえられるととく。

〈参考文献〉

『親鸞』	石田瑞曆	日本の名著	¥ 5 8 0
『日蓮』	紀野一義	”	¥ 5 8 0
『道元』	(予定)	”	¥ 5 8 0
『日本歴史 5』	中世 1	岩波講座	¥ 4 5 0

東京都立玉川高等学校 川 瀬 吉 郎

〈精選の視点〉

「生徒が自己の生き方を確立していく手がかりを与える」ものとして、いろいろな資料が考えられるが、現在の倫社があまりにも抽象的・内面的な問題を祖上にひせるために生徒教師間の意志の疎通を欠き、現代のかかえている問題をぼかし、両者の間に問題意識のずれが生ずる。主体的に自己とは何かを問い、問いかけに答えるものが具体的な資料であれば、抵抗少なく思考できるとして、あえて経済的な分野から資料を選んでみた。本居宣長については今まで多くの人々によって「古道」「ものあわれ」の中心思想について論ぜられてきたから、ここでは経済思想の価値の部分を取りだして授業導入の資料とした。

〈指導のねらい〉

当時の封建社会に生きた一人間が、農民についてどう考え、どうしたら農民は幸福になるのかを考察していったその過程をふりかえり、現代に生きる我々がこの思想のなかから何を学ぶかを考えていきたい。単に封建社会の流れのなかで必然的にそうなるより仕方がなかったというのでなく、当時自分が生きていたならば、どんな生き方をし、どんなふうに問題を把握したのだろうかを問われねばならない。(1)「無くてはかなわぬ物」と「無益のおごりに用る物」との区別と、その区別がなぜ必要なのか。(2)百姓・士・大名の困窮の原因は何か、その対策をどうしたらよいか、その対策を通しての宣長の思想は何か。これらの事項から自分の生き方を考えていきたい。

〈指導内容〉

宣長が生活した江戸時代中期は商品経済の波がひたひたとおしよせて封建制のたがをゆるめていった時代である。慶安御触書によると「百姓は衣類の儀

布木綿よりほかは、帯きもの裏にも仕るまじき事」とあって麻布、木綿の外  
の着用は禁止せられたが、「今はおしなべて袴帯などには絹類をも用ふるや  
うに」なつたと宣長はのべ、さらに「むかしは藁葺ならでは敷ざりしほどの  
屋も、今は畳を敷くやうになり、昔は雨中に蓑笠わらんづにてありし者も、  
今は傘をさし履をはくやうに」なつたとあるように、百姓は畳の上で生活し  
傘、下駄が日常、もちいられ生活が華美になっていった。生米の産額は慶長  
・元和から正徳・享保頃までに倍増し、四木三草が奨励せられ各地に特産物  
が生まれた。

#### 無くてはかなはぬ物

人間に役立ついさいの物は宣長にしたがえば、皆土地から生ずる。現今の  
経済学が生産の三要素として、自然・資本・労働をあげるものであるが、彼に  
とっては土地が根元であった。人間が働きかけるにも自然が、五穀・四木・  
三草を育成させるにも土地が必要である。土地なくして生産物なく、土地な  
くして一國は存在しない。封建社会は土地に依存した経済であり土地から切  
離された生産は思いも及ばなかった。しかしいたずらに土地生産物に依存し  
た経済とはいっても広大な土地がよいとしたのではない。「広き國は、大抵  
人民も多くて強く、狭き國は、人民すくなくて弱ければ、勢におされて、狭  
き國は広き國に従ひつくから、おのずから広く尊く、狭きは卑きやうなれど  
も、実の尊卑美惡は、広狭にはよらざることなり、そのうへすべて外國は、  
土地は広大にても、いずれも其広大なるに依じては、田地人民はなほた稀少  
なり、唐土などは諸戒の中にては、よき國と聞えたれども、それすら皇國に  
くらぶれば、なほ田地人民は、なほはた少くまばらにして、たゞいたづらに  
土地の広きのみなり」と述べているように、広大な土地があつても荒地であ  
つたり、人民が少なかつたり、田地からの収穫が少なかつたりしたのでは意  
味がない。豊かな田地と多くの人民が國富につながるゆえんであつた。現在  
の経済成長率、大國論と比べて興味ある叙述である。

人間の用をなす一切の物は「無くてはかなはぬ物」と「無益のおごりに用

る物」とに別れる。無益な物は有用な物の出るのを妨げ、さまざまな人の手間が多く入る。無益の物の生産に土地を費やすのは損失であり、土地は有用な物の生産に使用されねばならない。ここで必要で有用な物とは絶対的、固定的なものでなく、昔は奢侈な華美な物であっても今の世では無くてはかなわぬ物となる相対的な物である。宣長は本末転倒している世上の生産物について、人間が本来、神代から必要であり有用とする物と役立つない奢侈品との区別を立て、本来的な物の生産に力を注ぐことを主張したのである。

有益な必要物の第一は、米である。江戸時代は「米遣ひの経済」と呼ばれるように米中心であった。玉くしげのなかで「稲穀は、人の命をつとけたもちて、此上もなく大切な物なるが、其稲穀の万国にすぐれて、比類なきを以て、其余の事どもをも准へしるべし」とある。この国に生まれた人は朝夕米を食べることができるのが、神代から定まった道なのであり皇神たちの御恩に感謝してすごさねばならない。

無くてはかなわぬ物を生産しているのは百姓であるが、彼等の生活は恵まれていなかった。百姓が強訴濫放するのは「困窮にせまりて、せん方なく」おこるのである。宣長はこの一揆の原因を「地頭へ上る年貢甚多」ということと、「世上一同の奢につれて、百姓もおのづから身分のおごりもつきたる」ことであるとした。年貢米は大宝令の頃廿分の一から十分の一ぐらいであったものがだんだん重くなり、当今では「わずかに農民の命をつとけて、飢に及ばぬほどを百姓の手に残して、其餘は皆年貢に取れるくらゐ」になってしまった。この世で一番大切な物を生産している百姓が困窮しているのは末の無益な物の生産や流通のせいであり、年貢の高いためである。そこで百姓のことを考えて年貢を今の半分に改めて欲しいと藩主に願いながらも、現実に年貢を半減することは困難な事であると認めて、それが適わないならば「定まりの年貢のうへをいさゝかも増さぬ」ようにと要求している。宣長の百姓に対する同情と現実との妥協がみられるところである。

百姓がすべて貧困に苦しんだのではない。肥料をふんだんに使い、人の手

間を十分にかけて米を生産している富有な百姓もいた。彼等は米の売買でも時宜を心得てするから利益が多かったが、貧農は収穫したときには売らねば生活できないから端境期まで米をもっていることはむづかしかった。豊農と貧農、金持ちと貧乏人之との差は拡大していった。このような認識から持てる者から下層階級に富を分配してやるのが問題となる。宣長は金銀を富める者からほどよく散じて貧民を救済したらよからうという。お上が強制的に取立てるのではなく、貧者を救うため抛金を募るのである。

#### 無益のおごりに用る物

武士の困窮の原因となる無益のおごりに用いる物は宣長の見解によると、膨大な当時の武士の官僚的機構が主である。一人ですむような仕事を上役、下役数多くいて、手間費用ともにかける。昔は天子ぐらゐの身分の人が分相応に華美、身持を重々しくしたのが大將軍、さらに大名と次々に移り、今の百石とりの人には千石四五千石とり、分不相応である。「甲乙丙と上下段々の役人有て、事をとり行ふに、昔は甲がみづからとりあつかひし事も、今は乙に云ひ付て取扱はせ、先年は乙が勤めたりしわざをも、近年は丙につとめさするやうになり、去年までは丙が手づからつとめたる事も、いつしか今年は丁に勤めさ」せるようになる。

現在の日本人にとってどの生産物を促進助長し、どの生産物を抑止するかを考える段階にきているのではないだろうか。資本のおもむくまゝ、利潤の高い生産物に生産が集中するのを人間性の見地から再考するために無くてはかなわぬ物の考へ方に学ぶべきではないだろうか。

#### 〈参考文献〉

本居宣長全集 岩波書店

### (13) 日本の近代思想 — 福沢諭吉 —

都立忍岡高等学校 渡辺 浩

#### <精選の視点>

日本の近代思想とは、西洋思想の移植にすぎないともいわれる。しかし、西洋思想の受容過程において、同化と反発とが激しくあらわれていることは見のがすことができない。それは「東洋の道徳、西洋の芸術（技術の意）」（佐久間象山）という古来の考え方に基づくもので、外来思想に対する当然の抵抗として、伝統思想が強く働くからである。両者の対立は、歴史の基本的な変化と既成の秩序とのあいだに鋭い断層のあらわれるところ、つまり流行のことはで「断絶の時代」にまさしく見られる現象といえよう。日本の近代化の過程は、まさにそのような「断絶の時代」であった。

この時代にもっとも有効性を発揮した思想として、一方に文明開化の思想としての啓蒙思想があり、他方にキリスト教の思想がある。それらはともに自由民権思想につながり、のちに社会主義思想となって展開する源流となった。ここではその啓蒙思想の代表として、福沢諭吉をとりあげることにする。かれは百年前の「断絶の時代」に生きて、近代化の橋を架けた貴重な思想家の一人である。福沢はしよせん啓蒙家にすぎないという評もあるが、福沢の啓蒙思想の根本には価値観の変革が渦まいていた。「断絶を生きる」論理には、価値転換が要求されるのである。かれは文明開化の外形ではなく、精神の変革を求め、生き方を変えること、すなわち人間を変えることを求めたのである。かれは「世界のなかの日本」という立場から、文明立国を唱え、国民独立の気風を強調した。独立自尊の精神こそ、啓蒙精神の躍如たるあらわれといえよう。このような観点から、啓蒙思想の代表として福沢をとりあげてみたいと思う。

### 〈指導のねらい〉

- (1) 日本史の学習と関連させながら、「日本の近代化」の特色について、その歴史的社会的背景を理解させる。
- (2) 「日本の近代思想」と見られるものは何かという問題を取りあげて、明治以後の日本における、さまざまな社会思想や文学思想の展開をふりかえってみる。
- (3) 明治以後の日本人が、西洋思想を十分に消化吸収することができたかどうか、またその受容のしかたについて反省してみる。
- (4) いわゆる「文明開化」とは、たんに有形(生活)の変化のみを意味するのではなく、無形(精神)の変化を重要視するという思想が、その根底にあることを学ばせる。
- (5) 明治初年における「啓蒙思想」について、「明六社」の成立事情と思想的意義、同人の活動状況について理解させる。
- (6) 啓蒙思想家の代表として、福沢諭吉の政治意識(人権思想)、自然観、倫理観、実学の考え方などについて学ばせる。

### 〈指導内容〉

#### 日本の近代化の特色

日本はアジアにおいて、西欧的近代化に成功した唯一の国である。明治のはじめ幕藩体制は崩れ、日本は近代国家・市民社会へ向かって急速な道を歩んだ。しかし藩閥政府のもとで近代化は、これをはばむ多くの制約のために歪められ、矛盾と混乱を含んでいた。つまり明治維新の性格として、近代化をめざす前向きの改革主義とともに、その反面にうしろ向きの復古主義の傾向をもっていた。また鎖国による後進性のために、急激にしかも短期間に近代化を進めなければならなかった事情も、近代化をゆがめた原因といえよう。このような日本の近代化における矛盾は、明治以後の日本人の考え方に大きな影響をおよぼしているのである。

#### 西洋思想の受容— 伝統的な立場と福沢の姿勢

日本の「近代思想」とは、西洋思想の移植にすぎないとも見られるが、大

きく見て、輸入思想と伝統思想との対立・雑居の状態としてとらえられる。日本には古くから、佐久間象山の「東洋の道德、西洋の芸術」とか、橋本左内の「器械芸術かれにとり、仁義忠孝われに存す」という考え方があり、この「和魂洋才」の精神的伝統が輸入思想に対する抵抗の姿勢となって現われた。この立場では、西洋文明の物質面だけをとりいれて、精神面は過去の伝統のままにしたがう、つまり人間は変えないで外形だけを変えるという考え方である。ところが福沢は「有形において数理学、無形において独立心」を日本に欠けたものとして強調した。それは事物を必然において理解する立場と、倫理的な理想としての独立自尊——自由平等の思想である。かれの考え方の根本には、思考方法の変革があり、人間を変え生き方を変えるという価値転換の軸として西洋文明をとらえようとする発想が見られる。西洋文明に対する、このような受容の態度は、近代的な人間を作ろうとする啓蒙思想の立場であったが、後進国の日本にはついに根づくことができなかった。

#### 福沢諭吉の啓蒙思想

##### (a) 天賦人權論

「学問のすすめ」のはじめに書かれた「天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず」の一句は、明治の人びとに新鮮なショックを与えた。それは天賦人權論であり、自然法に基づく人間平等論である。自由・平等な人間のあり方を確認することから出発して、現実の人間社会を見つめる。そこに学問の有無による生き方の差別を発見し、「実学」を唱えたのである。この文章はもともと、アメリカの独立宣言の一節、「すべての人は平等につくられている」(All men are created equal)を表現したもので、人間平等とは権利通義(right)、いいかえれば基本的人権の平等を主張している。ここから封建的な考え方を破ろうとする意図がうまれる。

##### (b) 自然観

福沢が科学主義を強調したことは、啓蒙思想家としての一つの目標であった。かれは「物理学の要用」のなかで、「欧州近時の文明は、みなこの物理

学より出でざるはなし。物みな偶然にあらざるなり。」といている。「物みな偶然にあらざる」とは、必然性の発見、すなわち自然の法則の発見を意味するのである。かれが東洋に欠けたものとして唱える「数理学」とは、事物を必然性において理解する立場、合理的・科学的な学問をさしている。このような科学主義の立場こそ、儒教思想の根本的な変革であり、倫理学を根底とする儒教思想にかわって、自然科学が新しい時代の学問の原理にならなければならぬという主張であった。このような自然への主体的な態度の確立は必然的に既存の封建的な秩序の打破をめざすことになるのである。

### (c) 倫理観

福沢の意図した身分秩序の打破は、儒教的倫理観の破壊であり、根本的には価値観の変革を意味する。因習とか迷信でさえ、既成の価値意識とのつながりがある。かれが楠公権助論を唱えたり、鬼が島の宝とりを非理としたのも、価値転換のためのショック療法といえよう。「文明論の概略」のなかで「利を争うは、すなわち理を争うことなり」と述べたのは、利の追求を倫理化する意図からであった。それは封建社会の金銭観を破り、労働の価値を正当化しようとする、市民社会の金銭観ともいえる。かれの私塾において授業料をとり世人を驚かせたが、金だけとって水引をかえしたという。かれは日常生活のすみずみにしみこんだ既成の価値意識を破ろうとしたのである。

### 〈参考文献〉

- |          |       |       |      |
|----------|-------|-------|------|
| 「福沢論吉」   | 月本の名著 | 中央公論社 | ¥780 |
| 「福沢論吉」   | 小泉信三著 | 岩波新書  | ¥150 |
| 「福沢論吉」   | 鹿野政直著 | 清水書院  | ¥200 |
| 「学問のすすめ」 | 福沢論吉著 | 岩波文庫  | ¥100 |

3

第3分科会

主題・類型別観点からの指導

内容の精選

## (1) 第三分科会の研究経過報告

世話人 沼田 俊一

寺島 甲祐

【第1回】 7月1日 於都立小平高校 10名

研究部長より「主題・類型別観点から指導内容の精選を研究する分科会」であるという趣旨の説明があり、年間の研究予定をたてた。夏休み中にどんな主題別あるいは類型別の考え方がありうるかを、4冊の改製教科書を手がかりに各人が自由に製作して持参することを宿題とした。

【第2回】 9月13日 於都立鷺宮高校 9名

土曜日の午後、先の宿題に対して、コンブリ、佐々木、中村、寺嶋、沼田の各氏から提案があったが、結局全体構造（三分野を総合した立場）の中で主題を設定するという立場で提案したコンブリ案に質問が集中した。しかしまだ決定とならず、コンブリ案のような類型の考え方で、今後の研究に支障はないかどうか、次回までに考えてくることになった。話し合いの中で用語に定義づけが行われた。「主題」とは思想的扱いの反対概念である。しかし、三分野の各々についても主題的扱いが可能である。つまりテーマのようなもの、たとえば幸福、自我、自由などを主題と呼ぶことにしよう。「類型」とは個々の主題に対して違ったいくつかの考え方があるはずである。その世界観の差が「類型」によって分けることができるのではあるまいか。つまりいろいろな世界観の類型があり、それをもとにして個々の主題を考えることができるというものであり、話し合いを一步前進させるものとして有意義な見解であった。

【第3回】 10月25日 於私立育英工業高専 6名

寒冷強雨の悪条件下に話し合いが進展し、重要な研究の大綱が決まった。

(1) 主題別、類型別構成は世界観、人生観のところだけに限らず、三分野をくずし、いわば縦割りの形で主題別、類型別の指導法を考える。問題点とし

て、① 第一分科会の研究とダブルことにならないか。② あまり広げた形では焦点がぼけるのではないか。③ 心理学・社会学等の事実科学の上に、価値観・世界観等を取り扱うのは困難ではないか、の三点が指摘され、討議の結果、SeinとSollenを同時に取り扱う研究も有意義であり、むしろその方が倫社教育としては望ましいのではないかということになった。そこで再度コンプリ案について主題を検討し、次節に述べるような主題の決定を見た。

【第4回】 11月27日 於都立四谷商業高校 8名

前回の主題数は2単位では少し多すぎるようであるが、いずれも重要な主題と考えられるので今回は一応そのまま認める。報告書の執筆を前提としての話し合いに移り、分科会としては、Seinとして事実を示し、それに対して、相対立すると思われるいくつかのSollenに考え方(思想)を典型的に示すのがよいであろう、また、一つの主題の中には結局Sein,Sollen心理学・社会学・倫理学の問題が全部含まれていて完結しなければならないということが確認された。主題を分担し、会を閉じた。

## (2) 「主題・類型別観点からの指導内容の精選」 の考え方

第三分科会の研究経過を省ると、精選の観点は「倫社の指導内容は多すぎるから減らそう」という立場ではなくて「倫社指導に必要な不可欠なものは何であるか、また、その指導順序をどう配列したら一番効果的であるか」という立場で一貫しており、その過程で内容をどのように精選したらよいかという問題に取り組んだ。

まず主題の配列は、個人→社会→世界というような広がりを考えて、それぞれの次元で人間とは何かを考えさせるようにする。類型は主として思想の類型の中に集約したものが次の主題名である。番号の前の◎印については、各会員が分担して具体例を研究した主題であり、後に展開例を述べる。

第1編 個性における人間の理解

- ① 青年期 — 人間のめざめ、性と人間
- ◎ ② 人間の行動 — 分析心理学（フロイト・フランクフル）自由意志と決定論、性善説と性悪説
- ◎ ③ 道徳と人間 — 功利主義、カント、自然法と実定法、キリスト教の道徳、道徳と世界観
- ④ 意識・思考の世界と人間 — アリストテレス、ベーコン、デカルト、パスカル、コント、知行合一、知識と悟り
- ⑤ 感情の世界と人間 — 合理主義と感情主義、芸術と感情、日本人の感情の特徴

第2編 社会における人間の理解

- ① 個人と社会
- ◎ ② 文化と人間
- ③ 経済・労働と人間
- ④ 現代社会と人間
- ◎ ⑤ 家庭生活と人間
- ⑥ 地域社会と人間
- ◎ ⑦ 国家と人間
- ⑧ 国際社会と人間
- ⑨ 民主主義と人間

第3編 世界における人間の理解

- ◎ ① 宇宙における人間の地位（世界観の問題提起）
- ◎ ② 世界、この妙なる存在 — 世界観の展望（主な世界観のまとめ）
- ◎ ③ 人間、この未知なるもの — 人間観の展望（主な人間観のまとめ）
- ◎ ④ 宗教と人間 <以上①～④が世界観への序章（導入）となる。>
- ⑤ 西洋の代表的な世界観 — 類型別 —
  - 1. 不可知論 — スペンサー

2. プラグマチズム — ジェームズ・デューイ
3. 機械論的唯物論 — エピクロス
- ◎ 4. 弁証法的唯物論 — マルクス
5. 現象論 — フッサール
- ◎ 6. 観念論 — ヘーゲル
7. 汎神論 — ストア
8. 二元論 — ソクラテス・プラトン・アリストテレス
- ◎ 9. 創造論 — キリスト教、回教
- ◎ ⑥ インドの世界観 — バラモン教・原始仏教・大乘と小乗
- ⑦ 中国の世界観
  1. 儒教の思想 — 天の思想、孔子、孟子、荀子
  2. 道家の思想 — 老子、荘子
  3. 現代の中国思想 — 毛沢東
- ⑧ キリスト教の世界観
  1. ユダヤ教
  2. 初代キリスト教
  3. キリスト教の発展 — パウロ、アウグスチヌス、トマス＝アキナス、ルター、カルビン、現代のキリスト教
- ⑨ 日本の世界観
  1. 古代日本人の考え方
  2. 日本の仏教
  3. 日本の儒教
  4. 日本のキリスト教
  5. 西洋思想の受容
- ⑩ 結論 — ヒューマニズム

(寺島・沼田記)

### (3) 人間の行動

都立四谷商業高等学校 永上 肆朗

#### 〈精選の視点〉

人間の行動は欲求とその満足によって終るが現実には誘因の多様化によって価値葛藤が行われ、行動が選択される。欲求は一次的なものから二次的なものへ高められ、すべての欲求が満たされることはないから欲求不満が起る。これをどのようにとらえ克服していくかが価値ある行動にとって問題となる。ここでは行動に介在する素質と環境の二つの要因をとり出し人間形成を考えていきたい。人間の本性は善とみるか悪とみるかによって分かれるが、人間の本質のみでなく存在の様態を問うことが人間性の問題となろう。素質を環境とのかかわりの中で、環境を生きた人間の関連で把え、これら内外の要因を相互に見ていくところに決定論が成立する。又人間はこれらを止揚しつつ主体的決断によって自己を選択していくのである。ここに道徳との関連を見出す。このようなアプローチが心理学ではどのようになされつつあるか。フロイトはワトソニズムの皮相な行動主義に対して存在の深層を見出し、クレッチマーの素質決定論に修正を行いヴィクトリヤ朝の偽善を暴いたといわれるが、それすら理論の制約を免れず人間心理をメカニズムとして分析するにとどまった。それ故ユング・アドラ・ピンスワンガー、殊にフランクはフロイトの決定論的汎性慾論を批判する中で精神分析→現在在分析→実存分析への道を開き、現実を重んずる平面的なものから未来へ志向せんとするものへと行動を深め価値化を試みた。こうして主体的な実存把握が可能になったのである。以上を要約して次の三点に整理したい。(1)性の善悪の問題を人間の本質・素質と考える性善説・性悪説について(2)人間のあり方としての決定論に対する非決定論(3)フランクのロゴセラピーと実存分析

### ＜指導のねらい＞

- (1) 自分の性格の弱点を見つめその克服を考える
- (2) 現代社会の特色と慾求不満の現状を考えながら自分の行動を検討する。
- (3) 良識ある判断と責任ある行動とはどういうものか
- (4) 実存主義的人間学の背景と流れ
- (5) 実存分析が青年期心理の人間形成に果たす役割（不安・死・愛・価値・）  
青年期の悩みが通俗的な問いにあきたらず人間の生存にかゝる根源的問いかけや未来への問いかけの世代であることを考慮するとき、実存分析の立場がかゝる青年に深い自己洞察をもたらし局所的な性格特性・症候をなおすところになく全人生に対する構元や世界観にかゝるものであることを考えさせる。

### ＜指導内容＞

#### (1) 性の善悪

人間の本性を善とみるか悪とみるかは古来さまざまである。東洋では孟子が四端の心をひべ性善説を主張した。しかしこれは現実を無視することになりかねない。現に人間は悪への可能性をもっている。悪は人間の外にあり、感覚がそれにひかれることより内なる善性がくまされるといふものである。とするとむしろ現実に対する道徳的要請といえよう。荀子はこれに対し、人間の本性が善であればどうして聖道が必要であろうかと反論し性悪説を唱えた。孟子は人間の内心にある貴重な道徳的欲求を重視してそれを性とよんだのであるが、荀子は利益を追求する感覚的欲求を重視して性の概念を規定したことになる。しかし二つの立場は人間に本来共存する契機をなすものである。性は「未発の中」であり中正で善なるものであるが、情に動いて過度に流れるところに悪が生ずる。(朱子) こうして善の心にひそむ悪魔の叫びは悲しい人間の根源的事実であり、ここにうごめくところに迷妄がある。行為の価値判断の上では善は動機論・悪は結果論の立場をとるものである。

#### (2) 決定論と非決定論

a. 決定論とは原理的には現象界におこる自然の因果律によって人間存在が本質的に規定されるという考え方であり、人生観におけるペシミズムとともに宿命論を意味する。これに対しカントは人間の行為の価値を内的世界から発する自己の厳しい良心の命令に従うところにありとした。自己立法の原理は「意志の自律の原理」として万人に妥当し、意志の選択は普遍的法則への意欲の中にふくまなければならない。こうした自己の内的決定による自律的自由と責任こそ人格形成に不可欠な契機をなすものである。カントは人間をかゝる自然界に属するものとして有限性を認めつつ可能的存在として道徳的主体としての人間の価値に無限の信頼をおいたのである（倫理的自由）

b. 1. 現代の実存主義哲学が形成された2000初頭以来の流れは科学的物質的な生産技術優位の時代であった。すべてが機械化され、人間が大衆に埋没し、真に自己の姿を見失う状況から生まれた。二度にわたる大戦は人類に深刻な反省を促し、今や重要な課題は「人間とは何か」というより「人間とはいかにあるか」という点に深められた。このことは人間を普遍概念によってではなく、個別的具体的存在として対他的に環境との深いかゝわりを通じて自己を実現していく「世界一内一存在」として捉えることになった。このような志向性は唯物論にみられる環境決定論に対して自由な主体としての人間存在の意義を明らかにしたのである。（実存的自由）

ロ. 科学主義の世界観はすべてのものを単純に「元素」に「環元」できる事実を発見した。フロイトは一種の科学主義の立場から人間のパーソナリティーをエス、自我、超自我の構成体と見て、精神現象はこれら要素の相互作用から発現されると説いた。これは「本質主義」に立脚するものであり、その限り精神分析は決定論たるを免れえない。これに対し実存思想の立場から人間を全一的に捉え、人間存在の自由と責任性を強調したのがフランクであった。（実存分析的自由）

### (3) フランクの実存分析

フランクは人間を分析的にではなく統体的に示し、身体的・心理的・精

精神的な人間の層構造によって精神分析によるフロイトの「快樂の意志」とアドラーの個人心理学による「権力への意志」とともに「意味への意志」である精神性を強調した。この人間観はデカルト以来の身心＝元論に対立するものであり又、経験哲学に根拠をもつ行動主義の物質的一元化（ワトソン主義）に反対するものである。この精神的なものから行う心理療法がロゴセラピーと呼ばれ、人格的精神的実存の深さを測るという意味で精神的なものに向けられる療法が実存分析の立場である。フランクは人生において実現すべき三つの価値として①創造価値②体験価値（愛・同情といった積極的な感情を体験することによってえられる）③態度価値（または苦悩の価値）を考え、このうち最後のいかにとしがたい苦悩の価値を最高のものとした。人間はいかなる状況下にあっても使命的性格をもち、「責任に向っての」決断を求められている。ヤスバースのいう「決断する存在」である。フランクはフロイトとアドラーの立場を克服して意識性と責任性を強調し、人間存在の独自性と一回性（代替不可能性）に注目したのである。そして人生において自ら主体的に責任と勇気をもつことを要請した。かくして彼は心理療法の面における出会いを通じ、神経症の精神に対する呼びかけを通じて本来の実存にひきもどそうとする。生きんとする意志は「生命への畏敬」にも似て気高い。以上のようにフランクのロゴセラピーは、人生を意味と価値とで充足することを説く点で極めて倫理性が高く、しかもこれが先験的ではなく、具体的な人間存在の分析の中から引き出される点に特色がある。

#### ＜参考文献＞

- フランク著作集「死と愛」¥660 「時代精神の病理学」¥500  
みすず書房 道德形而上学原論 カント 岩波文庫¥100 どうしたら幸福になれるか W・Bウルフ 岩波新書（上）（下）各¥150  
孟子 金谷 治 岩波新書 ¥150 精神分析入門フロイト  
世界の名著 中央公論社 ¥480

## (4) 人間と道徳

東京都立小平高等学校 井原茂幸

### 〈精選の視点〉

人間は、自己とは何か、自己のおかれている世界とは何かを探求し、自己と世界を調和統一して自覚的に生きようとする存在である。哲学は実にこの自己と世界とのかかわり合いを究明することにあるのである。

さて人間とは何か、人間の正しい生き方は何かを具体的な生活の諸問題に即して答えるものが道徳であるが、この判断や行動の原理を理論的体系的に捉えようとするのが、倫理思想である。これらの道徳思想はいずれも人間観・世界観をその根底にもっている。従って倫理思想を取扱う場合には、その根底にある人生観・世界観を理解することが絶対必要になってくる。世界観を大別して(a)存在の法則によって価値を規定しようとするもの、(b)逆に価値の原理によって存在を規制しようとするもの、(c)存在と価値にそれぞれ別個の領域を認め、この二元的世界を宗教によって統一しようとするものに分類することができる。いま西洋の代表的倫理思想をこの類型に従って分けると次の基本的な三つの道徳説が挙げられる。

すなわち(1)功利主義的倫理思想 (2)目的論的倫理思想 (3)形式主義的倫理思想がそれである。そして(1)の倫理説には、ベンサム、J Sミルの功利説、スベンサーの社会進化論的倫理説、ホブス、ロックなどの自然法思想が、(2)の倫理説には、キリスト教の道徳説、ギリシヤの道徳説、スピノザ、ライプニッツ、ヘーゲルなどの倫理思想が、(3)の倫理説には、カント・デカルト・ルソーなどの道徳説が含まれる。ここではその基本的な考え方として功利主義、キリスト教、カントの批判主義の道徳思想を取上げ、その考え方を理解することによって人生の基本的な見方や考え方を養わせたい。

### ＜指導のねらい＞

以上の三つの代表的な倫理説について次の観点からその考え方を理解させる

- (1)人間の本性をどうみているか
- (2)道徳の原理を何に求めたか
- (3)動機説に立つか結果説に立つか
- (4)個人と社会の立場をどのように調和させようとしているか
- (5)何を善と考えたか
- (6)徳と幸福の問題をどう考えたか
- (7)自己の道徳的判断と社会規模をどう考えたか

現代における人生観・世界観は多様であり、善ないし価値観も多元的である。従って特定の世界観や価値観を学ばせるだけでは意味がない。生徒がこれらさまざまな考え方を主体的に受けとめ思考して、自己の人生観世界観を確立する上でのヒントを与えることにねらいをおきたい。

### ＜指導内容＞

功利主義・自然法思想　功利主義の倫理思想は、自然科学の身体的人間観から出発する。人間の自然(本性)は快楽を求め苦痛をさけるようにつくられており、ヒュームによればこれは生命の自己保存の欲求にもとづくものである。この本源的欲求は善でも悪でもなく自然的である。功利主義はこの経験的事実に立って人間の望ましい生き方を探求する。そして何が望ましいかを示す証拠は、J Sミルのいうように「人がそれを望んでいる事実以外にない」のである。

人間の欲求の対象となるものは善であり、嫌悪の対象は悪である。ベンサムは善行為はその結果もたらされる快、幸福の量が苦、不幸との相対的關係において最大となる生き方である。彼はこの考えを社会に押し広げ、「最大多数の最大幸福」という道徳の原理を導き出した。J Sミルは快楽には質的差違があると見て量計算に反対し、精神的快楽に人生の崇高な価値を認め「己れの欲することを人に施せ、己れを愛する如く隣人を愛せよ」というキリスト教の道徳に功利主義の極致をおいた。しかしながら個人の幸福の追求が直ちに社会の幸福につながるとはいえない。この二つの価値を結びつける原理としてベンサムは法律的制裁を、J Sミルは人間の道徳的心情を重視した。

自然法は人間社会の存在の原理であり法則である。ヒュームによれば政府は暴力によって成立したものであり、その正当性は非理性的慣習と有用性にもとづくこととされる。自然法思想はベーコン以来の科学的経験的認識によってもたらされる社会の存在論的思想である。各人の自然権をより安全により確実に保持するために自然法は存在するのであり、その保障のために契約社会が必要になる。自然法思想にとって最も基本的な観念は自己保存の原理である。社会契約の内容はそれぞれホブズ、ロック、ルソーによって異なるけれどもその共通した考え方は、キリスト教における神と人間との契約と異なり、平等な人間相互間の契約に存する点にある。しかもこの契約の内容は神からの啓示によるのではなく、各人の自由意志ないし一般意志にもとづくものであり、人間の理性的承認を得たものである。そしてその実行性の保障をロックは抵抗権に、ルソーは革命権に求めたのである。

このような社会契約説は、その基礎を人間観に置いている。ホブズによれば人間の本性は利己的であるから社会は自ら「万人の万人に対する闘い」という状態を現出する。ロックは人間を欲望と共に理性をもつものとして、ルソーは本性を善なるものとみてそれぞれ自然状態を平和又は理想社会と考える。こうした人間観の相違が社会契約の内容の相違を生み出している。

キリスト教の道徳思想 キリスト教的世界観は価値によって存在を統一しようとする考え方に立つ。価値の根拠は人間からではなく、人間を超越した神から与えられる。キリスト教によれば、人間存在は原罪をもつものとして悪であり、この悪から救われる道は神の愛とイエスの十字架のみである。善の根拠は超存在的な存在そのものの原因にあり、そこでは神の愛、神のことばのみが善である。他面人間はまた悪から救われ得る可能的存在として、即ち善への自由をもつものとして語られる。そしてこの可能的存在を救済へと結びつけるものが信仰であり、信仰によってのみ悪なる存在が始めて善の光に照らされるのである。この現実世界は究極的には神の摂理によって支配され秩序づけられているのである。

この摂理の認識は理性だけでは不十分であり、知情意をあげて心全体の愛求を必要とする。アウグスチヌスによれば人間は神によって発展する種としてつくり、完全に秩序ある状態へと創造される。悪の根源としての自由意志と欲望は信仰によって傲慢さと墮落を拭い落されなければならないのである

カントの道徳論 カントは存在(現象界)と価値(叡智界)の客観的成立条件を吟味し、その二元的認識の上に立って統一の途を探求しようとした思想家である。この立場は批判主義と呼ばれる。彼は科学的自然と倫理的価値の領域を峻別し、存在の論理的分析を通して自然学の形而上学的基礎づけを行なうと共に価値の論理的分析を通して規範倫理の形而上学的基礎づけを行なった。

カントの倫理説は動機の純粹性と道徳法則の普遍妥当性において成立っている。そして道徳法則の原理を自由な人格をもつ純粹意志に求め、客観的には道徳法則に対する理性の普遍的認識に、主観的には道徳法則に対する尊敬と義務の感情に道徳的価値の根拠をおいた。更に彼は幸福を人間の存在ないし欲求にもとづくものとして、道徳の原理とすることを拒み、義務と共存する限り他人の幸福を希うことを道徳として認めた。しかし、徳と幸福を望むことは人間の自然であり、その一致こそ最高善の理念であるがその実現の可能性は宗教への要請として求められる。即ち世界は目的論的に見れば終局的には両者の異質的価値が一致するようにつくられていることへの確信がそこにある。

#### 〈参考文献〉

- 功利主義論 J Sミル 世界の名著 中央公論社 ¥550  
社会契約論 ルソー 岩波文庫 ¥100  
新約聖書略解 山谷、高柳、小川編 日本基督教団出版部 ¥1000  
道徳形而上学原論 カント 岩波文庫 ¥100

## (5) 文化と人間

東京都立荻窪高等学校 小川 一郎

### 〈精選の視点〉

ここでとりあげる「文化」は、社会の全生活様式をさす。高尚であり望ましいとみなされている精神的なものだけをさすのではない。すなわち。ピアノを弾いたり、詩を読んだり、名画を鑑賞することだけの文化を意味しないのである。人間を人間たらしめている「文化」、このような広い意味で考察したい。

文化のもつ領域はきわめて広く、問題とすべきこともいろいろある。ここでは基本的な問題として、文化とは何かを人類の発生の原点にかえて考察し現代社会の文化の特質を個人とのかかわりという観点から明らかにしたい。

### 〈指導のねらい〉

以上の視点から真に人間生活を豊かにするものは何か、また、文化をもつ人間の特性は何かを把握させ、文化創造の意欲と筋道を示唆したい。

- (1) 道具、ことばの使用、社会生活
- (2) 文化の機能と科学・技術の発達
- (3) 文化の継承と日本文化の特徴
- (4) 文化の創造

これらの項目から、生徒の生活経験をゆり動かし、広い視点から自らの問題を考えることができるようにしたい。社会現象や文化現象を見るわたくしたちの眼は、ややもすれば近視眼的であったり、皮相的であったりすることが多い。根本的な問題は何かを把握して、ことに対処できることを指導のねらいとしたい。

### 〈指導内容〉

- (1) 文化をもつ人間 — 道具とことばの使用、社会生活。動物と比較すると

人間のすぐれた特性は明瞭である。この点を人類の誕生にさかのぼって考えると、直立＝足歩行の意義は、きわめて大きいといわれている。手が自由になり、道具の使用が可能となり、脳が発達した。また脳の発達は何道具を進歩させ、ことばの使用に進ませ、社会生活を行わしめた。これらがまた脳の発達を促がすというような相互作用により文化を発達させた。

道具の発達の歴史は人類発展の歴史といわれるように道具により人類は自然に働きかけ生活を豊かにしてきたが、ここでは「ことば」の働きと文化の発達を中心に考察したい。

ことばの機能の一つは経験の蓄積であり、一つはコミュニケーションである。道具の発達も経験の積み重ねにより可能となった。親は子に、子は孫に自分たちの経験をことばでつたえ、そのうえによりよいものが創造されていた。人間と人間をより密接に結びつけたのもことばによるコミュニケーションの機能であろう。未開人はことばにより危険を知らせあい、猛獣とのたたかいでは多くの人間の連けいと道具により勝利をおさめた。人間が「社会的人間」といわれるのもことばの力による。社会生活による生産の分業は能率をいちじるしく高め、生活を飛躍的に高めた。

このように、道具、ことばの使用、社会生活が人間生活に果たす役割はきわめて大きい。未開社会はこのことをはっきりした形で示す。ところが複雑な現代社会の中では見落としがちである。この点をはっきりおさえて現代社会の文化を把握することが、わたくしたちの生活を真に豊かにするのである。

#### (1) 文化の機能と科学・技術の発達

文化をその機能から分類すると、個人に対する機能としては、物質的文化・精神的文化・制度的文化の三つになる。一方、社会的な機能としてみれば人間生活を一定方向へ統制する面があり、制度的文化がこれにあたる。ここでは、特に現代社会における科学・技術の急速な発達が人間生活をどのように変えているかをこれらの三つの面から考察したい。

科学・技術の発達は、特に生活の物質的側面と制度的側面に大きな影響を

及ぼしている。電子工学は想像を絶する機械をつくり出し、人類は月に着陸した。自動車の氾濫、家庭内の耐久消費材の普及は家庭生活を変え、機械の発達と企業の巨大化はビューロクラシーという組織を生みだした。自動車の氾濫とスピードの増加の例にみるように、人間に役立つものが人間を殺す兇器にもなっている。科学・技術の発達をそのまま文化の進歩と受けとってよいだろうか。また、巨大な組織の中の人間は、その一つの部品に過ぎなくなる。組織は組織の目的に沿って一人あるきをする。もはや一人の人間の力ではどうにもならない。人間疎外の現象である。わたくしたちはこの現象をどう把握し、どのように対処していったらよいであろうか。

現代の高校生は無気力・無関心・無責任などといわれる。巨大な社会のしぐみに無力感をもち、マスコミの巨大で一方的な伝達を受けとめるだけで精一杯であり、社会への積極的な姿勢を失ない、孤立化し、利己主義化し分化する傾向がある。わたくしたちは人類文化の原点にもどり、連帯感と自主性の育成に心を用いねばなるまい。

### (3) 文化の継承と日本文化の特徴

ことばは人類の経験を著積し後の世代に継承させる役割を果たしていることは前にみたとおりであるが、地球上の人類はそれぞれの地域で異なる傾向をもつ文化を発達させてきた。その住む地域の自然環境である気候・地形・動植物的な資源には差異があり、住む人間にも種類の違いがあり、それぞれの生活は習慣・慣習・伝統・学問・宗教・思想・美術や政治・経済のしくみなど長い期間にわたり一つの型といえるものをつくりあげてきた。

日本文化の特徴は、なんであろうか。明治・大正・昭和の三代にわたり、みずみずしい文明評論を続けてきた長谷川如是閑氏は次のごとく日本文化の特徴を把握し、これらへの変革の提言をのべている。すなわち、(1) 「日本人の古代よりとりもってきた文化的態度、即ち自由にして、こう泥しない包容性と、それにとまなり多様性を取り戻さなければならない」(2) 「模倣性より創造性への転向が要求される」(3) 「直観性より理性性への転換が要求

されねばならない」(4) 「日本文化一般のもつ享楽文化的性格の改変が要求される」(5) 「芸術性より科学性への改変が要求される」

このようなとらえかたが、よいかどうかは議論のあるところであろうが、わたくしたちは、自分の経験に即して一考すべき見かたであろう。

また、アメリカの文化人類学者であるルース・ベネディクトはその著「菊と刀」のなかで、日本文化を西洋文化の「罪の文化」と対比させて「恥の文化」と表現し、他人のおもわくに価値の基準のおくものとして日本人の行動をとらえている。眞の自己の実現はいかにしたら可能かを考えたい。

(4) 文化の創造。人間の一生をみると文化の継承と創造の生活の連続といふことができる。人間は生まれたばかりの時はまったく無能力である。牛や馬のように歩くこともできなければ、餌をひろうこともできない。しかもこの期間がない。すなわち、本能的にはすぐれていないが学習によって人類の文化遺産を吸収する特性がある。やがてことばをおぼえ、道具を使い、社会生活に入っていく。この過程で、それぞれに個有の能力を伸長させる。継承は学習の過程そのものである。学習があって新しい創造が行なわれる。ここで大切なことは、学習の過程においてたえず今何をやっているのか、どうしてこれをはじめたのか、何のためにやっているのかを問いなおすことである。人間が自分のもつ諸能力が完全に伸長しうる条件こそ文化そのものであり、わたくしたちの目標もこれにあるのではないだろうか。

#### ＜参考文献＞

リントン「文化人類学入門」 創元社

社会学講座「社会学」 一個人と社会、大衆文化—東大出版—

岩波講座「哲学」—文化—

## (6) 家庭生活と人間

都立井草高等学校 中村 佑二

### 〈精選の視点〉

家族は、かつては村落とともに人間生活に必要なすべてのものを所有していた。今日の家族はその機能を縮小したとはいえ、基礎集団としての重要性において少しもかわっていない。人間は家族のなかに生まれ、そのなかで最初の人間関係の経験をやる。人間のパーソナリティ形成における最初の環境は家族であり、われわれのパーソナリティの中核的部分はここで形成される。われわれは子として、夫または妻として、さらに親としての家庭生活においての人間的に成長してゆくのである。

職業人や成長した子どもは、生活の大部分を家族の外ですごす。とくに職業人は生活の根の一つを職場にもっているが、安定した職生活を営むためには、もっとも大きい根を家族のなかにおろさなければならないであろう。機能が縮小しても、現代ほど家族を必要とする時代はないといわれるゆえんもここにあるのである。しかし家族を重視することは、小市民的マイホーム主義や家族への逃避と混同されてはならない。家族は、個人が現代の社会において自己を伸ばしてゆくための根だと考えられるからである。

はじめにこのような立場から、現代家族をもっとも重要な基礎集団としてとらえ、その特質を明らかにする。さらに、現代家族にその遺制を留めている「制度家族」と、現代家族のめざす「友愛家族」の二類型について、それぞれの家族関係をもとに家族のありかたを考え、家庭生活をよりよいものにする努力がいかに大切であるかということを深く認識させたいのである。

### 〈指導のねらい〉

まず、現代家族の機能について客観的に把握させる。そのために、家族の形態上の変遷や機能上の変化について、社会の発展と関連づけて考察する。

とくに、人間形成における家族の役割について認識させることが必要であろう。

家族倫理については、家族内の人間関係のありかたについて考えさせるとともに、家族集団と他の集団との関係、すなわち家族エゴイズムなどの問題についても注意を向けさせる。家族生活の統制や生活意識が、家族主義的価値体系から個人主義的価値体系へ移行したことによって大きくかわっていることを十分に考えさせ、新しい家族のありかたを生徒みずからが見いだす手がかりとさせたい。

### <指導内容>

#### (1) 現代社会と家族

a・核家族化の傾向　現代家族は、夫婦と未婚の子女とからなる夫婦家族をその典型とする。一般的にいえば、産業化がすすみ、人の動きに、より流動性が要求されるような社会に発展する形態である。それゆえ、直系家族や複合家族は近代以前にさかのぼるほど多くなり、とくに直系家族は、小農の圧倒的に多い地域に支配的な形態である。

直系家族が家産の単独相続と結びつく親子中心の世代家族であるのに対し、夫婦家族は、近代社会の自由・平等の原則にもとづく夫婦中心の一代家族である。現代の都市化の傾向、個人の家からの解放などが、社会の近代化とあいまった核家族化をすすめたと考えられる。

b・核家族の機能　現代の家族は、多くの機能を他の社会集団に譲り渡している。今日、これらの機能集団は家族にかわって①経済生産機能②保護機能③教育的機能④宗教的機能⑤娯楽的機能などの多くの部分を受けもち、人びとの要求をみたしている。近代以前の家族にくらべて、現代の家族の機能はいちじるしく縮少しているように見えるが、むしろ、もっと本質的な機能が明らかになり、このゆえに家族が重要視されるのだというべきであろう。

現代家族の本質的機能は、①夫婦関係からくる性的、ないし増殖の機能、②親子関係からくる子の扶養、ないし社会化(ソーシャルイゼーション)の機

能⑧家族員の精神的安定（スタビリゼーション）の機能とする。⑨社会化の機能とは、子どもを社会の一人前の成員に仕上げ、ゆく基本的なはたらきをさし、とくに人間の社会的パーソナリティ形成にとって重要な機能である。さまざまなしつけが含まれていることも注目しなければならない。⑩安定化の機能は家庭のやすらぎである。これは、家族の外で生活するおとなたちのパーソナリティを安定させ、あらたな活力を生みださせるものである。

前近代の家族が、多面的な機能によって各成員を結びつけていたのに対し、現代家族は成員相互の依存感が弱まり、一体感が失われている。各成員が、失われた機能を求めるあまり家族外の生活を主とし、家族を寝る場所か寄合世帯のようにしてしまい傾向は、けっしてめずらしくない。現代の家族には安定化の機能を失わせ、さらに家族関係を害する不安定要素がつねに内存しているのである。この影響が、子どもの社会的パーソナリティ形成機能の上におよぶことに注目すべきであろう。

## (2) 家族の倫理

今日の家族は、封鎖的な一つの世界をつくっているのではない。各成員のそれぞれ異質的な家族外行動が、夫と妻あるいは親と子に異なる生活意識や社会的関心をもたせる結果、家族の機能に対する要求にくいちがいが生じている。このくいちがいや対立は、互いの愛情と協力以外に最終的には解決の道のないものであろうが、家族制度崩壊後の新しい家族関係のなかで、われわれは新しい解決への道を考えてゆかなければならない。

a. 制度家族　中国や日本の家族制度に典型的に示される家長制の家族のばあいには、法律や慣習などの社会的圧力が、成員を家族に結びつけるはたらきをしている。家族制度の支配的な時代には、社会を構成する最終単位が個人ではなく、「家」であったし、個人は家族をはなれては社会生活を送ることができなかったのである。このことは必然的に家長の統制力を大きくし、家長と各成員との関係に支配・服従の関係、上下関係をつくりだす。家族関係における不平等やさまざまな拘束が、むしろ各成員の精神的・物質的安定

を保障するものと考えられていた。したがって、各成員の生きかたは、自分のためである前に家族のためでなければならないし、家族のためという前に「家」のためでなければならないのである。

b・友愛家族　家族が慣習や世間の圧力によって統制されるのでなく、成員相互の愛情と理解によって維持される家族を友愛家族という。家族の機能の大部を家族外に移譲し、各成員の家族外行動が増大している現代家族の結合は、この観点からとらえることができる。家族の倫理は、家族関係の三つの側面、すなわち、夫婦・親子・きょうだいのそれぞれについて考えられねばならない。現代家族のありかたは、これをとりまく社会と同じように、男女の平等や個人の人格尊重を基礎とするものであるが、役割上の差異まで否定しようということではない。家族の機能を果たすための役割分担から家族関係を考えるならば、夫婦は平等であり対等であっても、親子は人格的には平等であるが役割上は決して対等でないことが理解されるであろう。各成員の相互理解がなければ、友愛家族は維持できないのである。

家族倫理の三つの側面はそれぞれ、人間愛の三つの側面を示している。夫婦の無条件の愛、親の慈愛、きょうだいの同胞愛がそれである。家族は、これ自身がすでにまわりの社会の縮図ともいべき小会社であり、この意味であらゆる倫理の源泉といふことができよう。家族倫理はそのまま社会にあてはまるものではないが、家族にしっかりとおろした根は、現代社会に生きるわれわれの社会生活を支える倫理的な力となるにちがいない。

#### 〈参考文献〉

「核家族時代」 松原治郎 日本放送出版協会 ￥340

「家族社会学」 森岡清美編 有斐閣 ￥420

「家庭の人間関係」 兼子宙編 大日本図書 ￥360

## (7) 国家と人間

都立篠宮高等学校 佐々木誠明

### 〈精選の視点〉

人間は国家のなかに生まれ、育ち、死んでいく。アリストテレスもいったように「社会の中に住むことのできない者、または自ら自己に満足するゆえに社会の中に住む必要のない者は、必ずや野獣か、そうでなければ神である。このような者は国家の成員ではない」のである。国家を離れて抽象的・孤立的な自然人の存在する余地はない。しかし、それと同時に忘れてはならないことがある。このような国家は、個人を離れてそれ自体独立しているものではないということである。

ここから、歴史上二つの国家観が対立してきた。一つは、国家の権威と価値を強調する立場である。ここでは、国家を最高の道徳とし、または熱烈な愛の対象として全人格をこれに捧げるべきものと考えた。他は、個人の自由を高揚する立場で、国家は個人の権利と自由を保障すべきもので、国家の存在は国々の人間の自由意志に依存するものとする立場である。

わが国の歴史にかえりみても、明治以来、国権か民権かという論争の形でこの二つの立場はしきりに争われたということができよう。そして、第二次大戦中には前者の考えがたがことのほか強く主張された。しかし、戦後には後者の考えかたが怒濤の如くひろまり、憲法もおおむねこの線に沿って制定された。そこで、この考えかたの背景にある思想として、17世紀以来の社会契約説を徹底的に学ぶ必要があろう。ポプス、ロック、ルソーの考えかたを通して、国家と個人の関係はどうあるべきかという課題を追求することは、こんにちの日本人として必須の重要事である。なお、「期待される人間像」の示す国家観をどう受けとめるべきかも、ここであわせて検討したい。

### 〈指導のねらい〉

- (1) 社会契約説の基礎には、個人を基として社会集団（国家）を考え、国家を個人から導きだす思想が存し、そこには個人尊重の民主主義の精神がみられる。その近代的な社会契約説の先駆者としてホッブスの意義を評価する。
  - (2) ロックの政治論の中心概念すなわち個人の自然的権利、人民の同意による政治、人民の主権、人民の幸福が国家の目的であるという観念などは、イギリスにおいて伝統的になり、また大陸ではルソーなどにより尖鋭化され、17～18世紀の政治的革命的指導原理となったことを把握する。
  - (3) 社会契約説の思想を通して、個人と国家との正しい関係について考える。
- (附) ルソー、期待される人間像については、ここでは省略する。

### 〈指導内容〉

社会契約説における国家観から、人間と国家との関係について深く考える。

#### a, ホッブス

かれの国家論はその人性論の上に築かれている。かれによれば、人間の自然状態は「万人対万人の斗争状態」である。なぜなら、そこでは個人間の関係は競争と名誉心と不信頼とによって規定され、飽くなき自己保存の欲求が相互に争うからである。こうした状態では、人間はたえず暴力死の危険にさらされる。そこで死の恐怖と安穏な生活に必要なものへの願望とが、国家的統一に人間を駆りたてる。

ホッブズは自然権と自然法とを明確に区別して、この二者の関係の上に国家の成立を基礎づける。自然状態では、人間は自己の生命や身体を死や苦痛から全力をもって防衛する権利をもっている。これは自己保存の要求にもとづく権利であり、生存の権利である。これを自然権とよぶ。

ところで、各人が自然権に従って行為する結果は、万人対万人の戦争という悲惨な状態を現出する。これでは自己保存の要求が暴力死によってかえって否定されることになる。これは自己矛盾にほかならない。この自己矛盾を救うものが自然理性であり、その命法が自然法なのである。こうして自然法

は自然権から導きだされてくる。

自然理性は自然人に①「平和を求めよ」と命じる。②そのためには「自然権を放棄すべし」と命じる。③ついで「結ばれた契約を守るべし」という第3の自然法が成立する。すべての者に自然権を放棄するという契約を履行させるためには、現実にはそれを強制し得る共同権力が必要である。それはある特定の一人または人の集まりに各人がその自然権を譲渡することによって成立する。これが社会契約であり、ここに国家が成立し、この権力が主権である。

契約によって成立した国家権力は絶対であり、人民はそれに対して絶対的服従の義務を負う。かれは国家を地上における最も強大なものとして、リヴァイアサンにたとえた。こうして、ホッブズは一般に専制国家論の代弁者とみなされるのがふつうであるが、しかしかれが国家権力の絶対性を唱えても国家は所詮、自己保存の道徳的要求を実現するための手段以上の意義をもち得るものではない。したがって主体性はあくまで個人の側になっており、リヴァイアサンといえども奪うことのできない若干の絶対的自由が個人に保留されている。

#### b. ロック

ロックは国家成立以前の自然状態をつぎのようにみる。すなわち、そこでは人間の自己保存の欲求が根本であるが、それはホッブズの考えたような単なる斗争ではなく、人間の理性に基いた秩序つまり自然法が支配していると考える。そこでは各人は全く平等で、自己の欲することをまず自由をもつ。しかし、その自由は人類の社会的共存を不可能ならしめる無制限なものではない。自然法による拘束に服さねばならない。自然法による平等の上に人間の自然権が与えられている（生命・自由・財産の三自然権）。自然状態においては各人が自分でそれを守る。しかし、やがて人間の智力の相違と判断の違いから紛争が起り、不安定と混乱が免れがたい。それを防ぐために国家がつくられる。それは契約にもとづく。

この契約の目的は個人の権利の保護・維持である。自ら法の執行者である権利を捨てて共同体全体に譲渡する。この契約説の特徴は、個人がかれのすべての権利を譲渡するのではなく、単に自然の法の執行の権利を譲渡するのであること、及びその相手は特定の人、数人の人ではなく Community as a whole であることである。ゆえに国家の権限は譲渡しがたい個人の権利により制限される。人民の服従する当の相手は社会そのもの、具体的にはその総意である。

ロックの思想では、国家の目的は自然法を適正に解釈し、適用することによって、個人の自然の権利を守ることにある。この自然法の適正な解釈とそれを保持するための諸法規の制定の機能をひきうけるのが立法機関である。そしてそれによって制定された法律を行なうのが行政機関である。立法機関は共同体の総意をはっきり表現する役目をになりものだから最高権威をもっている。これはイギリス議会の正当化を意味する。また行政機関は人民の委嘱に基づいてその任務を執行すべきものであるから、その行動・施策が人民の委嘱に反する場合は、こうした政府を廃棄し、変革したりする人民の至上権が発動すべきである。ここにロックは革命の権利を認めている。至上の力は人民に存するという点は、ロックでは確立している。

ロックが国家の目的と考えるものは、さらにいえば、要するに個人として人民各々の幸福の保護である。しかも多数の人民の幸福を考えているから、その国家観の根底にある倫理思想は、結局はベンサム功利主義の考えに帰着する。ゆえに、その先駆者としてみることもできる。

#### <参考文献>

- リヴァイアサン ホブズ 岩波文庫上下 ￥400  
統治論 ロック 世界の名著 中央公論社 ￥480

## (8) 世界観・人生観の序章

育英工業高等専門学校 ガエタノ・コンブリ

共同研究 都立駒場高等学校 鮎沢真澄

都立府中高等学校 沼田俊一

### 〈精選の視点〉

われわれが倫社において教材の精選を問題にする時、数多くの先哲のうち誰と誰々にしぼって指導するのがより好ましいか、次にその先哲のどんな思想に焦点をあてて説明するのがよいかと考えるのが通例であった。それも確かに意味があるが、そうした観点からの精選は、やはり思想史の立場を捨てざることはできず、ともすれば網羅的内容に終わってしまう恐れがある。生徒が思想そのものに直接触れ、その思想を使って考え、かつ「考える」という実践を通して、その思想の長所と短所を知ることができるなら、何とすばらしいことであろう。

ここではある思想家の思想内容を追体験するのも意味があると思うが、そうではなく、思想そのものを問題にするべく、まず10の類型に分けることにし、その配列も、無自覚な考え方から、自覚的思索へ、浅いものから深いものへ自然に生徒の考え方が深まるように記述した。その真意は思想家達の思想史の位階づけを知ることよりも、思想そのものを生徒が己れのものとするところを望ましいことと考えるからである。

次に、心理学的社会的分野から人生観世界観へ進む時、いわゆる木に竹をついだような違和感を与えるということがよくいわれる。それを取り除くためには、心理学的あるいは社会的な Sein のあらゆる疑問を浮き彫りにし、その切実な問いに答えるものとして、人生観世界観が開示されねばならないと考える。そのことはとりもなおさず、科学的思考より出発しながら同時に科学的合理主義が、根本における悪魔的非合理主義と容易に手を結び最良の善意が結果においてその正反対のものに転化してしまうという危険性を

察知し、実証科学以外のあらゆる合理性に眼を向けることを奨励しなければならない。そして人間はその目的と意義について知りうるものとして存在しているという自覚から、世界のあらゆる存在について正当な理解が深められなければならない。このような観点から世界観の導入は「存在論的考察」にしぼることにした。存在論の内容は、いりまでもなくアリストテレスが、  
on he onの探究と第一哲学と呼んだ形而上学と同じく、西洋哲学史全体を流れているものであり、形は違うが、インド・中国などの東洋思想でも絶えず問い続けられてきた問題である。存在をいかに見、いかに考えるかに答えることなしに、世界観の基礎はありえない。また世界観はやがてその上に、人生観を構築する土台となるであろう。

1.0の類型に分けた各思想は公平に取り扱い、その選択はもちろん生徒にまかせるべきである。しかし、各思想の特徴は明確にしなければならない。

#### 〈指導のねらい〉

1. 世界観の問題は、結局存在の問題であることをわからせる。
2. 科学と哲学の相違を明らかにし、1.0の世界観の類型を理解させる。
3. 世界観に根ざす人間観を典型的に理解させる。
4. 宗教について世界観との関係を考えさせる。

#### 〈指導内容〉

### (9) 宇宙における人間の地位 —存在の問題—

1. 存在の流れ 自分のおかれている今の時点からみると、自分の意識作用と無関係に存在の現象が流れつつあることに気づく。この自分も自分が属する社会集団も、自然界も、全宇宙も、存在の流れの中の一つの現象にすぎない。今の時点を現在といい、それは次々に過去の世界に押し流されていく。そして未来に向ってこの存在の流れは変化しつつ、いつも新しい形に姿容し続ける。その中であって、個人も、社会も、文化も、いやでも応でも呑み込まれていくのである。過去に対して私たちはもう何もすることができない。

また未来はある程度までしか予測できず、また支配するところもわずかである。

2. 存在の流れの中の人間 人間はいつか自分が存在の流れの中におかれていることに気づく。自分が何ら賛成することなしに、前もって何も知らされずに、自分が選んだでもないのに、一定の社会・環境の条件の下に、一定の時間と空間の中におかれ、実存し、ここに生きていかなければならないことに気づく。このことを考えても考えなくてもこの事実は変わらない。変わるのはいくらした存在に対する態度だけである。この存在を拒むこともできるが、今まで存在したことを白紙に返すことはできない。あるいは積極的にこの存在の意味を考えて、意識的にそれと対決して生きていくこともできる。いずれにせよ、存在に対して一つの立場をとらなくてはならない。ここでは世界における自分の位置づけやそこから生ずる問題を意識的に探究していると思う。

3. 人間は些細なものである この悠久の時間の流れをもつ宇宙の中にあって、人間の一生に費やす時間はまことに微少なものである。また空間的にも宇宙の空間の広がりと思えば人間の存在は塵の一粒にも及ばない。反面顕微鏡でも見られない微少世界も存在している。宇宙と原子、最大と最小、この世界の中で運動と変化が絶えず行われて現象となり、またそれは消え去って次の現象を惹き起す。この中にあって人間は一体ねうちがあるのだろうかと思ふに不思議に思えてくる。

4. 人間は宇宙の中で一番偉大なものである。 すべてのものは、宇宙自体も自己の存在意識を全く持たずに存在しているし活動しているのに対して人間だけが宇宙の存在と自己の存在を意識しているのである。「人間は一本の考える葦である」もし、人間が存在しないなら、宇宙の運動と進化とは盲目的で無意味なものとなるだろう。広い宇宙の中で知恵があるのは人間だけだと断定はできないが、身近な経験ではこの存在意識のゆえに、人間はある意味でもっとも偉大なものといえるのである。

5. 自分の存在は有限で不安である。時が経てば、自分の終りも近づき、過ぎ去ったことは決して戻らない。生の危険は一瞬毎にあって、人間はその不安を意識しておののく。現代はしかし多忙で、自分で生活の意義を考えるとなしに日々を送る人が多い。現代は人間をものにしてしまう危険がある。

6. 世界観の問題 無限で無意識の中において、人間だけが存在の意識もち自由に行うことができる人間の一時的な存在、その労苦の悩み・喜び・責任・罪には一体何の意義があるのだろうか。もし意義がないなら、人間は一番不幸で矛盾した存在といえよう。

これらは人間についてだけの問題ではなく、宇宙全体にかかわる問題である。結局、人間を含むこの宇宙はなぜあるのか。目的があるのか、ないのか。その存在をどう説明するのか。盲目の結果であるのか。何かのあるいは誰かの計画の結果であるのか。宇宙と人間はどこからきて、どこへ向って進んでいるのか。もし存在に意義がないとしたら、意義のない存在のためにこんなに苦勞する値打ち一体あるのだろうか。

この考察を進めるために実存主義からヒントをえることができる。とくにキルケゴールの「単独者としての人間」ハイデガーの「ここに在る」ということ、ヤスパーズの「限界状況」、マルセルの「人間の有限性」などから存在の問題を考えることができよう。

## (10) 世界・この妙なる存在 —世界観の展望—

### 1. 世界観の前提—科学的な説明と哲学的な説明の次元の相違—

この世界の中で私たちは二つの種類の問題に出会う。一つはいわゆる科学的な問題、他は前章でみた存在に関する哲学的な問題（世界観）である。この二つの問題は、違った分野、違った性質、違った次元の問題であるので、別々に取り扱うべきである。だが、しばしばその区別が明確に把握されていないために、二つは混同され、不適當な答が与えられることがある。両者と

も合理的な説明を必要とするが、科学の合理性と哲学の合理性とは違ったものであることをはっきりさせるべきである。その違いを以下に示そう。

### <科学>

問題：世界はどうあるか

どういう構造を含んでいるか、どう動くか、進化、変化するか。どんな法則に基づいて動くか。

#### 答の特徴

現象を分析し、現象の前後のつながりと成立、関係を示さなければならぬ。普通これを法則であらわす。

#### 合理性の意味

現象の実証に基づいてはじめて合理的といえる。これは実験科学の範囲内における合理性である。

#### 関係学問

あらゆる科学 自然科学  
社会科学  
(歴史学・経済学  
心理学・etc)

### <哲学>

問題：科学が示す世界はなぜあるか

「在る」とは何の意味か(存在とは何か。)存在の本源は何か。存在の目的は何か。(意味があるのか)

科学の答を前提として、その存在自体とその意味を説明しなければならない。価値判断を下す必要がある。

合理的な答であるためには科学的現象を否定しないが、その他に「納得できるような理由」を与えなければならない。実験科学の方法は適用できない。

哲学・存在論・世界観・人生観・人間観  
社会観・倫理学・宗教・認識論・歴史観

## 2. 世界観の類型

以上のようにはっきりと区別した上で、それに対して、どんな解答があるかを調べることができる。この世界観の問題は、古来哲学上の中心問題であった。すべての時代、すべての人のために、いつもくり返されてきた。一人一人はこれに何とかして答えなければならず、他の人が代りに答えるこ

とはできない。各人は自分の答えに責任をもたなくてはならない。(社会観・認識論・道徳の問題や思想家を第一、第二領域(P 参照)で扱うことにしたので、純粋な存在に関する世界観や人生観に限れば、東洋・西洋を問わず、およそ10位の類型にまとめることができると思う。しかし、以下に掲げる世界観の前提と内容に対して、どちらがより科学的であるかと尋ねるのは無意味である。いずれも科学的でないといえる。またどちらを認めても科学には変りがない。科学の分野以外の問題であるから、どちらが合理的であるかを問題にすべきである。

世界の存在と本源とその意味に対して、以下のような10の世界観がありうる。

### ① 不可知論

前提 — 人間は存在の問題と意味の問題に答えられない

要点 — 人間の知識は科学の範囲に限定され、観察と実験と実証だけに基づく。価値判断には客観的な根拠がなく、宇宙の根源や目的のような問題はいくら考えても確実な答を得ることができない。これまでも長い世紀に互って人々はこれを考えてきたが、結局さまざまな異った答を出したにすぎない。人間は永遠にどうして生きているか、また、何のために生きているかを知ることはできない。

### ② プラグマチズム

前提 — 不可知論と同じ。加えて真理は実用である。

要点 — 人間存在にとって大切なことは生きることであり、思想もそれに役立つためにある。ある思想が生活するのに役立つならそれに従えばよいがそれは真理だから従うのではない。その場その時に確める以外に実用的かどうかを知る方法はない。従って永遠に正しい思想はありえない。理想のために死ぬことなどできないのである。

### ③ 自然発生論

前提 — 無から世界ができた

無 → 有

要点 — 世界は太古のいつのころか自然に発生した。あるいは無から発生したのである。偶然に発生し、何の目的も計画もなく、偶然の繰返しによって現在に至っている。すべての法則及び人間の偶然であって目的はない。

◇ 有 → 有(世界) という考えが、これに対してありうる。

前提 — 無から何かが生れるはずはない。すべての存在には十分なわけがある。永遠の有があるから現在の世界がある。

要点 — 現在いろいろなものがあるのは、永遠から存在しているもの、それ自体存在するものがあると考え方である。永遠のものを認めなければ、いつまでも問題を繰返すだけであって、合理的な答はありえない。しかし、この永遠のものは何であるのかという質問にどう答えるかによって以下のような違った世界観と人間観が生れてくる。哲学的な思想のほとんどはこれを中心的な問題とする。

#### ④ 機械論的唯物論

前提 — 物質は永遠である。無秩序から偶然を重ねて世界の秩序が生れた。

要点 — 永遠の存在は原子エネルギーである。物質それ自体は絶対的な存在である。現代の世界にみられる秩序と法則性は原子の偶然の組合せによってでき上ったものである。人間の知恵も原子の組合せの結果であり、原子エネルギーの変化したものである。精神それ自体は本来的存在ではなく、人間を含めてすべての現象に目的はない。

#### ⑤ 弁証法的唯物論

前提 — 物質は永遠であるの世界は意識のない必然性によって支配されそれに基づいて展開する。

要点 — 永遠の物質の中に発展の方向(法)が含まれている。それに必然的に従うことによつて、物質は自己発展をとげていく。精神が物質の前にあるのではなく、物質が精神の先にある。物質が精神を生み出し、支配(規定)するのである。人間の存在と意識も、物質の一つの発展段階にすぎない。

一切の目的は世界の発展をもたらすことである。

### ⑥ 現象論

前提 — 存在は現象にすぎない。変化のもとに永続する実体はない。

要点 — 私たちがみているこの世界は、たえず変化する現象である。すべての現象は相互依存の関係にある。変化の主体として、過去現在未来に存在し続ける何かを考える必要はない。世界の本源としての別の永遠の存在（神）を考える必要もない。変化しつつ流れていくこの瞬間の現象自体が永遠に続くものである。現象があるだけであって、なぜあるかときく必要もない。これを悟って生活すればよいのである。

### ⑦ 観念論

前提 — 世界の中にみられる計画性（秩序）合理性は知恵による。存在それ自体は一つの精神である。

要点 — 永遠の存在は一つの精神のみである。すべてのものはこの絶対精神の一時的なあらわれにすぎない。その内的な法（弁証法）によって、ものは無意識の段階から、いろいろな意識の段階にまで発展する。人間の意識も、社会生活も、その一段階なのである。一切の歴史は、その合理的な筋道に従っており、全体からみれば、すべてについて意味があることになる。

### ⑧ 汎神論

前提 — 世界の中にみられる計画性（秩序）合理性は、知恵による。永遠の存在と世界は同一である。世界は知恵を含んでいる。

要点 — 永遠の存在は知恵のあるもので、世界の存在の中に含まれているものである。それはすべての生みの母であり、魂のようにすべてのものに内在する。もののいひちであり、その本質である。すべては必然的にそれによるのであり、その一時的な変化にすぎない。すべては互いに本質的に関連している。人間の目的はこのことを悟ることであって、自分に内在する本性を現わして、自分の存在の法に従うことにある。

## ⑨ 二元論

前提 — 世界にみられる計画性（知恵）合理性は知恵による。この知恵と物質は別々の存在であって両方とも永遠にある。

要点 — 永遠から二つの存在がある。それは宇宙（物質）とその活動と秩序のもとである完全で無限の知恵（理・神）とである。この二つは存在上無関係であるが、世界に実現される計画と合理性は何かの意味でこの知恵の理法による。こうして世界には目的と意味があることになる。

神と世界の関係は思想家によっていろいろな形で説明されている。

## ⑩ 創造論

前提 — 世界にみられる計画性（知恵）合理性は知恵による。知恵のあるものは人格的である。永遠の存在は宇宙と違うもので宇宙の存在の源でもある。

要点 — 宇宙はみずから存在するものではなく、存在上でも完全に神による（創造）。神だけは永遠からそれ自体存在するもので全能で完全に宇宙から区別される超越者である。神は知恵、自己意識、自由があり愛そのものである。何かであるのではなく誰か（人格的なもの）であるとされる。すべてのものは神の知恵と愛の現われであって意味と目的がある。それらは存在している物の中に含まれていて、自然法をあらわしている。

以上の10類型をまとめて表示すると次のようになる。

世界観	存在の本源	世界と人間の意味・目的	思想家
①不可知論	科学的分野以外の問題 即ち存在の本源と目的 を知ることができない	意味を知ることができ ない。	ソフィスト スペンサー ニヒリズム

②プラグマチズム	前と同じ。 真理は実用であるから自分に役立つ世界観に従えよ。	もともと意味があるとしても知りえない。自分から存在の意味を創ることこそ大切である	ジェームズ デューイ
③無→有 (世界)	一切の存在は理由もなく無から自然に生じた	世界の中に一切の意味はない。	ニヒリズム
有→有 (世界)	世界存在の本源に永遠のもの、それ自体存在するものがある。	前提によって以下のよう違う。	
④機械論的唯物論	永遠の存在は物質エネルギーである。その働かしは偶然にもとづく	一切は偶然であるからもともと意味がない。	デモクリトス ホッブス
⑤弁証法的唯物論	永遠の存在は物質エネルギーである。その働かしは内在している法に基づき、必然的である。	世界自体の発展に寄与する。その目的は必然的にもたらされる。	マルクス レーニン 毛沢東
⑥現象論	今の時点の現象の流れ以外に何も存在しない。存在は現象である。実体はない。	現象の成り行きを悟ってそれに従うこと。目的があるかどうかを気にしないこと。	ヘラクレイトス フッサール 仏教の空の思想
⑦観念論	永遠の存在は物質ではなく精神である。内在する法に基づいて必然的に合理的に自己展開を遂げる。	目的は絶対精神の自己展開であり、一切は意味がある。	ヘーゲル 仏教の唯識論

⑧汎神論	世界は唯一つの偉大な永遠の存在である。物質と精神の結合体である。一切は存在のあらわれである。	目的は、自己の本源である永遠の存在をあらわすことである。	ストア スピノザ バラモン教 汎仏論
⑨二元論	物質も精神(神)も永遠である。世界の中の合理性、秩序は神による。	目的は世界とすべてのものの合理的な発展にある。世界は意味がある。	プラトン アリストテレス 理気二元論
⑩創造論	神は永遠でそれ自体存在するものである。世界は存在上も神による	一切は神の現われであり、目的がある。自己の自然に含まれている法に従って神の計画を実現する。	キリスト教 回教 西洋哲学者の多数

## (11) 人間・この未知なるもの —人間観の展望—

### 1. 世界観と人間観の関係

人間とは何かを問う時、世界観についてどう考えているかを前提にしなければならぬのは当然である。世界の中にあり、時間的にも空間的にもその一部である人間を世界から切り離して考察するのは不可能である。人間についての存在論的考察は世界についての存在論的考察と同じ次元で考えられなければならない。人間をどう見るかの答は、世界をどうみるかということに基礎づけられている。人間観と世界観は連がっているのである。

2. 人間の特性 では無意識的な宇宙存在内にあって、人間はどのような特性が見出されるであろうか。

○身体性 — 人間は他のものと同じように物質的な存在である。しかし他のものに見られない行動をもつ原因として、次の点をあげることができる。

○知恵 — すなわち、因果関係がわかるだけでなく、存在を意識し、物の意味がわかる能力

○心 — すなわち、感覚を越える善美への憧れ、善悪を判断し、それに向かう傾向性、また実践をし、責任を感じる能力

○自由意志 — すなわち、自己自身の行為を支配する能力

これらによって、人間は自己の存在を意識し、その意義を自ら問い、自分の行動を支配し、自分自身の持ち主となることができる。動物には生きる本能があるが、それは意識的なものではない。それはほぼ人間の赤子の時と同じ状態であろう。それゆえ動物はあたかも物と同じように扱われる。だから動物をもつとして扱っても、かれらの権利を侵したなどとは言われないが、人間には特別な尊厳があると考えられているから、人間を物や動物と同じように扱うことは許されないのである。動物と区別されるその根本原因を「人格の尊厳」というが、その根拠は何にあるのか。人間とはいかなる存在であるか。物質だけで人間の行動を説明できるのか。この問に答えるのが人間観である。

### 3. 人間観の展望 — 人間存在の構造 —

以上の問題に対して歴史上三つの主な考え方があり、これは前述の世界観に根ざし、その当然の帰結として導き出される。

#### ① 唯物論的な人間観

前提 — 物質から知恵が生じる

要点 — 人間はただの物質である。人間の精神的な働らきも、物質が高度の発展段階にまで発達した物質である。人間の精神的な働らきも、物質が高度に変化して人間の頭脳にまで発展した時、自然に発生したものである。死によって体の組織が分解すれば、人間存在は当然終りを告げ、あとにはその人の行為の結果だけが残る。死後の靈魂は存在しない。結局、人間は最高

の動物、悪くいえば一つの「消化機関」(フオイエルバッハ)または精巧なコンピューターである。人間の目的は、この世界(文化)を発展し、人間の欲望を充足させること以外には考えられない。

#### ⑤ 汎神論的な人間観

前提 — 物質界は精神を含んでいる。人間と物質に本質的な差別は認められない。

要点 — 物質・動物・人間の間には共通したいのち、精霊、すなわち唯一同一の本性が含まれている。従って動物と人間の間には本質的な違いはない。動物にも人間と同じような知恵や霊があることを認める。人間の中に精神的な霊を認める立場で、よく輪廻を説く。

#### ⑥ 二元論的な人間観

前提 — 物質と精神の間に本質的な違いがある。物質は考えられない

要点 — 人間だけに特有な精神的な働きとして、知恵・心・自由意志などがある。これらの働きは、人間の中に他の生物にないようなある要素の存在を要求する。それを靈魂という。動物のいのちと人間のいのちは同一ではない。死によって動物のいのちは終るが、人間のいのちは身体は滅んでも靈魂はなお存在すると説く。靈魂の存在理由は、自己を意識するということが純粋な精神的行為であるということや、自由があらゆる物質的な条件に束縛されていない事実をあげることができる。精神(靈魂)の存在を認めなければどうしても自由を否定しなければならない。また人間の責任も否定することになる。

#### 4. 進化の問題

すべての動物が、同一の種から進化発展したという進化論は19世紀の科学万能の波に乗って世界中に広まり、その結果、従来からあったすべての人間観は、進化論の俎上にのせられて吟味されることになった。まず唯物論的な人間観は、両手をあげてこの進化論を受け入れた。物質から生物が発生しそれが進化して人間にまで発展するという考えは唯物論と矛盾しなかったか

らである。汎神論的な人間観でも、進化論はそれほど抵抗なく受容された。たとえば輪廻の思想と弁証法を組み合わせれば、進化論的に矛盾しない世界観や人間観を導き出すことができよう。しかし、二元論の立場では進化の問題を人間の場合に当てはめるのに大きな問題に突き当たった。すなわち、二元論の立場では、普通の生物から人間への進化の説明は受け入れられるわけにはいかないからである。もちろん、二元論においても進化論の生物の変化は認めなければならない。しかし、それはあくまで科学の説明する範囲内であって、ここでも存在の問題は昔も今も変わらないと主張する。進化するものがなぜはじめにあったのかという問題は依然として残るのであり、進化論とは異なるより深い次元の問題として明らかにされなければならないというのである。この問題は科学の進歩とは無関係にいつまでも存在する。また創造論では、進化は神の創造的な働らきと考えられ、進化の概念は創造の概念と矛盾するものではないと説明されている。

## (12) 宗教と人間

1. 宗教の現象 人間は宗教的な動物であるといわれるほど、あらゆる時代と民族に宗教の現象がみられる。宗教はすべての文化の代表的な表現にあらわれている。すなわち、建築・彫刻・絵画・音楽・文学・風俗・社会行事、あらゆる分野に宗教はインスピレーションを与えている。時には、宗教は争い、迫害、差別の原因と的になったこともある。

実は、一言で宗教といっても、その内容、表現、団体は多種多様であって同列に取り扱って評価するのは不可能である。呪術的な性格が強く、儀式や祈禱に不思議な効果を期待する宗教があれば、他方にそれを一切迷信扱いにする宗教もある。密教的な宗教もあれば、社会生活に密着する宗教もある。はっきりした教え（教義）を持たずに儀式と祭りだけに専念する宗教もあれば、教えを重んじ高度の理論に基づく宗教もある。

2. 宗教の起源 宗教の起源について、自然現象に対する恐怖と科学的法則

の無知から生れたといわれることがある。また、死に対する不安や病氣、不幸、罪惡感などのさまざまな人間の悩みが、宗教の根拠であるといわれることもある。

しかし、反面、科学万能の現代でも、科学者と知識階級の中で、信仰をもつ人が多いのも事実である。また、経済的に恵まれている国でも、先進国でも、宗教がさかんであることは事実である。この事実は、人間に科学と経済的な豊かさだけでは答えられない要求があることを示している。迷信的な態度や、ただの家庭の伝統の中に引継がれている信仰が消えつつあるのは事実であるが、たとえば欧米の現象をみると、その代りに、前の時代よりも自覚のある信仰がみられるようになったのも事実である。

民族学が示すように文化の進歩と宗教的な概念の進歩は、必ずしも比例しない。たとえば、原始民族の研究によると、原始民族の間にも唯神論的な考え方がありうるし、しかも神の精神性について非常に純粋な考え方がみられるのである。多神論や魔術的な概念は、かえって、もっと進んだ文明をもつ地域で後になって出てきたものであることがわかる。文化の進歩とともに宗教は形式化され、一定の人々(階級)に御利益をもたらすものとして利用され、あるいは体制を維持する勢力に利用され、迷信的な要素を含む傾向がみられるような場合が多かった。

### 3. 宗教と世界観

どんな宗教を調べてみても、その根底に一つの世界観があることがわかる。人間は、その文化がいかに原始的であっても、存在の本源と意味について、一つの答を求めている。人間は生れながらの哲学者である。宗教の本源は、人間の、この存在の意味を求めるこの傾向にあり、そこを出発点として宗教がはじまるといえよう。すなわち、宗教とは、存在の本源と思われるものに対する人間の尊敬の態度である。その本質にあるものを人格的な神と考えても、あるいは汎神論のように世界それ自体、世界の法などと考えても、人間の存在は、それに対して何かの結びつきを認め、そこに何か存在の意味を見

出そうとする。そこに宗教的体験の根源がある。唯物論でさえ、この意味では宗教であるといえる。ここでは神を永遠の物質におきかえただけである。

宗教の問題は、結局世界観人生観に根ざすものであり、人間にとって避けられない問題である。ただ、この問題への答をいつも理論的な概念であらわすことができるとはかぎらない。普通の人とは、理論よりも具体的で象徴的な表現を好む。神話・祭・儀式などは、このような世界観の表現である。また高度の宗教には理論的な表現が見られる。それは信仰の合理化に役立つまじった内容を是正するために役立つが、信仰における暖かさと卒直さを失わせる危険を含んでいる。信仰とは冷たい理論よりも一つの生きた体験である。それはよく悟りと言われている。

#### 4. 宗教への関心

現代人は文化の技術面、実用面、うわべの便宜さにとらわれて、存在の問題に無関心になりがちである。いつも合理的で根拠のある世界観をもっているとはいえない。時にはまったく世界観を持たずに生きる人もいる。意味を持って生きるよりも、ただ生きているだけである。結局、高水準の科学的知識と非合理的な世界観、あるいは世界観への無関心が共存することがありうる。それは違った次元のものだからである。文化を高度に進歩発展させることによって、かえって人間は疎外され、人生の問題への関心が薄れる結果になることもありうるのである。

信仰の決定は各人の人生に重大な結果をもたらすものである。普通この決定は自己の人格が根底からゆさぶられ、その存在の意味の再編成を強いられこれに深い悩みが伴う。そして人間革命ともいふべき一大転換期を起し生れ変わる。

多くの人々がはじめて信仰の問題に関心を示すのは、不幸に出会った時、あるいは年をとった時である。多分、存在の問題を真剣に考えるには、何か刺戟がしばしば必要なためであろう。ともかく、さまざまな偏見がなく、考える時間が与えられ、環境がさまざまげにならなければ、人は誰でも、いつか、

宗教の問題にぶつかる可能性をもっていると思われる。この悟りを得るために、時には長い年月のかかることもある。

信仰する人は一つの宗教団体に属するのが普通であるが、宗教団体以外にも、純粋な宗教体験がめられる。憲法には各個人が自分の信仰を持ち、それに従う自由を基本的人権として認めているが、結局これは自分の世界観に従って生活する権利が与えられていることに他ならないのである。

## 5. さまざまな宗教観

### ① 不可知論

無関心である人と違って、宗教の問題に納得ができるような答の可能性それ自体を否定する考え方である。神とか、存在の本源とか、人生の意味とか、来世とか、また、道徳と価値の世界、これらの問題を解決する能力は人間にはないとする。ゆえに、宗教の問題は感情の問題であろうが、客観的な根拠は認められない。

### ② 無神論

神の内在を否定する考え方である。神の存在について無関心な人々（実践上の無神論者）はすべての時代にいたであろうが、理論的な無神論は、現代まで稀であった。すべての時代に唯物論者はつねに存在した。

マルキシズムの宗教批判は、その中でもよく知られているものである。この世で自分の欲求を満すことができず、経済的に搾取され、疎外されている貧乏人は、この世に得られない幸福を神が来世に与えてくれると想像した。金持と資本家はこの考え方を利用し、貧乏人が自分の状態を我慢するようにしむける。宗教は資本家階級保護のための手段であり、経済的搾取の手段である。結局「宗教は抑圧されている民衆の希望をあらわす。宗教は国民の阿片である。国民の真の幸福のために、にせの幸福である宗教をなくさなければならない。」（マルクス）「原始人が自然とたたかいながら、自分の弱さを感じて、神々、悪魔、奇蹟を信じてしまうように、搾取されている階級も自分の弱さから、必然的に来世の幸福な生活を信じるようになる」（レーニ

ン)

同様にニーチェの宗教批判も知られている。人間が生れたのは、成長し、支配し、超人になるためである。強者は対立や戦いや勝利を愛し、孤立を恐れない。かえって弱者、奴隷は何でも恐れている。戦いを、死を、命を、自由を。彼らはこの自分の弱さを補うために、権利と道徳律、神の賞罰と来世の幸福を考え出した。これは現世からの逃避である。人間は自由に自分の能力を伸ばすために、道徳律の拘束と神の恐れを捨てなければならない。人間を救うために神の死を宣告しなければならない。「超人よ、神は汝にとって最高の危険である。神が墓におかれる瞬間から、汝はよみがえる。神は死んだ。今度は超人が生きてるのである。」(ニーチェ)

サルトルは他の観点から無神論を唱える。人間存在それ自体には何の意味もない。存在は嘔吐をもよほす矛盾であり、存在の意味は各人が作っていくものである。各人は自分の存在に意味を与える責任を持っており、そこに人間の創造的な自由がある。この自由を恐れてはいけないのであるが、多くの人々はこれを恐れ、いろいろな方法で逃避の道を探している。社会の習慣、人のまね、インスタントもの、規則などは、その一つの逃避の方法である。もう一つの方法は神に逃避することである。神が人間を創造したとしたら、も早自分を創造することはできなくなる。人間の道はもう決っていて、神に従う他はない。自由がなくなり、自分の望むままに自分を創ることができない。結局、自由になるためには神を否定しなければならないのである。

カミュは世の中の悪の問題に矛盾を感じて、神が信じられないという。善人が不幸に陥り、愛する子供が死に、全人類も死に終わってしまう。このことから、この世界は全知の神、愛の神によるものだととはとても信じられないという。世界はあまりにも矛盾したものである。

### ③ 呪術的な宗教

一定の儀式、ことば、道具によって自然を支配することができると思う考え方である。病気をなおしたり、事故防止できたり、よい結果をもたらす

ことができる。時には、このような能力は特定の人に限られており、また秘伝の教典に基づくことが多い。

未開社会によくみられるものであるが、現代でも、お守り、おみくじ、おはらい、お経などがこの目的に使われることもある。とくに一定の世界観を持たない人に、こうした考え方がよくみられる。

#### ④ 多神論

世界の中にいろいろの役割をもつ神々があるとする考え方である。擬人化された自然の力である場合があるが、神格化された有名人である場合もある。時には、いろいろな階級の神々に分けられ、それぞれ効力が違うとされる。

ギリシャ神話や日本神話にみられる考え方であり、現代の日本の宗教のいくつかも、この考え方に基づく。

#### ⑤ 祖先崇敬

人間の魂（霊）が不死であるという考え方に基づくものである。時には動物にも他のものにもこのような霊があると考え（人形供養など）。祖先を神とし、祖先の霊に感謝をあらわすこと、あるいは、かれらの冥福を祈って慰めることが、宗教の目的であるとされる。民族の英雄をとくに尊敬することもある。存在の本源と意味に対してあまり関心を示さない場合もある。

神道はこのような思想に基づく宗教である。

#### ⑥ 汎神論

信仰の対象を神というが、神はすべてに内在するものであって、すべてのもののいづれであり、本質である。神と物の間に区別がない。物の目的は本物の自分すなわち神になることである。宗教は神々と自分の存在の同一を悟らせる道である。宗教の対象は世界と別に存在するものではなく、世界の存在それ自体である。この存在は理性的なものと考えられ、慈悲深いものとされる場合があるが、しばしば人格的なものとされない。人間は死によっていづれのものであるこの存在の統一（一致）に戻る。この考え方でよく輪廻

が説かれる。

仏教ではこの存在の本源を仏という。これはすべてのもつの中に仏性としてあり、人間の理想は仏になることである。死んだ人の魂も仏という。神ということばは仏教的なことばではないから汎仏論ともいえよう。

昔のパラモン教、現代のヒンズー教も汎神論である。

#### ⑦ 唯神論

他の考え方と違って、神を唯一の絶対的な存在だと考えている思想である。世界を超越し、それを支配する者で、全知全能で、はじめも終りもない永遠の者とされている。

とくにキリスト教では神の正義とともに、神の愛を強調する。その意味でキリストは神を天の父と呼ぶ。また、いろいろな方法で、哲学的に神の存在と性質を明らかにしようとし、神と世界の関係を説明しようとする。神が三位一体であるという教義も有名である。

キリスト教以外で唯一の全能の神を認める宗教にユダヤ教、回教がある。

#### ⑧ 神の概念

以上示したように神ということばは、世界観によって、まったく違った意味で使われていることがわかる。もともと日本語の神は、神道のことばであるが、現代の日本の哲学用語としては、キリスト教の意味で使われることが多い。これは明治以来の西洋哲学の影響である。一般に、このことばを使う場合、神道か仏教かキリスト教か、どの意味で使われているかを明らかにしなければならない。

### (13) 弁証法的唯物論

都立町田高等学校 寺島甲祐

#### <精選の視点>

唯物論とは、永遠の存在を物質におく世界観・人生観である。すなわち、精神的なものを第一次的、根源的なものとみなす観念論に反対し、マルクスやエンゲルスが主張するように、「存在が意識を規定する」と考えたり、「物質的なそして感覚的に知覚される世界が唯一の現実的な実在である」とみなしたりする哲学上の見地である。

こうした唯物論が存在の根拠とみなす物質や物質の運動の仕方をどのように解釈するかによって、同じ唯物論にもいろいろな形態がある。即ち、初期ギリシア哲学の自然哲学やエンゲルスの主張するイギリス経験論（私はこれには異論があるが）、さらには18世紀のフランス唯物論などが考えられるが、このような唯物論を高次の段階に引上げ、最も科学的に唯物論を展開したのが、マルクス・エンゲルスによって確立された弁証法的唯物論であると見做される。普通、弁証法的唯物論はプロレタリアート解放の精神的武器とされその後レーニン、スターリン、毛沢東らによって発展させられるが、その世界観の指導、理解のためには、直接マルクス・エンゲルスの著書によるべきであって、レーニンらの哲学は弁証法的唯物論の実践理論であると解するのが妥当であると考えられる。

#### <指導のねらい>

現代の高校生には、マルクス主義は非常な魅力と関心を持つものであるがこれを適確に把握する者は皆無であるし、直観的、独断的にとらえているに過ぎない。即ち、科学的であるマルクス主義を最も非科学的にとらえているに過ぎないであろう。そこで(1)マルクス主義の唯一の哲学が弁証法的唯物論であり、その適用である史的唯物論であることを先ず指導しなければならな

い。②さらに唯物弁証法の理解にはヘーゲルの弁証法の理解が極めて大切であることを指導する必要がある。周知のごとくマルクス・エンゲルスはヘーゲルから弁証法をとり、次にフォイエルバッハから唯物論をとり、ここに新しい弁証法的唯物論を樹立した。マルクスはその「神聖家族」の中で、自分がいかにヘーゲルからさって、いかにフォイエルバッハの新思想に熱中したかを述べ、エンゲルスもヘーゲル哲学が衰へてフォイエルバッハの思想が隆盛になったことについて、当時の若い思想家たちが、いかにフォイエルバッハの唯物論を歓迎したか、またヘーゲルの思想は徹底的につぶされたにせよ、その思考方法はかれらの論理の唯一の武器として取り入れられたのである。否、ヘーゲルの弁証法以上にかれらの論理は発展していないとさえいえるのである。

(3)すなわち、弁証法的唯物論はヘーゲルが形而上学的論理として用いた弁証法を従来の形而上学的唯物論とを形而下の世界に、すなわち人間社会の変化の中に導いたものに過ぎないのである。それゆえ、弁証法的唯物論は人間社会の変化、ことに経済現象をとく一つの論理なのである。マルクスは社会の変化をみるのに、その原因に精神的要素を少しも認めず、そのすべてを唯物的要素、特に経済的事実に根拠をおくのである。その限り、弁証法的唯物論はとりもなおさず経済的唯物論となるものであり、本来の目的が哲学ではなく、哲学をもって経済現象を論理づけようとしたとさえ言えるのではなからうか。カール・カウツキーが「マルクスは何らの哲学をも宣明したのでではなく、すべての哲学の最後を宣明したので過ぎない」とのべている事も首肯できるのである。

以上三点を指導する必要があるが、結局は弁証法的唯物論の指導内容そのものによって自ら理解されてくるものと考ええる。

#### 〈指導内容〉

弁証法的唯物論はその根底に観念論と従来の形而上学的唯物論に対する徹底的な批判と闘争があるとされる。

まず、弁証法的唯物論は觀念論的見地に反対して、あくまでも唯物論の立場に立つことはいうまでもない。(1)すなわち、人間そのものも自然の産物であり、人間のもつ心の現象も多くの自然現象中の極めて小さな一部であるに過ぎないと考える。人間は他の動物から派生したものであり、世界のはじめに生物はなく、地球の冷却するにつれて、生命が生じ、それが進化して動物が生じ、動物より人間が派生したと考える。(2)したがって、物質が人間の母であり、思想の母であるとする。「思想と意識は人間の脳髓の産物である」と理解する。「われわれは思想を思惟する物質から引きはなすことはできない」精神は物質が一定の方法で組織されるときにあらわれる。精神のない物質はありうるが、物質のない精神はありえない。思想は脳髓なしには存在しないし、欲望は意欲する有機体なしには存在しないと主張するのである。(3)またカントの主張するごとく、われわれの認識しえぬ「物自体」などはありえぬととく。弁証法的唯物論は、科学と実践の力によって、客観的世界とその法則をどこまでも認識し得るととく。われわれが認識しえぬ物は結局、「認識しうる可能性をもちながらまだ認識されていないところの物」自体である。「物」自体は弁証法的に進展していくものである。つまり認識の弁証法的発展にしたがって、「物」自体は次第に「物」自体でなくなっていくものであると主張する。(4)最後に、実践が真理認識の基準であって、人間的思惟に対象的真理があたえられるかどうかということは、理論の問題ではなく実践的な問題であると考え、実践の優位性を強調するのである。

以上が觀念論に対する弁証法的唯物論の根本的立場であるが、次に弁証法的唯物論は従来の形而上学的唯物論に対しても批判の立場に立つ。すなわち、従来の唯物論が、(1)物を固定の程においてとらえるのに対して、弁証法的唯物論は、物を他のすべての物との連関においてとらえ、一つの物は他の物へ変化、発展するものとしてとらえるのである。(2)ところでこの変化、発展は物に含まれている矛盾・対立の闘争に基因すると考えるのである。物理学における作用と反作用、電気における＋と－、物質における粒子性と波動性とい

うように、すべての現象は「砂粒から太陽にいたるまで、原生生物から人間にいたるまで」矛盾・対立物の統一および闘争によって成立し、変化、発展すると考えるのである。(3)さらに、質を量から切り離して絶対化したり、質的变化を量的変化に引きもどしたりする形而上学的方法に反対して、唯物弁証法は物の量的変化の蓄積が或る一定の限界に達すれば、飛躍的に、急激な質的变化となるとする。氷点に達した水の氷への転化のごとく、古い質的狀態から新しい質的狀態へ、より単純なものからより複雑なものへ、低いものから高いものへの発展が行なわれると考える。資本主義社会から社会主義社会への変革もこの質的变化に基づくのである。(4)また、物の変化は自己否定によって行なわれる。否定によって生じた新しい物はさらに否定によって次のものに転化する。これが否定の否定の法則である。

以上の四点が弁証法的唯物論の根本法則であるが、そのほか弁証法的唯物論には多くの重要なカテゴリーがある。すなわち、(1)本質をつかまなくては現象は理解されない。(現象と本質)(2)内容は形式よりも優位性をもつ。(形式と内容)(3)すべてのものは原因・結果の関係の中にある。(因果性と交互作用)(4)すべてのものが因果性の中にある以上、偶然な原因を必然性とする替えてはならない。(偶然性と必然性)(5)意志の自由は、根本においては客観的に決定された相対的なものであって、絶対的自由などは存在しない。自由は闘争によって戦いとられるものである。(自由と必然性)

以上が弁証法的唯物論の世界観の骨子であるが、非常に理解しにくく指導しづらいと思われるので、実際の指導においては、弁証法的唯物論の社会領域への適用理論とされる史的唯物論によって指導されるのが最良と思われる。

## (14) 観念論

都立町田高等学校 寺島 甲 祐

### <精選の視点>

観念論とは永遠の存在を人間の理性・精神・心的なものにおく世界観・人生観である。しかし、われわれが認識の対象を如何ように認識するにせよ、われわれが理性でもって存在の真理を認識する以上、あらゆる哲学は本質的に観念論であるといえるであろう。普通、「意識が存在を規定する」のが観念論であり、「存在が意識を規定する」のが唯物論であるという見方をするのであるが、私はこのような区別は、無意義であるように考える。

しかし、われわれの理性のカテゴリーは、何かを実体とし、他を付随性として区別し、関係づけるものであるから、お前のいう意見は妥当性がないという主張に従うならば、観念論とは存在よりも精神の方を根源的なもの、実体であるとみなす形而上的見地である。しかし、観念論はいきなり物体・身体・自然などの物の存在を否定し去るものではない。ただ、物質を精神的なものの外化、所産、客観化、現象形態であると説明するのである。

このような観念論はイデアを真実在とするプラトンや、根元的一者から万物の発生、流出を説くプロティノス、あるいは中世のスコラ哲学などにもみられるが、このような根源的な精神を一個の実体とみなす実体論的観念論から、これを能動的作用的なものとみなす現実論的観念論に転化したのが、カントに始まるドイツ観念論である。なかでも、カントの二元論的超越論的観念論を克服して、これを一元化し、絶対的論理的観念論を樹立し、史上最大の観念論体系に到達したのがヘーゲルである。この意味において観念論の代表的哲学者として、ヘーゲルを精選したのである。

### <指導のねらい>

ヘーゲルの哲学は絶対者の把握を目的としている。カントによればわれわ

れの理性が理論的に認識できるのは現象界、経験界のみであって、絶対者はけっして、理論的認識の対象となりえないものであった。ヘーゲルはむしろ絶対者の概念的把握こそが哲学の究極目的であり、カントの考え方と鋭く対立するものである。ここにヘーゲルがカントの立場にとどまりえず、やがて有限の事物の根底に絶対者が存すると主張するシエリングの立場に移っていた理由がある。しかし、ヘーゲルの絶対者の把握は、絶対者を直観的にとらえようとするシエリングとも異っている。ヘーゲルの場合には絶対者は有限なものを自己の中を含むのであり、シエリングのような有限者の背後に、有限者と対立する絶対者ではない。それは、有限者を媒介として弁証法的に自己自身を展開せしめていく絶対者にほかならないのである。ここに、有限者に対立する絶対者を認識の対象より退けるカントの立場と、絶対者を取って、有限者を退けるシエリングの立場とを総合統一するヘーゲル独自の思想がある。

以上の観点に立って指導することが何より大切であると思われる。

#### 〈指導の内容〉

ヘーゲルは絶対者が有限者を通して自己自身を展開していくものと理解するのであるが、ヘーゲルによるとかかる絶対者とは精神にほかならなかった。それは、永遠に同じ現象をくり返す自然には発展がなく、真に発展していくものは精神でなければならぬと考えたからであろう。かくして、ヘーゲルは「絶対者は精神である・・・これが絶対者の最高の定義である。この定義を発見し、この定義の意味と内容を理解すること・・・これがあらゆる教養、あらゆる哲学の絶対的目標であったとってよかるう」と述べている。しかもこのような「精神の認識は最も具体的な認識であり、それ故に最も高く、そして最も困難な認識である」ことはいうまでもない。われわれはヘーゲルにおいて絶対者（精神と呼ぶほかに、絶対的理念とも称している）が如何に把握されているかをヘーゲルの哲学体系より考察してみなければならない。

ヘーゲルの哲学体系といえば、「エンテュクロペディー」における論理学→

自然哲学→精神哲学という構成が考えられる。ヘーゲルによれば、論理学は「理念そのものの学」であり、自然哲学は「自己の他在のなかにある理念の学」であり、精神哲学は「自己の他在から自己自身へ還帰する理念の学」である。もちろん、論理学より自然哲学、自然哲学より精神哲学に段階的に発展するに従って、絶対者は概念的に自覚されていくのである。というのは、ヘーゲルによれば、「理念（絶対者）は絶対的に真なるものであり、概念と客観性との絶対的統一である」からである。シェリングの場合は絶対者は有限者の背後に存する絶対的な無差別者であったから、われわれはかかる絶対者を把握する場合には、ただ知的直観に頼るばかりではなかった。なんとすれば概念的認識はそれ自身カテゴリーに基づくものであるから、いろいろな差別を持っている有限者、客観性を把握するに適しているのであるから、かかる無差別的な絶対者を把握するには、直観に頼る以外に方法はないのである。しかるにヘーゲルの場合には絶対者はシェリングと異なって差別的な有限者を含むものであるから、われわれは概念的認識を通してのみ絶対者を認識するものである。

それゆえヘーゲルにあっては、絶対者の概念的認識を究極的に目ざすとはいえず、その出発を有限的事物の認識から出発しているといえるのである。即ちヘーゲルの体系への入門書とみられる「精神現象学」が意識を起点として出発し、意識とその対象との対立を克服して概念と客観性との絶対的統一としての絶対知で終わっているように、また「論理学」が、この主・客統一の絶対知から出発して、その分化に向い、それが再び主・客統一の主観的なものに到達していることを見ても明らかなことである。

更に絶対者が概念と客観性との統一であるという考え方を理解するために、ヘーゲルの「精神哲学」を検討することが有益である。ヘーゲルによれば、「自己の他在から自己自身へ還帰する理念」としての精神は、さらに自己内において三つの発展段階を経過する。第一は自己自身への関係という形態において存在する精神であって、精神の概念が精神自身に対して類になる主観

的（個人的）精神である。それに対して客観的精神とは、精神自身によって造り出された世界としての実在態（法・道徳・人倫）という形態において存在する精神である。しかし、客観的精神は実在態を精神によって造り出されたものとして持っているものであって、概念の実在態がまだ概念にふさわしいものとなっていないので、まだ概念とその実在態との不一致が見出される。かくして単なる理念の概念に過ぎない主観的精神も客観的精神もなお有限である。それに対して絶対的精神は精神の客観態と精神の概念との統一のなかに存在する精神であり、しかもこの統一は絶対的なものである。自ら理念を自覚した絶対的精神において概念と実在態との統一が実現されているから、絶対的精神は自由で無限な精神なのである。哲学はこの絶対的精神の概念的自覚であり、この点でまだ概念的自覚に到達しない芸術と宗教との統一なのである。

以上によってヘーゲルの絶対者とは、「己れを精神の形態において知るところの精神であり、乃至は概念的知識であり」「自己自身を、しかも自覚的に精神として遍歴する」ところの精神であるといえるのである。それは意識とその対象との対立を克服したときに把握できるものであり、思惟と存在との同一性、理性的なものと現実的なものとの一致、即ち本質と現実との一致そのものであるといえるであろう。否、むしろ現実を本質に還元させることによって、把握できるとヘーゲルは主張するのである。ここに、木質を現実の外化とみなし、あくまでも現実に根源性を認めようとするフョイエルバッハやマルクスの立場との根本的相違があるのである。

## (15) 創 造 論

—ユダヤ教・キリスト教・イスラム教—

洗足学園第一高等学校 高野啓一郎

### 〈精選の視点〉

「倫理・社会」の内容について、実際上は、各教師の人生観・世界観の立場からする一種の選択がおこなわれることは言うまでもない。そこにはやはり各人の人生観な目的観が働いているわけであるが、さらにこれを万人の納得する立場からおこなう「精選」ともなれば、きわめて困難の多い作業となるろう。「倫理」又は「社会」だけならば、精選もさして困難ではあるまい。しかし「倫理・社会」であることが、この科目の特徴であるとすれば、それは現代社会に有効に働きうる青年の倫理的知識であることを目指しているものであるろう。このような立場を広く包摂しうるものの一つに、「存在論」があるというのは私の変らぬ態度であったから、「精選」ということに対する私の態度も迷いのないものではあったが、第三分科会における研究討議が、種々の立場をふくみながら「存在」を共通の問題意識とするようになったことは大きな進歩であったと思う。けれども当然その場の「存在」という語の意味内容は多義的であることも免れなかった。先人の思想の紛れなき客観的伝達をもって「存在」ということも可能かもしれないし、また「存在論」にいうように「常識が在ると判断するようなあらゆる在るもの」と規定することもありえよう。……「存在論」の意味における「存在」の語義は、常識的であるがゆえに多くの曖昧さとさらには先験性をふくむものとしての批判も多い。哲学的には、カントによって「形而上学は、アリストテレス以来何らの進歩も後退もない……」といわれたその当の「形而上学」に他ならない。

しかし、人間理性の限りなき洞察力によって「常識的存在を明澄化することによってその存在の第一原因を探究する」ことをもって、形而上学の方法と目的と見做すとき、そこに近代自然科学と近代哲学との諸成果を総

合的に基礎づける形而上学の役割が見出されるとするのが、「形而上学」の復興としての「存在論」が主張される所以であり、心理学と社会学と倫理学との総合精選の基盤が確立されうると考えるものなのである。カントのいう伝統形而上学への批判は、18世紀啓蒙主義の時代背景の特徴を避けることはできず、つまり宗教改革によるビエティズムと当時の自然科学的発見の強い影響を受けている。自然科学そのものの成立基盤が問い直される現代にあっては、科学への形而上学的批判と、他方、科学による形而上学の再構成とが必要とされているのだと主張するのは必ずしも独善的態度ともいえないと思う。

#### 〈指導のねらい〉

- (1) 創造論の代表としてユダヤ教、キリスト教、イスラム教をとり上げる。
- (2) この三宗教が旧約聖書の創造論に立ち、アダムを人類共同の祖先としていることを指摘する。
- (3) そのそれぞれの発生と発展過程にふれその三者が血で血を洗う闘争をくり返した史的現実にもふれる。
- (4) それにもかかわらず宗教が必要であるとすれば、その役割は何であるかを現代的に問い直してゆく。ここで当然「無」の宗教である仏教にもふれることになろう。

#### 〈指導内容〉

- (1) 西欧思想はヘレニズムとヘブライズムとを基盤としてイスラミズムを加えた合成文化である。
- (2) ユダヤ教、キリスト教、イスラム教は同一の創造論に立脚している。
- (3) それにも拘らずそこから出てくる倫理観の差は何か。
- (4) しかもその中で歴史の現時点におけるキリスト教団の優位の理由を考察する。

さて、我々日本人のイスラム文化に対する知識はまことに貧しい。イスラム寺院が、代々木上原と神戸元町にあって、毎日礼拝がおこなわれていることも知られていない。アラブ連合のナセルに対する民族的共感をもつ人は多いが、その宗教教義を理解する人は少ない。イラン・イラク・パキスタン・インド・インドネシア、及びアラビアやアフリカの諸民族についても同様で

あろう。けれどもこれらの国々の文化が、根深くヨーロッパ文化圏と関係し、むしろヨーロッパ文化圏こそ実は先進サラセン帝国のそれに影響されたことは知られていないのである。西欧文化を、ギリシア、ラテン文化のゲルマン的継承そのもの如くに見たのは、彼ら西欧人の主張を鵜呑みにした迂闊さとも言えよう。長い鎖国の中に開国し、急遽としてヨーロッパ啓蒙思想の洗礼を受けた我々は、あまりにも西欧崇拜の中に近代化への道を突進したのであった。ここでは先ず、存在論哲学の系譜から見れば、ローマ帝国崩壊後、ギリシア哲学はビザンティン帝国を経てサラセン帝国に伝播されアラビア哲学に吸収され、イスラム文化圏に、温存されながら、逆に12世紀に入って、或はスペインから、或はイタリアから西欧に再輸入され、その神学的哲学的基礎づけによりルネサンスの人文主義への先取りをおこなったのである。まことにローマ帝国の崩壊からフランク帝国の成立までは、アウグスティヌスらの教父的護教時代であった。新プラント派哲学による神学解釈は、ギリシアにおける、「帰納的方法論」<sup>11</sup>としてのアリストテレス形而上学を異端の「物質の学問」として遠く小アジアから新興のサラセン帝国にその生息地を求めざるをえぬように強いたのであった。而も新興ゲルマンの文化は、たとい自らの手によって破壊したローマ文化に馴化される過程にあったとしてもなお高度なイスラム文化圏には及びもつかなかったのである。こうしてギリシアの自然哲学の伝統は、プラトン主義と東西の領域を分けて温存されることになったのであった。こうしてイスラム文化圏に尊重され継承されたアリストテリズムは、アラブ民族の素朴謙遜の念によって却ってよく本来の特徴を保って十字軍の攻防も衰微するころ、イベリア半島のイスラム王国に再上陸することになったのである。こうしてラテン、ゲルマン思想界、わけてもキリスト教界は大きな神学、哲学上の変革を経験することになる。

イスラム教によって説かれる所では、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教は、ともにセム系種族の宗教であり、その聖典は時代と場所とを異にしても同一の神の同一の啓示の夫々異った形式であると考えられている。事実コラ

ーンの中には旧約、新約からの借用が多く見られるが、しかしアラーの神は、「これが唯一なる神、永劫不滅、子もなく親もなく、ならぶものなき御神ぞ」（コラーン112章）となるから、イスラムから見れば、ユダヤ教は選民思想による民族宗教にすぎず、キリスト教のいう神の子イエスは、単なる一個の予言者となり、最大最高にして最後の予言者たるマホメットの先駆者にすぎない。アラーは、「生みも生れもしない」その特質により一切の人間との血のつながりは否定され、「天に在す我らが父よ」という呼びかけも無意味となる。しかし、神は宇宙の創造者であり、イエスは処女マリアから生れ死して昇天した奇蹟はみとめられるが、その彼が天なる父の神の右に座すことはありえない。人間が天啓に従うなら、神は罪を許して永遠の生命を与えるという点では一致しているものの、イエスにはその仲介の能力はみとめられず、彼は、アダム、ノア、アブラハム、モーゼらと同列の予言者の一人にすぎない。このときその他のイエスの殆どの奇蹟は消え、マホメットもまた最高の予言者として「昇天」以外のいかなる奇蹟もない。この予言者は実行と政治の人であり、また一夫多妻をみとめ、女性隔離を美德とするアラブ的風俗に立つ現実主義者でもある。アラーの神の存在は、このすべての形と色を絶して、日月の運行、四季の推移によってのみ知られる宇宙の根源であり、運動の原動力であり、真善美のすべてである。従っていかなる偶像的表示をも許さない絶対の完全体であり、この神性に基いて天命が生ずる。サラートと呼ばれる日に5回の礼拝が根本の信行ともなる。彼らがともに「天啓の民」として扱うユダヤ教徒やキリスト教徒への憎悪は深く現代政治に關っている。

#### ＜参考文献＞

「イスラーム」（蒲生礼一著） 「イスラーム概説」（日本ムスリム教会）「中世文化史」（C・H・ドウソン著）「現代存在論の諸問題」（上智大編）

## 10 インドの世界観②—仏陀と原始仏教—

### —Buddha and the early Buddhism—

都立墨田川高等学校 細谷 齊

#### 〈精選の視点と指導のねらい〉

仏教とは、ゴータマ、シッダルタによって体験された人間自覚の徹底体験とその教えをいう。ヨーロッパ思想は、古代ギリシアにおける人間理性の自覚発生と、イエスによって説かれた愛と救いを中心に教えるキリスト教にその最高の根拠を置いているが、これは近代以降の経験主義や合理主義の思想、更には自然科学の認識の場合も同様である。即ちヨーロッパの思考法の中には、常に自然と人間との対立観や、神（絶対者）と人間との融和や抗争などが根底に意識されており、すべての存在や現象を概念的に理解し説明しようとする傾向がある。それ故に神と雖も論理的に証明された上でその存在を認められたり（近代の理神論等）、神の死を宣言したり（ニーチェ）、更には神の有害性を問題にする（マルクスの唯物論等）のだといえよう。これらのいずれの場合に於ても人間理性の信仰に対する勝利、優越がその根本にあると考えられ、まさにこのことが、合理主義的思考の発達を促進し、市民社会を成立させ、今日の科学文明を生んだと言えるであろう。しかし乍ら今日、機械文明の圧倒的な優越の下で、人々は自己の存在に不安を抱き、ヨーロッパの伝統思想の行き詰りを意識しつつある。疎外と倦怠を突破するのに真の力となるような人間把握を求めているといえるのだ。そしてこのような状況下に、徹底的な人間解明を試みる例として、私達は、人間精神の内奥のメカニズムを明らかにしようとするフロイドの心理学や、自己の存在の確実性を主体的な責任において引き受けようとする実存哲学、更に社会経済構成体の構造分析とその中の矛盾の変革により、人間そのものを変えて行こうとする科学的唯物論の実践的な哲学などをみることができる。これらの理論と実践はそれぞれ有力なものである。しかし乍ら、これらもその根本において、



ヤーに於て大悟成道を得たとされる。

<比丘らよ、予は不死を証得した・・> (律大品) この後仏陀は自己が得た眞理を弟子達に教え始めるのである。この体験は論理的、認識論的には所謂四諦八正道と五蘊無我説として展開されるのである。しかし乍ら仏陀の正覚はガヤーにおいて完成されたのではなかった。ガヤー成道以来40年間仏陀は各地を遍歴して人々に伝導した。仏陀も80になった。その入滅前の一年間の様子は「大般涅槃經」の中に見られるわけであるが、入滅直前において仏陀が眞の正覚を得た事が証拠づけられるとされる。

<アーサンダ、今日チャーパーラチャイチャに於て、今実に、ayu-samkharo ossato (アーンサンカーラが既竭した、我執的錯覚的觀念(精神)作用が消えうせた)の体験を得た> (大般涅槃經) クシナーラの成道完成

(cf Nachdemer . . . entäußert sich Buddha in besonnener Bewußtheit der als Ursache des physischen Lebens in ihm wirkenden Seelenkraft (II·Beckh) 間違いだらけのアーンサンカーラにとってかわって、仏陀の心中では常に適正な精神作用 vāya-dhamma samkhara が働き出した。これが仏陀の涅槃の意味なのである。人間の精神作用は常に交転極まり無きもので、霞か雲の様にとらえどころがない。とらえどころのないものを年中追い廻して、何かつかんだような錯覚に陥ることが私の迷いなのであることに気がついたのだ、理論としてでなく、全存在の根底から、これが四諦八正道、五蘊無我説となって説かれるわけである。四諦八正道、五蘊無我説は略して仏陀最後の教え、四諦八正道、五蘊無我の教えを通して仏陀が言わんとした事は、結局自己の確立であるという様に考えても、大過あるまいと思う。常日頃仏陀は次の様に教えた、涅槃に到るための方法論は同時に涅槃それ自体であるのだ<・・自智を以て各自の依拠とし、其の他を依拠としてはならない。正智を以て正しい依拠とし、其の他を依拠としてはならない>

これに続いて、解脱に至る体験的修道法を二回説いた、マハーヴナの衆堂にて<比丘達、今、特にお前達に告げる vaya-dhamma samkhara (身心活動が適正 dhamma たるべき精神作用の機要)と各自自分の好みに放けられずにはまればよい>さらに入滅直前クシナーラの沙羅林にて次の如く教えた。<比丘達、今此の時に臨んで特にお前達に告げて置く、vaya-dhamma samkhara と己に放せずには極まればよいのだ、これが世尊の最後の詞であった> (cf Und an die Jünger richtet Buddha seine letzten Worte: "Wohlan, ihr Junger, ich rede zu euch: Vergänglich ist der Daseins-Bildekräfte Wesen, bleibt immer fest im strebenden Bemühen" (H. Beckh, 仏教上、岩波文庫、渡辺照宏訳 P108 汝弟子達よ、さあ汝達に告げる、生存を構成するもろもろの力の本性は無常である。いつもしっかり勤勉に努力するがよい。)

(Theh the Exalted One adressed the brethren, and said: - Behold now, brethren, I exhort you, saying: - "Decay is inherent in all component things / Work out your salvation with diligence /" (Rhys Davids) これらは、人間誰しもこれが自分の立場であるといったようなものを、たとえば理念 Idee といった形で所有しているが、しかしそれはサンカーラ samkhara の妄想の所産であって、そんなものに執着している限りは本当の解脱ではないという徹底した教えである(大野達之助) ことを幾度も自らに問いかけねばならない。

#### <参考文献>

基本図書 富永半次郎先生 「釈迦仏陀本紀」非市版本

「仏教上」Buddha und seine Lehre, H. Beckh 岩波文庫 ¥100

「講座東洋思想 5 仏教思想 I」中村元他 東大出版 ¥700

「知恵と慈悲」梅原、増谷編著 角川書店 ¥580

「ブッダの言葉」中村元訳 「法句経」萩原雲来訳 岩波文庫

## 4 特別分科会

世話人 中村新吉  
金井 肇

### (1) 本年度の研究主題

#### 「学習指導要領の改定に関する研究」

本年度の研究主題は前年度からの継続研究であり、文部省における指導要領改定の作業と相応する形で、研究活動が進められた。分科会活動のとりまとめには、継続研究の上から、豊多摩高校 金井肇先生と大山高校 中村新吉の二人があたった。

### (2) 研究経過の報告

本年度は、各高校で紛争が発生し、平常の年度よりも研究会を直接には持ちにくかったが、所属会員がそれぞれ研究され、分担してまとめたものを数回の分科会で討議し、改定倫社のあるべき方向や問題点を確認しあった。本年度はとくに2、3の協力者の出席をいただいて、あらゆる方向から全体的に討議し、大きな共通する理解点を見出した。明年度は、さらにそれぞれの分野・章・節にわたって、さらに学習内容の構成、指導方法など具体的に詳細にわたって研究会全体が組織をあげて研究に取り組む必要があるかと判断する。

以下、本年度の分科会活動において問題とされた事項、主要な意見質疑などを要約して、報告致します。

### (3) 具体的な研究経過の報告

#### ① 目標・名称・基本的性格・学年指定などは今のままでよいか。

- 1) 「倫社が果して道徳教育の役割を果しているか」という疑問も出されているが、社会科の一科目として、あくまでも知的な原理的な思索を生徒みずから行ない、そこから生徒みずからが広い視野にたった自分の生き方を考えさせる学習によって、人間のあるべきありかたを涵養させる。先哲などの思索を通して、生徒みずからが道徳的価値を

志向し、道徳性を考えるようにさせることこそ真の道徳への教育であるのではないか。

2) 中学3年の「公民分野」との関連で、高校1年にも道徳教育的なものを組みこむべきではないか、という声もあった。しかし、このことは教育課程の根本的な組みかえを要することである。

3) 高校H・Rとの関連であるが、現在の倫社の内容の一部をH・Rの指導にくり込むことによって、H・Rを充実し、倫社の指導内容をより精選した形で深化させることも考えられる。しかし、現実には、H・Rがかなり有名無実になっている状態である現状に、加えて各担任に倫社的なものを期待することは無理ではないか。結局、H・Rの基本的性格、教育課程における位置づけなどの再検討をまつほかはない。特に、H・Rにおける「望ましい生き方」の主題領域あるいは学級経営において、生徒が「望ましい生き方」を実践できるようにするために倫社の学習内容や倫社担当教師との密接な研究、実践が必須となってくる。

4) 名称については、とくに変更する必要はない。

② 内容的に、基本的性格とからみ合わせて、どのような問題があるか。

1) 基本的性格は、知的側面からの内容展開を大きな柱にしながらも従来とかく欠けていた側面、つまり生徒の柔軟な心情や情感をゆさぶり、それに訴えるようなみずみずしい学習内容も望まれるのではないか。後者によって生徒の魂をゆさぶり、目ざめさせる。いわゆる情感的な開頭ののちに、知的な理論的深まりを前者によって期待する。この二つの側面から、人間や社会のありかたに対する内面的深化をはかり、道徳的資質を養成することが考えられるのではないか。

2) 学習内容の量的側面からの削減をどのようにかはるか、については、学習内容の精選によって現在の平板な総花的な展開から、質的に深まりをもたせた立体的、構造的な学習内容の展開によって克服できるの

ではないか。基本的考え方を教えるものを学ばせることによって、量的側面からの削減をはかる。

- 3) 科目が一科目であるということは一つの体系でもって完結しているということが常である。そういう科目の単一性という視点から考えれば三分野の並置はおかしい。客観的立場にたつて「生き方の問題」を扱うという視点にたつならば、科目の単一性から三分野の再構成をなすことが必須となる。
- 4) 3) の前提にたつて、客観的な認識を「社会」と「人間」の二つの側面から把握させる分野と、主体的な生き方を直接に学ぶ「人生観・世界観」分野とに構成し直しすることが必要であり、それが改善の方向ではないか。
- 5) しかし、「社会」と「人間」という、いわば外的なものとの客観的科学的認識という学問的ワク組をこえて、従来の概念ではわりきれない総合的認識をさせる必要がある。学習内容もそういう意味で、単に心理学的、社会学的なものよせあつめの集成ではなくして、いわば二者の化合物的な新しい「第三の内容」であるべきである。現代社会に生きる青年の使命として、「現代社会と人間」を総合的に認識し、現代社会をよりよくし、また自らがよりよく生きる生き方を探究しようとする意欲しうる学習内容であることが要請されよう。そういう認識と心情的啓発の前提にたつて「人生観・世界観」の分野がさらに深化される段階で展開されるべきである。
- 6) 「人生観・世界観」の分野では、歴史的順序での考察・主題的考察などが考えられる。
  - a 史的考察つまり思想史的展開の仕方では、個々の思想を大きくとらえて、自分の思想を形成するのに役立つ。
  - b 少数の人物、少数のテーマに焦点をあて、生徒にじっくり考えさせ、自分の考えを作文し、作文しながら自分の考えを深める方向が

考えられる。たとえば「ソクラテスの生涯と人から」や「ソクラテスの思想」を研究しあい、自分がどううけとめ、何を得たかなどを記述し、自己の考え方の集積を確めてゆく授業展開ができるように学習内容の構成を工夫する必要がある。

- c 思想の大きなワク組みは、源流思想、近代思想、現代思想、日本の思想あるいは宗教思想、社会思想、道徳的価値と幸福などのように大きなテーマや主題で考えさせていく仕方が考えられる。

たとえば、親鸞の「歎異抄」に5時間位かけて「歎異抄」を通して日本の宗教（仏教）の考え方、生き方を学習させる。その際に歴史的考察と主題的な概論的考察とをおりこむ学習ができるように内容構成する。

- d 現代の社会や人間のありかたについて考えさせる視点をおさえるとともに「日本の思想」にもっと焦点をおく内容展開でありたい。世界の思想を学ぶことは、日本の精神史を批判的に継承し発展させてゆくうえで必要である。

#### (4) ま と め

本年度は昨年度からの継続研究であったが、現行倫社の問題点を出し合い、巨視的な観点からその克服・改善の方向を研究し、以上の概括的な結果をえた。今後、改訂倫社の指導要領をどのように具体化するか、その微視的な方向への研究が求められる。その際に、木を見て森を見忘れることをしてはなるまい。

尚本年度の研究活動においては、特に都立井草高校 増田信先生と東京教育大附属高校 斉藤弘先生のお二人のご指導と示唆におうていること大である。ここに記して謝意を表します。

(報告者 中村新吉)

## 事務局より

東京都立東村山高等学校 村松 悌二郎

人間はいつも心の中に何かをおかなければ生きられないのかもしれない。われわれ教師でいえば、教育のこと、生徒や同僚のこと、自分の研究、そして生活のことなどさまざまであろう。また心が空洞だと感ずるとき、焦燥感とともに、虚しさややり切れなさが、心に充満しないはずはないのである。

僕は、この二年間、やや誇張していえば、倫社の研究会が自分の心をしめていたように思われる。それは、ある種の充足感、充実感を伴ないはしたが一面では、空虚な自分でもあった。幸い、自分の属している研究会が教科のものであったことが、一種の救いとならないではなかったが。

この1月の幹事会に、僕は会の将来を考えて、「事務局組織内規案」なるものを上程し、可決された。

その精神は、一定の人物のみで会が運営されないように、たえず若がえりをする事。人選もできる限り多くの人びとで相談してきめること。事務局員の分掌をきめて、会を皆でもりたてることなどである。

したがって、事務局長も2年を限度とするという方針をとった。だから、僕の任期もこの春で終わる。

都倫研に関していえば、研究部長として、佐々木誠明、井原茂幸両氏に、会報係として、中村新吉、金井肇両氏には、とくになにかとご助力をたまわったことを、ここに深く感謝したい。

なお、新事務局長のもと、新事務局組織を生かし、都倫研がますます発展するように祈ってやまない。

会員諸氏も、新事務局長を支援し、会が一段と前進するよう協力していただきたいと切願する次第である。

S 45. 2, 3

## 東京都高等学校「倫理・社会」研究会規約

1. (名称) この会は、東京都高等学校「倫理・社会」研究会といます。
2. (目的) この会は会員相互の研究によって、高等学校社会科「倫理・社会」教育を振興することを目的とします。
3. (事業) この会は、次の事業を行ないます。
  - (1) 「倫理・社会」教育の内容および方法などの研究
  - (2) 研究報告、会報、名簿などの発行
  - (3) その他、この会の目的を達成するために必要な事業
4. (事務局) この会の事務局は会長在任校におきます。
5. (会員) この会の会員は次の通りです。
  - (1) 正会員 学校またはその他の研究団体に所属して、この会の目的に賛成する者
  - (2) 賛助会員 この会の目的に賛成し、会の活動を援助する団体または個人
6. (顧問) この会に顧問をおくことができます。
7. (役員) この会の役員は次の通りです。任期は1年ですが留任を認めます。
  - (1) 会 長 (1名)
  - (2) 副会長 (若干名)
  - (3) 常任幹事 (若干名)
  - (4) 幹 事 (若干名)
  - (5) 会計幹事 (若干名)
8. (総会) 総会は毎年6月に会長が召集し、次のことを行ないます。
  - (1) 役員を選任
  - (2) 決算の承認、予算の議決
  - (3) その他重要事項の審議

9. (年度) この会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わります。
10. (経費) この会の活動に必要な経費は、会費その他の収入でまかないます。
- 会費は次の通りです。
- (1) 正会員 学校または研究団体を単位として年額1,500円
  - (2) 賛助会費 年額 1口 2,000円
11. (細則) この会の規約を施行するについて、幹事会は必要な細則を作ることができます。
12. (規約の変更) この会の規約の変更は、総会の議決によります。

附 記

- 1. この規約は昭和37年11月20日から施行します。
- 2. 昭和42年度総会で、会計年度と会費の変更がみとめられた。

## 事務局組織内規

S 45. 1. 27 全倫研 共通  
都倫研

1. 事務局は原則として会長校におく（都・全倫研とも規約改正の要あり）
2. 事務局組織は下記の通りである。

事務局長 原則として会長校に所属する

事務局顧問 歴代の事務局長があたる

事務局員

- ア 研究部長・副部長（各1名）
- イ 研究調査部（全倫研のみ6名）
- ウ 広報係（全・都各1名）
- エ 会計（1名）
- オ 分科会世話人（都倫研のみ、分科会互選、分科会で2名）
- カ 大会役員（大会ごとに委嘱する）

### 3. 事務局分掌

事務局長 企画・運営・渉外などの会の実質的な事務にあたり  
会長を補佐する

事務局顧問 同上の目的で事務局長を補佐し助言する

事務局員 事務局員は各分掌にあって、会の運営を円滑にする  
ため局長を補佐する

ア 研究部 会の年間の研究方針をたて、研究活動全体を運営し紀要の刊行にあたる  
分科会世話人は研究部に属し部長を補佐する

イ 研究調査部 調査活動の企画・実施・集計・分析等にあたる

ウ 広報係 会の記録、広報活動、会報・名簿の作成にあたる

エ 会計 会の会計にあたる。ただし局長が代行することもできる

オ 大会役員 事務局長 企画・運営の最高責任をもつ

庶務・連絡 局長を補佐する

受付・会計 文書配布物、名簿、会計にあたる

司 会 総合司会、研究発表、研究討議、懇親会

議長 総会議長

記録 会の広報部を中心にして組織。文書記録、テープ

写真

接待 来賓その他の接待

#### 4. 事務局任期

ア 事務局長は原則として2年とする

イ その他の局員は1年であるが、再任、兼任をさまたげない。

#### 5. 人 選

事務局長の人選は幹事会でみとめられた人事委員会があたる。

人事委員会の人選は、会長と事務局長が、原案をつくり幹事会にはかる。

また会長・局長・顧問は原則として委員会のメンバーに入ることとする。

ただし、事務局員の人選は会員の互選による。

(この内規は昭和45年度以降実施する)

昭和44年度 都倫研紀要 8

発行 昭和45年3月25日 (非売品)

著作者 東京都高等学校「倫理・社会」研究会

代表 徳久鉄郎

印刷 (株)第一印刷所東京工場

東京都台東区松が谷4-28-2

電話 (843) 4266(代)

発行者 東京都東村山市恩多町4-1003

東京都立東村山高等学校内

電話(0423)92-1235

東京都高等学校「倫理・社会」研究会

会長 徳久鉄郎

